太宰府市の文化財第82集

大宰府条坊跡28

—御垣野・隈野線道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成17年
太宰府市教育委員会

太宰府市の文化財第82集

大宰府条坊跡28

—第239・240・241次調査—

平成17年
太宰府市教育委員会

『大宰府条坊跡28』正誤表

大宰府条坊跡第239次調査　出土遺物一覧表(2)	
誤	正
S-33暗茶褐色粘質土	S-33淡茶褐色粘質土
大宰府条坊跡第240次調査　出土遺物一覧表(1)	
誤	正
S-04茶灰褐色土	S-04灰茶褐色土
報告書抄録	
誤	正
条坊 【鷹山推定案】	条坊 【城山推定案】

大宰府条坊跡第239次調査区から二日市駅方向を望む（北東から）
※最も手前から第242次・第239次・第241次・第240次の各調査区が確認できる。

大宰府条坊跡第240次調査区から天満宮・宝満山方向を望む（南西から）

巻頭図版 2

大宰府条坊跡第241次調査区から二日市駅方向を望む（北東から）

大宰府条坊跡第240次
SK005 蓆検出状況（東から）

大宰府条坊跡第240次
SK005 木胎漆器椀検出状況（西から）

序

本書は、御垣野－隈野線道路整備事業に伴い、平成16年度に発掘調査を行いました大宰府条坊跡第239次・第240次・第241次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書です。

大宰府条坊跡は、大宰府政庁跡の南側に広がる広大な都市遺跡です。今回はその東側、古代寺院般若寺の北側丘陵裾部の三ヶ所で調査を実施しました。ここでは飛鳥・奈良・平安時代を中心として近世に至るまでの遺跡・遺物が確認され、古代の開発が始まった当時の状況やその後の土地利用についての情報を得ることができました。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、文化財愛護の精神が高揚することを心より願います。

最後になりましたが、文化財に対してご理解いただきました、関係各位ならびに諸機関の方々に心からお礼申し上げます。

平成17年3月

太宰府市教育委員会

教育長　關　敏治

例言

1. 本書は、太宰府市朱雀４丁目2641－２、178－１外、2630－２で行った大宰府条坊跡第239次調査・第240次調査・第241次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、地区道路整備事業による道路予定地の開発に先立って平成16年度に実施したものである。
3. 調査は、太宰府市教育委員会の監理の下（担当井上信正）、大成エンジニアリング株式会社に委託し、同社主任調査員作田一耕ならびに橋澤道博が担当・補助し、さらに同小林貴郎が補助した。
4. 調査区のグリッド設定に伴う測量は、株式会社ガイアエンジニアリングが行い、国土調査法第Ⅱ座標系を基準としている。したがって、本書の図中に記載される方位は、特に注記のない限り座標北（G．N.）を指している。
5. 遺構実測図および遺構配置図は設定されたグリッドを基準として各担当者が作成した。なお、本書において掲載した全体図については調査した遺構面との関係を踏まえて、整理段階で編集したものも含まれている。
6. 遺構の写真撮影は各担当者が行い、空中写真は有限会社空中写真企画が行った。
7. 遺物の実測は、上記担当者の他、久世深雪、白井順子、藤田益美、米澤佳子、川井ナツ子が行った。
8. 図面の浄書は、橋澤、白井、藤田、橋都英明、船澤郁代が行った。
9. 遺物写真の撮影は、各担当者が行い、PhotoShopによる加工と仮図版作成を齋木隆浩が行った。
10. 作表は各担当者の他、一部の入力を中川佐知子が行った。
11. 本書に記載される遺構番号は、以下の要領で理解される。なお報告の中では、遺跡名、調査次数を略するものである。

条　239　SD　001

遺跡名　調査次数　遺構種別　遺構番号

12. 本書に使用した分類は、基本的に以下のものによっている。

土器　『大宰府条坊跡Ⅱ』太宰府市の文化財第７集　太宰府市教育委員会　1983年

陶磁器　『大宰府条坊跡ＸＶ―陶磁器分類編―』
太宰府市の文化財第49集　太宰府市教育委員会　2000年３月

須恵器　『須恵器集成図録―第五巻西日本編―』雄山閣出版　1996年

製塩土器　森田勉「焼塩壺考」『大宰府古文化論叢』下巻　九州歴史資料館　1993年

分類は井上の指導の下で実施し、各担当者が補助した。なお、陶磁器分類に際して森田レイ子の助言を得た。

13. 第240次調査で出土した磨については、森山哲和氏の技術協力を得て、現地での剥ぎ取りを実施した。
14. 各遺構・遺物報告は各調査担当者が執筆した。担当内容については、Ⅳ．調査整理の方法を参照していただきたい。
15. 出土遺物および図面、写真、デジタルデータ等の記録類は、太宰府市教育委員会が保管している。

目次

Ⅰ．調査地の位置と歴史 ……1

Ⅱ．調査体制 ……6

Ⅲ．調査に至る経緯 ……7

Ⅳ．調査整理の方法 ……7

Ⅴ．調査の概要 ……8

（1）大宰府条坊跡第239次調査

1. 調査の経緯および調査・整理方法 ……8
2. 層位 ……9
3. 遺構
   （1）第1遺構面（溝　その他の遺構）……11
   （2）第2遺構面（溝）……16
   （3）第3遺構面（溝）……16
4. 遺物
   （1）第1遺構面（溝　その他の遺構）……16
   （2）第2遺構面（溝）……21
   （3）第3遺構面（溝）……22
   （4）整地層・堆積層 ……22

（2）大宰府条坊跡第240次調査

1. 層位……25
2. 遺構（第1遺構面）（土坑　その他の遺構）……29
3. 遺物（第1遺構面）（土坑　その他の遺構）……34
4. 遺構（第2遺構面）（土坑・溝　その他の遺構）……43
5. 遺物（第2遺構面）（土坑）……43
6. 遺物（堆積層）……45

（3）大宰府条坊跡第241次調査

1. 層位……49
2. 遺構（第1遺構面）（掘立柱建物跡・土坑・溝　その他の遺構）……55
3. 遺物（第1遺構面）（掘立柱建物跡・土坑・溝　その他の遺構）……55
4. 遺構（第2遺構面）（土坑・溝・畝溝　その他の遺構）……73
1. 遺物（第2遺構面）（土坑・溝・畝溝　その他の遺構）……73
6. 遺物（整地層・堆積層）……78

Ⅵ．まとめ ……80

付表

掘立柱建物・溝・その他の主要遺構の座標方位一覧
大宰府条坊跡第239次調査　遺構番号台帳
同　出土遺物一覧表
大宰府条坊跡第240次調査　遺構番号台帳
同　出土遺物一覧表
大宰府条坊跡第241次調査　遺構番号台帳
同　出土遺物一覧表

写真図版

大宰府条坊跡第239次調査　遺構
同　出土遺物
大宰府条坊跡第240次調査　遺構
同　出土遺物
大宰府条坊跡第241次調査　遺構
同　出土遺物

報告書抄録

Ⅰ．調査地の位置と歴史

福岡平野の南東部に位置する太宰府市は、福岡平野を形成した河川の一つ御笠川の上流に位置する。ここは北から東にかけては三郡山系、西から南にかけては背振山系と、両山系に囲まれた狭い盆地状の平野で、この南東は筑紫平野と接している。こうした地理的条件のため、ここは古来より福岡平野と筑紫平野を結ぶ交通路上に位置しており、また北の宇美平野や筑豊へも向かう交通路も古くからあったと見られる。

こうした太宰府市域では、後期旧石器時代から近現代までの遺跡が確認されているが、この中で特に目立つのが、律令官衙「大宰府」が置かれた古代から、中世までの遺跡である。

太宰府市には、7世紀中頃の白村江での敗戦により国際的緊張が高まり、水城・大野城・そして基肄城などの軍事防衛施設が築かれた。その後7世紀末から8世紀初頭になると古代の西海道九国二島を統括し外交機能も有した地方最大の官衙「大宰府」が、水城・大野城・基肄城といった防衛ラインに囲まれた内側に設置され、大宰府官衙の周辺には、都城のように都市計画に従った計画地割を持ついわゆる「大宰府条坊」という古代都市が造られたことが発掘調査で確認されつつある。この古代都市の造営は、市内各所でみつかる整地痕跡や8世紀初頭に埋没した条坊関連遺構の存在から、7世紀末にまで遡ることも指摘されている。

大宰府および大宰府条坊は奈良～平安時代にかけて隆盛したが、当初の形を留め続けたわけではなく、次第に変容していった。発掘調査の結果からもこの変容が知られ、いくつかの画期が示されている。大宰府政庁跡の調査では、8世紀初頭以前の7世紀後半代の遺構群（政庁Ⅰ期）、天慶4（941）年の藤原純友の乱による大宰府焼亡に関するとされる焼土層の下面の礎石建物の存続時期（政庁Ⅱ期）、現在地表に露出している、乱後に再建された礎石建物の存続時期（政庁Ⅲ期）という画期が提示されている。この画期は、大宰府条坊内でも検出遺構や整地層の存在、遺構の空白時期の検討から同様に窺うことができ、大宰府全体における重要な画期と捉えることができよう。発掘調査では大宰府政庁は12世紀前半には廃絶していることが確認されており、その後整備されることはなかったようである。大宰府条坊内においても、11世紀末～12世紀前半には条坊西側から中央部にかけての一帯で遺構廃絶が顕著にみられ、条坊北東部一帯はその後も引き続き街区が残る。この状況は中世まで続いている。

大宰府・大宰府条坊が機能していた間、この他にもいくつかの画期や街区の変遷が発掘調査成果より指摘されているところであるが、古代から中世において600年間以上の長期間、しかも同位置で政治的・宗教的・都市的環境が機能していたところは他にほとんど例がない。この時に形成された政治的機能や都市環境の主体は、中世前期でほぼ終焉を迎えたといえるが、土地空間・歴史的環境は、この後に続く中近世だけでなく、現代でも影響し続けているといえよう。

さて、今回報告する第239・240・241次調査区は、西鉄太宰府線の二日市駅から五条駅までの区間の線路北側、国道3号線の南側で、朱雀4丁目に所在する。ここは地区道路整備事業に係る道路敷設に伴い用地買収が進められていた地域であり、試掘調査を実施して埋蔵文化財の所在が明らかになった土地の中の3地区である。ここは大宰府条坊跡の左郭のおよそ中心付近に位置しており、南に約350m前後の位置には古代寺院観音寺跡がある。近隣の発掘調査地点も多く、大宰府条坊に関する遺構が包蔵されている可能性は高いと予想されていた。

第239次調査では、調査区全体に複数の遺構面が検出され、良好な状態で包蔵されていた。調査では大きく3つの遺構面にわけることができたが、整地層はさらに細分できる可能性もある。発見された主な遺構は、平安時代の溝跡、土坑、小穴である。溝跡は複数発見されたが、南北方向に凡そ同じ位置に

凡例
条○・・・大宰府条坊跡第○次調査
史○・・・大宰府史跡第○次調査
南○・・・福岡南バイパス第○次調査

図1　報告調査地と周辺遺跡（1/5,000）

名称	次数	掲載文献
大宰府条坊跡	6	太宰府市教育委員会 1981 「馬蹄形分尼寺跡・発 掘空間代遺跡調査 概要報」
大宰府条坊跡	11-1	太宰府市教育委員会 1982 「大宰府条坊跡 2」
大宰府条坊跡	11-2	太宰府市教育委員会 1982 「大宰府条坊跡 2」
大宰府条坊跡	17	太宰府市教育委員会 1982 「大宰府条坊跡 2」
大宰府条坊跡	18	太宰府市教育委員会 1983 「大宰府条坊跡 3」
大宰府条坊跡	19	太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡 3」
大宰府条坊跡	20	太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡 3」
大宰府条坊跡	21	太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡 3」
大宰府条坊跡	22	太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡 3」
大宰府条坊跡	23	太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡 3」
大宰府条坊跡	24	太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡 3」
大宰府条坊跡	25-1	太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡 3」
大宰府条坊跡	25-2	太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡 3」
大宰府条坊跡	26	太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡 3」
大宰府条坊跡	27-1	太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡 3」
大宰府条坊跡	27-2	太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡 3」
大宰府条坊跡	28	太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡 3」
大宰府条坊跡	29	太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡 3」
大宰府条坊跡	30	太宰府市教育委員会 1984 「大宰府条坊跡 3」
大宰府条坊跡	33	未報告
大宰府条坊跡	35-1	未報告
大宰府条坊跡	35-2	未報告
大宰府条坊跡	36	未報告
大宰府条坊跡	41	未報告
大宰府条坊跡	42	未報告
大宰府条坊跡	46	未報告
大宰府条坊跡	50	太宰府市教育委員会 1999 「太宰府条坊跡 X 1」
大宰府条坊跡	57	未報告

名称	次数	掲載文献
大宰府条坊跡	64	太宰府市教育委員会 1998 「太宰府条坊跡 X」
大宰府条坊跡	67	未報告
大宰府条坊跡	68	太宰府市教育委員会 1998 「太宰府条坊跡 X」
大宰府条坊跡	71	未報告
大宰府条坊跡	73	太宰府市教育委員会 1998 「太宰府条坊跡 X」
大宰府条坊跡	79	未報告
大宰府条坊跡	80	未報告
大宰府条坊跡	83	未報告
大宰府条坊跡	84	未報告
大宰府条坊跡	88	未報告
大宰府条坊跡	90	未報告
大宰府条坊跡	92	未報告
大宰府条坊跡	93	太宰府市教育委員会 1998 「太宰府条坊跡 X」
大宰府条坊跡	94	太宰府市教育委員会 1998 「太宰府条坊跡 X」
大宰府条坊跡	96	未報告
大宰府条坊跡	102	未報告
大宰府条坊跡	109	未報告
大宰府条坊跡	110	未報告
大宰府条坊跡	114	未報告
大宰府条坊跡	119	太宰府市教育委員会 2002 「太宰府条坊跡 XI」
大宰府条坊跡	124	太宰府市教育委員会 2004 「太宰府条坊跡 XI」
大宰府条坊跡	125	未報告
大宰府条坊跡	130	未報告
大宰府条坊跡	134	未報告
大宰府条坊跡	135	太宰府市教育委員会 2005 「太宰府条坊跡 XI」
大宰府条坊跡	140	未報告
大宰府条坊跡	145	未報告
大宰府条坊跡	146	太宰府市教育委員会 2006 「太宰府条坊跡 XI」
大宰府条坊跡	147	未報告
大宰府条坊跡	148	太宰府市教育委員会 2006 「太宰府条坊跡 XI」

造られており、時期は異なるものの性格は同じ条坊溝であることが予想される。調査区南には般若寺北側の丘陵が迫っており、その土地の本来的地形が大宰府条坊の土地利用に与える影響など、その歴史的変遷関係を含めて貴重な成果が得られたといえる。

第240次調査では、調査区北半部で遺構面を２面検出したが、本文で詳述するように北端に近世の遺構があり、その周辺にわずかに平安時代後期の遺構が確認されたのみである。この調査結果から、本遺跡では居住地としての利用はほとんどなかったのではないかということが考えられる。これは本遺跡の北側に般若寺の丘陵から東西に延びる尾根があり、裾部を小河川流下し、南東部には湿地が広がっているために、整地しても湧水等が激しく、土地の利用価値があまりなかったのであろう。

第241次調査では、遺構面が２面確認できた。本遺跡は般若寺の丘陵から東西に延びる尾根の北側に位置し、この尾根を挟んだ南側に第240次調査地がある。第２遺構面の利用状況を考えると調査区西側に土坑やピット群があり、東側には畑の畝溝が広がっている。しかし、その後第１遺構面の時期になると畑部分にも整地が施されるが、遺構は検出できなかった。西側には引き続き土坑やピット群が形成され、掘立柱建物跡も検出している。第２遺構面から第１遺構面へ移る段階で畑をつぶしてまで整地を行っているにもかかわらず、建物などの利用がなされていないのはなぜか、西側への遺構の広がりはどうかといったことは現時点で回答を得ることはできず、今後の検討課題である。ただ、土地利用開始当初（第２遺構面段階）に東側で畑の利用がなされていたのは、当該地区が粘土層で覆われていたため、居住空間としての利用を避けたものと考えられる。しかし、本遺跡は240次調査地と異なり、基盤面がしまりの強い砂層が厚く堆積しており、地表面には湧水はまったくないため、通常の整地が施されて利用されたものと考えられる。

名称	次数	掲載文献
大宰府条坊跡	149	大宰府市教育委員会 1999 「大宰府条坊跡Ⅱ３ 大宰府条坊跡第149次調査」
大宰府条坊跡	152	大宰府市教育委員会 2004 「大宰府条坊跡21 第150・152・156次調査」
大宰府条坊跡	156	大宰府市教育委員会 2004 「大宰府条坊跡21 第150・152・156次調査」
大宰府条坊跡	159	未報告
大宰府条坊跡	162	未報告
大宰府条坊跡	163	未報告
大宰府条坊跡	168	大宰府市教育委員会 2004 「大宰府条坊跡22」
大宰府条坊跡	169	未報告
大宰府条坊跡	170	未報告
大宰府条坊跡	173	大宰府市教育委員会 2004 「大宰府条坊跡24」
大宰府条坊跡	172	未報告
大宰府条坊跡	174	未報告
大宰府条坊跡	180	未報告
大宰府条坊跡	181	未報告
大宰府条坊跡	189	未報告
大宰府条坊跡	191	大宰府市教育委員会 2004 「大宰府条坊跡24」
大宰府条坊跡	202	大宰府市教育委員会 2004 「大宰府条坊跡24」
大宰府条坊跡	203	未報告
大宰府条坊跡	205	大宰府市教育委員会 2004 「大宰府条坊跡24」
大宰府条坊跡	211	未報告
大宰府条坊跡	214	未報告
大宰府条坊跡	218	未報告
大宰府条坊跡	220	未報告
大宰府条坊跡	225	大宰府市教育委員会 2004 「大宰府条坊跡25」
大宰府条坊跡	226	未報告
大宰府条坊跡	227	未報告
大宰府条坊跡	234	未報告
大宰府条坊跡	235	未報告
大宰府条坊跡	236	未報告
大宰府条坊跡	237	未報告
大宰府条坊跡	238	未報告
大宰府条坊跡	239	未報告
大宰府条坊跡	240	未報告
大宰府条坊跡	241	未報告
大宰府条坊跡	242	未報告
大宰府史跡	9	九州歴史資料館 1971 「大宰府史跡 昭和40年度発掘調査概報」
大宰府史跡	22	九州歴史資料館 1973 「大宰府史跡 昭和47年度発掘調査概報」
大宰府史跡	27	九州歴史資料館 1973 「大宰府史跡 昭和48年度発掘調査概報」
大宰府史跡	28	九州歴史資料館 1974 「大宰府史跡 昭和49年度発掘調査概報」

名称	次数	掲載文献
大宰府史跡	38	九州歴史資料館 1977 「大宰府史跡 昭和51年度発掘調査概報」
大宰府史跡	39-1	九州歴史資料館 1978 「大宰府史跡 昭和52年度発掘調査概報」
大宰府史跡	39-2	九州歴史資料館 1977 「大宰府史跡 昭和52年度発掘調査概報」
大宰府史跡	39-3	九州歴史資料館 1978 「大宰府史跡 昭和53年度発掘調査概報」
大宰府史跡	50	九州歴史資料館 1978 「大宰府史跡 昭和54年度発掘調査概報」
大宰府史跡	61	九州歴史資料館 1979 「大宰府史跡 昭和55年度発掘調査概報」
大宰府史跡	74	九州歴史資料館 1982 「大宰府史跡 昭和56年度発掘調査概報」
大宰府史跡	103	九州歴史資料館 1987 「大宰府史跡 昭和61年度発掘調査概報」
大宰府史跡	109	九州歴史資料館 1989 「大宰府史跡 昭和63年度発掘調査概報」
大宰府史跡	111	九州歴史資料館 1990 「大宰府史跡 昭和64年度発掘調査概報」
大宰府史跡	115	九州歴史資料館 1990 「大宰府史跡 平成元年度発掘調査概報」
大宰府史跡	117	九州歴史資料館 1990 「大宰府史跡 平成元年度発掘調査概報」
大宰府史跡	122	九州歴史資料館 1993 「大宰府史跡 平成4年度発掘調査概報」
大宰府史跡	154	九州歴史資料館 1995 「大宰府史跡 平成8年度発掘調査概報」
大宰府史跡	176	九州歴史資料館 1998 「大宰府史跡 平成9年度発掘調査概報」
福岡地バイパス遺跡	1	福岡県教育委員会 1979 「福岡地バイパス関係 埋蔵文化財調査報告1 別冊」
福岡地バイパス遺跡	2	福岡県教育委員会 1979 「福岡地バイパス関係 埋蔵文化財調査報告1 別冊」
福岡地バイパス遺跡	3	福岡県教育委員会 1976 「福岡地バイパス関係 埋蔵文化財調査報告1 別冊」
福岡地バイパス遺跡	4	福岡県教育委員会 1976 「福岡地バイパス関係 埋蔵文化財調査報告1 別冊」
福岡地バイパス遺跡	5	福岡県教育委員会 1975 「福岡地バイパス関係 埋蔵文化財調査報告1 別冊」
福岡地バイパス遺跡	6	福岡県教育委員会 1977 「福岡地バイパス関係 埋蔵文化財調査報告1 別冊」
月隈遺跡		福岡県教育委員会 1977 「福岡地バイパス関係 埋蔵文化財調査報告1 別冊」

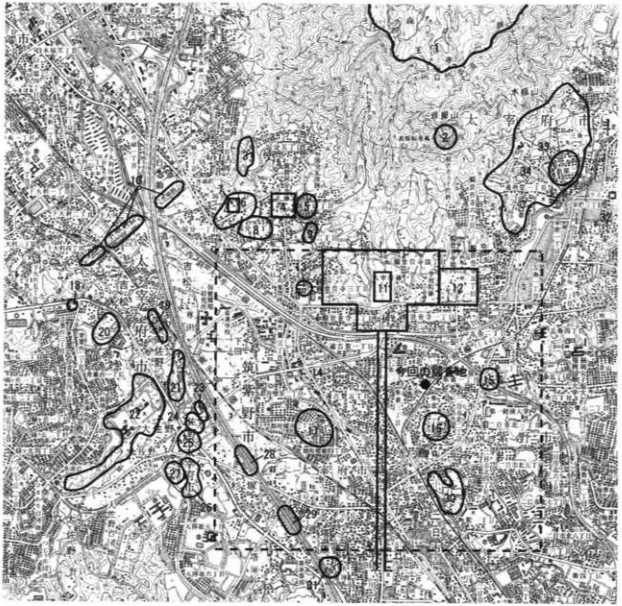


図２　太宰府市とその周辺の遺跡（1/30,000）

1. 大野城跡
2. 岩屋城跡
3. 陣ノ尾遺跡
4. 筑前国分寺跡
5. 辻遺跡
6. 国分松本遺跡
7. 筑前国分尼寺跡
8. 国分千足町遺跡
9. 御笠団印出土地
10. 水城跡
11. 大宰府政庁跡
12. 観世音寺
13. 遠賀団印出土地
14. 大宰府条坊跡（破線内）
15. 君畑遺跡
16. 般若寺跡
17. 市ノ上遺跡
18. 神ノ前窯跡
19. 原口遺跡
20. 篠振遺跡
21. 前田遺跡
22. 宮ノ本遺跡
23. 麗川遺跡
24. フケ遺跡
25. 尾崎遺跡
26. 脇道遺跡
27. 殿城戸遺跡
28. 剣塚遺跡
29. 唐人塚遺跡
30. 峯遺跡
31. 楊田山遺跡
32. 太宰府天満宮（安楽寺跡）
33. 鴻城跡
34. 原遺跡

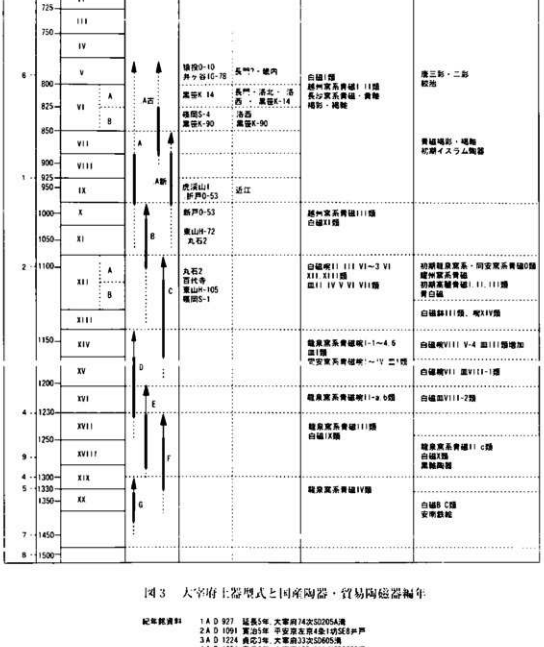


図3　大宰府土器型式と国産陶器・貿易陶磁器編年

紀年銘資料

1 A D 927　延長5年 大宰府74次SD205A溝
2 A D 1091 寛治5年 平安京左京4条1坊SE8井戸
3 A D 1224 貞応3年 大宰府33次SD605溝
4 A D 1304 嘉元2年 大宰府109 111次SD3200溝
5 A D 1330 元徳2年 大宰府45次SX1200土坑
6 A D 784　延暦3年 長岡京102次SD10201溝
7 A D 1459・1465 長禄3・寛正5年 福岡市井相田C11・SG16土坑
8 A D 1501 文亀元年 大宰府70次SD1805溝
9 A D 1265 文永2年 博多62次713土壙

文献

1 九州歴史資料館　「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
2 田辺昭三・吉川義彦　「平安京跡発掘調査報告左京四条一坊」1975 平安京調査会
3 九州歴史資料館「大宰府史跡昭和49年度発掘調査概報」1975
4 九州歴史資料館「大宰府史跡昭和53年度発掘調査概報」1980
5 九州歴史資料館「大宰府史跡昭和52年度発掘調査概報」1978
6 長岡京市埋蔵文化財センター「長岡京市埋蔵文化財調査報告書第1集」1988
7 福岡市教育委員会「井相田C遺跡11」「福岡市埋蔵文化財調査報告書175」1988
8 九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
9 福岡市教育委員会「博多48」「福岡市埋蔵文化財調査報告書397」1995

Ⅱ．調査体制

（平成16　2004年度）

太宰府市教育委員会

総括	教育長	關　敏治
庶務	教育部長	松永栄人
	文化財課長	木村和美
	保護活用係長	久保山元信
	調査係長	永尾彰朗
	事務主査	藤井泰人（～6月30日）
		齋藤実貴男（7月1日～）
	主任主事	大石敬介
調査	主任主査	城戸康利
	技術主査	山村信榮
		中島恒次郎
	主任技師	**井上信正（調査・整理担当）**
		高橋　学
	宮崎亮一	
	技師（嘱託）	下川可容子
		森田レイ子
		柳　智子
		渡邊　仁
		長　直信
		松浦　智（7月1日～）

大成エンジニアリング株式会社　埋蔵文化財調査部

理事	安孫子昭二（学術指導・日本考古学協会会員）
顧問	服部敬史（学術指導・日本考古学協会会員）
調査部長	早川　泉（日本考古学協会会員）
調査課長	板野伸彦（日本考古学協会会員）
工務課長	渡辺宏司
主任調査員	**作田一耕（日本考古学協会会員、調査・整理担当）**
	横澤道博（日本考古学協会会員、調査・整理担当）
	小林貴郎

Ⅲ．調査に至る経緯

調査対象地は、太宰府市朱雀４丁目に所在する。

平成14（2002）年８月16日、文化財課と当市道路用地課の間で、地区道路整備事業に伴い、今回の対象地付近で道路敷設を行うとの具体的な話が協議された。ここは以前より地区道路整備事業に伴う道路予定地として計画されていたところで、市が用地買収を進めていたところである。

ここは大宰府条坊跡の左郭のおよそ中心付近に位置しており、南に約350m前後の位置には古代寺院観若寺跡がある。近隣の発掘調査地点も多く、大宰府条坊に関する遺構が包蔵されている可能性は高いと予想されていた。

そこで、平成14年11月18日に朱雀４丁目178－１外（第240次調査区、今回報告）を、平成15（2003）年９月４日に朱雀４丁目2641－２（第239次調査区、今回報告）、朱雀４丁目2653－７（第241次調査区、今回報告）及び朱雀４丁目2630－17（第242次調査区、未報告）で確認調査を行ったところ、遺構が確認されたため、ここを発掘調査することになった。この他の道路予定地についても確認調査を実施したが、遺構が確認できなかったため発掘調査対象からはずしている。

これらの発掘調査整理報告事業を行うにあたっては、文化財課における当時の緊急発掘調査計画・実施状況等を鑑みて、第242次調査区は文化財課直営で調査を実施することにしたものの、その他の第239・240・241次調査区については民間の調査組織に委託することになり、指名入札の結果、大成エンジニアリング株式会社と調査整理報告委託契約を行った。

調査は平成16（2004）年７月13日に、太宰府市と大成エンジニアリング株式会社とで現地立会を行い、同年７月20日より第239次調査区から重機による表土除去作業を開始した。調査期間および対象面積・調査面積等については、「Ⅳ．調査整理の方法」および「Ⅴ．調査の概要」を参照していただきたい。

最終的に平成16年12月21日に調査は終了した。整理作業については、調査期間中より一部取り掛かった。調査終了後は整理報告作業を行った。

Ⅳ．調査整理の方法

各調査区におけるグリッドの設定は国土座標第Ⅱ座標系により、位置を明示した。このとき、３箇所の調査区全体に３m四方のグリッド網を設定し、各々の調査区においてグリッドラインを、南からA・B・C…、東から１・２・３…とした。グリッドは南東角のグリッド杭の名称を当該グリッドの呼称とした。グリッド設定に係る測量は（株）ガイアエンジニアリングが行った。

作図は遺物取り上げ用の遺構略測図（本書中の遺構配置図）を１/100で作成し、遺構個別図・土層図等を１/20で作図した他、一部の遺物平面図について１/10で作図した。

各現場において取り上げた遺物については、現場作業実施期間中に洗浄作業を開始した。また、遺構に関連する遺物の抽出作業についても一部は同期間中に実施した。

出土遺物の整理作業については、太宰府市教育委員会の了承を得て、東京都府中市にある大成エンジニアリング株式会社府中事務所において行った。

調査・整理方法については、基本的に『佐野地区遺跡群Ⅰ』（太宰府市の文化財第14集　1989）、『太宰府市における埋蔵文化財調査指針』（太宰府市教育委員会　2000年４月）の内容に準じている。

Ⅴ．調査の概要

（1）大宰府条坊跡第239次調査

1．調査の経緯および調査・整理方法

調査対象地は、太宰府市朱雀４丁目2641－２である。調査は平成16年７月13日より開始し、11月８日にほぼ終了した。対象面積は100.58㎡、調査面積は75.08㎡である。調査は横澤道博が担当し、作田一耕が補佐した。

当該地は、鏡山条坊推定案（鏡山猛「大宰府の遺跡と条坊」『史淵16・17』1937年［鏡山猛『大宰府都城の研究』風間書房1968年所収］）の左郭９条５坊（90m条坊案［井上信正「大宰府の街区割りと街区成立についての予察」『条里制・古代都市研究通巻17号』条里制・古代都市研究会2001年12月］左郭11条５～６坊）に位置する。北西方向約800mには大宰府政庁跡があり、北方向約700mには観世音寺がある。調査区のすぐ南側は般若寺北側の丘陵が迫っており、この丘陵裾を調査したといえる。遺構確認面の標高は約33.2m～33.6mである。

発掘調査を実施するにあたり、試掘調査の結果報告を基に調査区東端部から表土除去作業に着手したが、このとき本来第１遺構面となるべき確認面を削り取っていることが壁面土層観察から判明し、急遽掘削深度を浅くした。試掘調査では確認されなかった遺構面の存在を確認できたということは幸いといえるが、これによって調査区グリッドの３ラインより東側の地域における遺構確認は事実上第２遺構面によるものとなっている。なお、各遺構については埋土の状況などから第１遺構面に帰属すべき遺構か否か判断し、それ以外を第２遺構面に帰属させている。

また、調査区を南北に縦断するヒューム管については、その使用が廃されているかどうか確認が取れなかったため撤去を見合わせて調査を実施した。

その他の調査・整理方法については「例言」および「Ⅳ．調査整理の方法」を参照していただきたい。

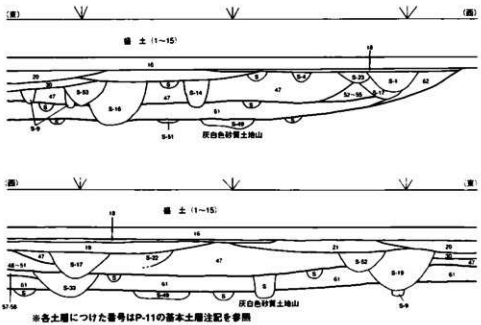


Fig.239-1　大宰府条坊跡第239次調査　土層模式図

2. 層位（Fig.239-1・2、Pla.239-4～6）

本調査区では、表土から約1.2mの深さまで現代盛土がされており、直下に水田であった頃のものと思われる青灰色粘土層が0.2mの厚さで堆積している様子が看取された。その下位に、近辺の丘陵の基盤を形成する茶褐色の粘質土（烏柄ローム層）を利用した複数層にわたる堆積層を確認した。堆積層は大きく2つの層に分層され、その各面で遺構を検出している。

また、調査区南西部において、比高差にして約75cmを2.5m程度の距離で上昇する急激な地形変化が確認された。この地形を整地するように、第2遺構面基盤層が形成されており、さらに地形変換ライン北側には質の異なった土を数層にわたって整地した様子も確認されている。この整地層は条坊の区画溝と思われる遺構の西側において顕著であり、調査区グリッドのCライン（X＝56,098.0）で土層図を作成し、その堆積状況を記録した。あたかも版築したかのように細かく層を積み上げている状況が看取された。この整地は第2遺構面ではわずかで、第1遺構面において顕著となる。

第1遺構面は、この青灰色粘土層の約0.2～0.4m下方に堆積している茶褐色土層の上面をもって確認面とした。第2遺構面はこの茶褐色土層を取り除いた灰褐色粘質土層の上面を、第3遺構面は灰褐色粘質土層を取り除いた灰白色砂質土地山の上面をもって、それぞれ確認面としている。包含層となる茶褐色土層中からは奈良・平安時代の土器や瓦片、灰褐色粘質土層中からは弥生土器の個体資料などが出土している。

なお、各遺構面と整地層および検出された遺構の関係は「Ⅵ．まとめ」において述べているので、参照していただきたい。

3. 遺構

本調査で発見された遺構は溝、土坑、小穴などで、主に平安時代の遺構とみられる。注目すべきは、各遺構面で検出したほぼ南北に走行する溝である。第1遺構面で6条、第2遺構面で1条、第3遺構面で2条を検出しており、条坊区画の区割りに関連するものと考えられる。

ここは90m条坊案の左郭5坊路の推定ライン上にあり、今年度、南へ約100mの丘陵上を調査した第235次調査区でも、この推定ライン上で南北溝が検出されている。溝の走向方向からも、当調査区で検出した溝のいずれかとつながる可能性は高い。これらの溝は道路側溝だった可能性が高いが、溝にはさまれた空間で、道路遺構に想定されるような硬化面や遺構は検出できなかった。

なお、各整地層は主に条坊溝の西側で確認したが、東側に茶褐色土層が続いていることは土層観察から窺うことができる。これらの整地の理由は現時点では不詳だが、調査区南西側は第2・3遺構面検出時にはかなりの傾斜があったことが判明しており、調査区の南西側の土地の試掘調査では、表土除去後すぐに地山が露出し遺構が検出されていない状況であることから、当時、調査区南から南西側にかけて丘陵が伸びていたことが想定される。この丘陵裾部の傾斜がきつい部分に、こうした盛土整地を行った可能性も考えられよう。

また、灰褐色粘土層および第3遺構面から検出された遺構からは、弥生時代の遺物のみ出土している。出土遺物から近隣に弥生時代の生活痕跡があったことが推定され、調査区北東隣の第242次調査（未報告）の調査所見でも弥生時代の遺物を含む河川堆積層があるとされることから、第3遺構面検出の南北溝はこれに類似する遺構とも考えられる。ただ、これらの整地層・遺構が弥生時代に属するという判断には若干の疑問がある。灰褐色粘土層に類似した整地層は第242次調査区で検出されており（奈

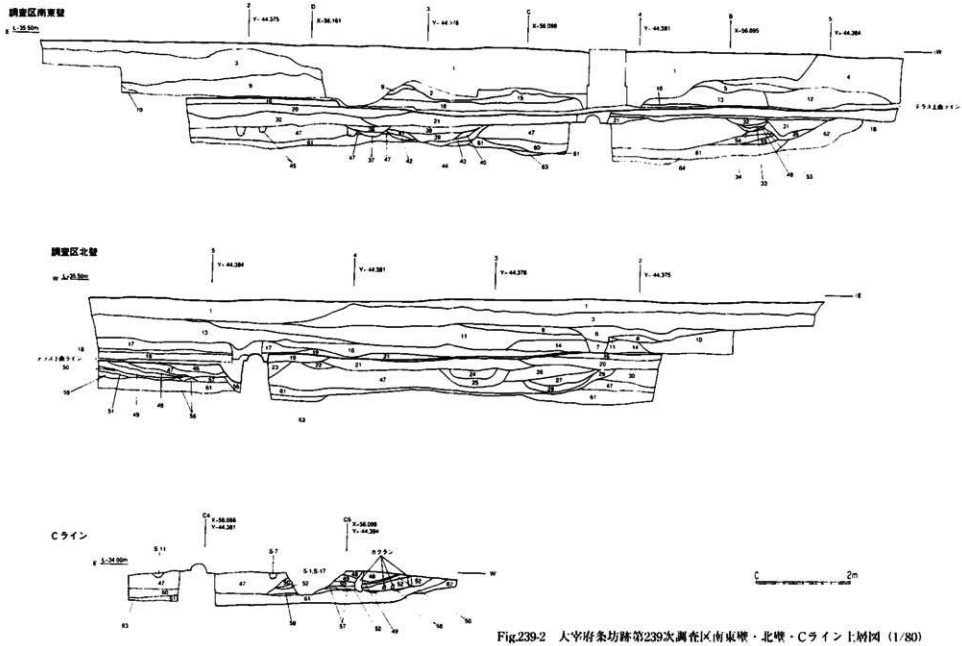


Fig.239-2　大宰府条坊跡第239次調査区南東壁・北壁・Cライン土層図（1/80）

基本土層注記

下記のように調査区壁面およびグリッドCライン（X＝56098.00）における全ての土層について通し番号を割り当てたものである。かつて水田であった頃の土層と判断された「16」より上層は表土とした。なお、番号はできる限り新旧関係に留意して割り当てたが、層が接していないものについては時期差の判断根拠に乏しいものもある。

表土（現代盛土等を含む）

1　灰白色砂質土（マサ土）
2　茶褐色土（カクラン盛土）
3　淡橙色砂質土（マサ土）
4　灰褐色砂質土（マサ土）
5　灰褐色土（廃土）
6　灰黄色粘土（廃土）
7　暗茶褐色土（カクラン盛土）
8　灰色砂質土（マサ土）
9　灰黄色粘土（廃土）
10　茶褐色砂質土（マサ土）
11　黒褐色土（廃土）
12　黄褐色粘質土（廃土）
13　灰黄色粘土（廃土）
14　暗灰褐色土（盛土）
15　茶褐色土（盛土）
16　青灰色粘土（旧水田堆積層）

堆積層および遺構埋土

表土下～第１遺構面を覆う層

17　灰褐色土
18　黒茶褐色土
19　暗灰褐色土
20　明褐色土
21　暗褐色土
22　明茶灰褐色土
23　Ｓ－22暗茶褐色土
24　Ｓ－52黒褐色土
25　Ｓ－52黒茶褐色土
26　暗茶褐色土
27　Ｓ－19暗茶褐色土
28　Ｓ－19暗褐色土
29　Ｓ－19黒褐色土
30　黒褐色土
31　Ｓ－１暗茶褐色土
32　Ｓ－23暗褐色土
33　Ｓ－23黒褐色土
34　Ｓ－23暗茶褐色土
35　Ｓ－17暗褐色土
36　Ｓ－53黒褐色土
37　Ｓ－53暗褐色土
38　Ｓ－16茶褐色土
39　Ｓ－16暗褐色土
40　Ｓ－16褐色土
41　Ｓ－16黒茶褐色土
42　Ｓ－16灰褐色土
43　Ｓ－16黒褐色土
44　Ｓ－16暗茶褐色土
45　Ｓ－９黒褐色土
46　茶灰褐色土
47　茶褐色土（第１遺構面基盤層　整地層）
48　黄褐色粘質土（整地層）
49　淡茶褐色土（整地層）
50　淡黄褐色粘質土（整地層）
51　淡茶灰褐色土（整地層）
52　黄白色粘質土（整地層）
53　暗茶褐色粘質土（整地層）
54　灰茶褐色粘質土（整地層）
55　黒灰色粘質土（整地層）

第１遺構面基盤層～第２遺構面を覆う層

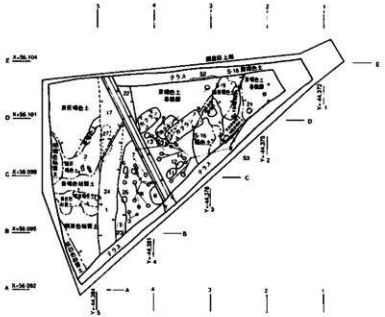
56　Ｓ－33淡茶褐色粘質土
57　茶褐色粘質土（整地層）
58　淡黄白色粘質土（整地層）
59　明茶褐色粘質土
60　暗褐色砂
61　灰褐色粘質土（第２遺構面基盤層　整地層）

第２遺構面基盤層～第３遺構面を覆う層（地山）

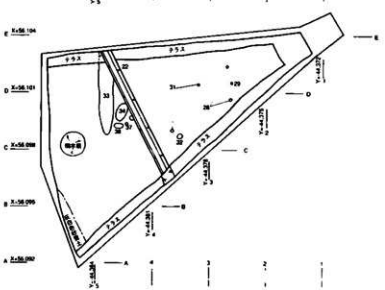
62　明茶色粘質土
63　Ｓ－51暗灰色砂質土
64　Ｓ－49暗灰色砂質土

地山　灰白色砂質土地山（第３遺構面基盤層）

第1遺構面略測図



第2遺構面略測図



第3遺構面略測図

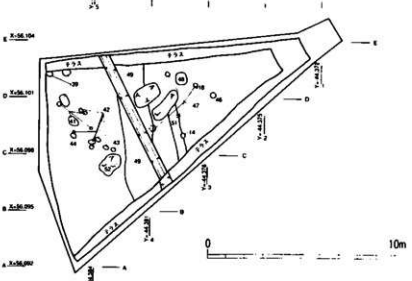


Fig.239-3　大宰府条坊跡第239次調査　各遺構面略測図（1:200）

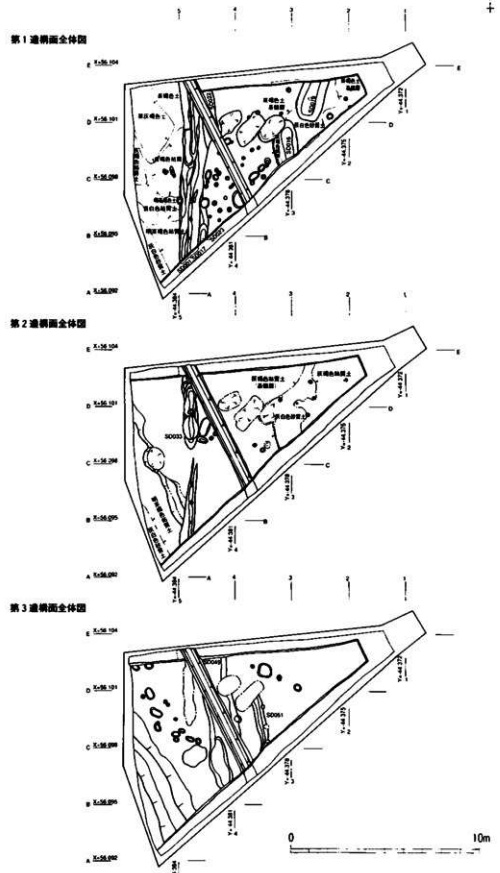


Fig.239-4　大宰府条坊跡第239次調査　各遺構面全体図（1/200）

良時代後期前後の遺物を含む)、第３遺構面で検出した溝が、上層検出溝同様ほぼ南北に走行することを見ると、出土遺物だけで判断できない要素もあると想定されよう。この点については、周辺調査成果を待ちたい。

（１）第１遺構面検出遺構

第１遺構面検出溝（溝状遺構を含む）

239SD001（Fig.239-４・５）

調査区西側で検出された南北溝で、条坊の西側溝にあたる。グリッドの５ライン東直近を南北に走行し、グリッドのCラインより北側でやや東傾する。南は調査区外へと続き、北はヒューム管の東側へ続くことが予想されたが確認されなかった。検出長6.6m、検出最大幅1.06m、深さ0.36mを測る。埋土は暗茶褐色土である。出土遺物は平安時代中頃を最新とすることから、この頃に埋没した事が窺える。

239SD016（Fig.239-４）

調査区東側、Ｃ２・Ｃ３グリッドで検出された南北溝で、やや西傾して走行する。南は調査区外へと続き北は一部をカクランによる破壊を受ける。検出長2.43m、検出最大幅1.3m、深さ0.48mを測る。埋土は時期の古いものから暗茶褐色土・黒褐色土・灰褐色土・黒茶褐色土・褐色土・暗褐色土・茶褐色土である。出土遺物には、近世遺物がわずかに混入するものの、埋土下層に伴う出土遺物の状況から、埋没時期は大宰府土器編年のＸ期後半以降と判断される。

239SD017（Fig.239-４・６）

調査区西側、グリッドの５ライン東直近を南北に走行する。調査区を南北に貫き、北側の一部をヒューム管で壊されているものの、検出長9.62m、検出最大幅1.32m、検出最大深度0.58mを測る。主要遺構との切り合い関係は、遺構の北側においてＳＤ033を切り、南側においてＳＤ001に切られる。出土遺物は大宰府土器編年のＸＩ期を最新とすることから、この頃に埋没した事が窺える。

239SD019（Fig.239-４）

調査区東側、Ｄ２グリッドで検出された。約15度東傾して南北に走行し、北側は調査区外へと続く。検出長2.47m、検出最大幅1.42m、深さ0.18m（調査開始時の削平による）を測る。埋土は時期の古いものから暗茶褐色土・黒褐色土・暗褐色土である。出土遺物は平安時代中頃を最新とすることから、この頃に埋没した事が窺える。

239SD022（Fig.239-４）

調査区西側、Ｃ４・Ｄ４グリッド内、ヒューム管の北東側の直脇に確認された。南北に走行し、北は調査区外へと続く。南側とヒューム管の西側において遺構の延長が確認されていないため全容は不明と言わざるを得ないが、SD017の一部である可能性も残されているが、今回の調査において確証を得られなかった。検出長2.16m、検出最大幅0.5m、検出最大深度0.4mを測る。埋没時期も不明であるが、壁面土層から第１遺構面に帰属させた。

239SD023（Fig.239-４・６）

調査区西側、Ａ４・Ｂ４グリッドで検出された。南北に走行し、南は調査区外へと続く。検出長1.1m、検出最大幅0.45m、検出最大深度0.17mを測る。他の遺構との切り合い関係は、ＳＤ001に切られ、ＳＤ017を切る。埋土は時期の古いものから暗褐色土・黒褐色土・茶褐色土である。埋土及び遺構の切り合いから、埋没時期は平安時代中頃と判断される。

第１遺構面検出その他の遺構

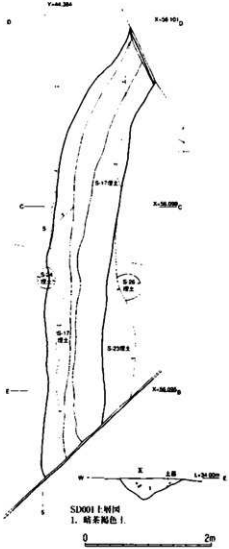


Fig.239-5　SD001実測図（1/60）

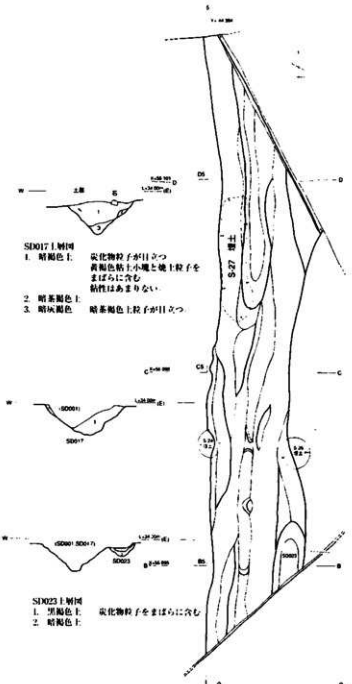
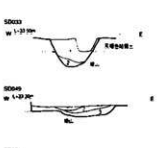


Fig.239-6　SD017・SD023実測図（1/60）



SD033
1. 淡茶褐色粘質土　茶褐色土粒子目立って混入　よくしまっている　平安中期小瓶出土
2. 暗灰色粘質土　炭化物粒子をまばらに含む　よくしまっている
SD049
1. 淡茶色砂　粒子細く、しまりなし
2. 灰色砂質土　粒子はやや細く、しまりも弱い
3. 暗灰色砂質土　炭化物粒子をまばらに含む　やや粘性もあり、しまっている
SD051
1. 茶褐色砂
2. 暗灰色砂質土　炭化物粒子をまばらに含む　やや粘性もあり、しまっている

Fig.239-7　SD033・SD049・SD051上層図（1/60）

239SX004（Fig.239-４）

調査区西側、Ｂ４・Ｃ４グリッドで検出された小穴群である。埋土は明褐色土で、酸化した土がマーブル状に混入しており、同様の埋土を持つ９基を関連する遺構と想定し、まとめて遺物を取り上げた。これらの小穴の内、Ｃ４グリッドに存在する小穴から土師器小皿ａ（Fig.239-９－６）が出土している。

239SX014（Fig.239-４）

調査区東側、Ｃ３グリッドで検出された小穴である。埋土は暗褐色土で炭化物をまばらに含む。地山となる灰白色砂質土まで掘り込む。遺物が格子目のある平瓦片数点と大宰府土器編年Ⅷ期の土師器坏ａ（Fig.239-９－７、Pla.239-７）が出土している。

（２）第２遺構面検出遺構

第２遺構面検出溝

239SD033（Fig.239-４・７）

調査区西側、グリッドの５ライン東直近、ＳＤ017の下層に存在する。南北に走行し、北は調査区外へと続く。検出長3.83m、検出最大幅0.8m、検出最大深度0.58mを測る。他の遺構との切り合い関係は、ＳＤ017に切られる。埋土は時期の古いものから暗灰色粘質土・淡茶褐色粘質土である。出土遺物から、埋没時期は大宰府土器編年のⅩ期前後と思われる。

（３）第３遺構面検出遺構

第３遺構面検出溝

239SD049（Fig.239-４・７）

調査区の西側、ヒューム管の真下にあたる位置で検出した。調査区を南北に貫き、やや西偏して走行する。遺構の中央部分をヒューム管の保護のために未調査とせざるを得なかったものの、検出長6.95m、検出最大幅1.6m、検出最大深度0.58mを測る。今回の調査で検出した溝の中では底面の幅が一番広く、丁寧な造作の印象を受けた。埋土は暗灰色砂質土で、出土遺物は弥生土器の小片がわずかに出土しているのみである。なお、「3．遺構」の前段においても述べた通り、これらが遺構と直接関連する遺物とは必ずしも言いがたく、埋没時期は奈良時代の終わりから平安時代前期と予想される。

239SD051（Fig.239-４・７）

調査区ほぼ中央、Ｂ３・Ｃ３グリッド内、ＳＤ049に平行するように存在が確認された。検出長2.75m、検出最大幅0.52m、検出最大深度0.09mを測る。埋土は暗灰色砂質土である。これも239SD049と同様の見解から、埋没時期は奈良時代の終わりから平安時代前期と予想される。

4．遺物（Fig.239-８～10　Pla.239-７）

（１）第１遺構面出土遺物

第１遺構面溝出土遺物（Fig.239-８）

SD001暗茶褐色土出土遺物

須恵器

壺（1）　口縁部破片。推定口径19.8cm、残存高3.3cm。焼成、還元ともに良好で淡灰色を呈する。

大甕（2）　頸部～体部破片。残存高6.4cm。焼成、還元ともに良好で淡灰色を呈する。外面には風化した白然釉、内面には接合の際の指頭痕がみとめられる。

土師器

小皿ａ（3）　推定口径10.0cm、器高1.65cm、推定底径7.0cm。焼成は良好で、色調は淡橙色を呈し、胎土には微細な雲母片を少量含む。底部外面の切り離し処理は回転ヘラ切りによって処理されている。

椀ｃ（4）　推定口径14.9cm、器高5.2cm、底径6.7cm。焼成は良好で、色調は淡橙白色を呈する。底部外面には板状圧痕の跡が認められるが、全体の器面調整ついては観察困難である。

甕（5）　底部破片。残存高4.2cm、推定底径9.8cm。胎土は粗いが焼成は良好で、色調は橙白色を呈する。内面はナデ調整が施され、漆皮膜（肉眼観察による）らしい付着物が認められる。

黒色土器Ｂ類

椀ｃ（6）　推定口径14.9cm、器高5.1cm、底径6.8cm。器面調整はミガキｃの後、口縁部に回転ナデと高台貼付けに伴う回転ナデがそれぞれ施される。底部外面調整は観察困難であった。焼成は良好で色調は黒色を呈する。胎土は緻密で雲母片を少量含む。

土製品

羽口（7）　破片。残存部分の長さ4.9cm。焼成は良好で、内面は淡橙白色を呈する。外面はケズリ及びオサエによって器面調整がなされ、色調は灰白色であるが被熱した部分は灰色を呈している。

SD016出土遺物（Fig.239-8）

SD016黒茶褐色土出土遺物

土師器

小皿ａ１（8～10）　8は口径9.7cm、器高1.1cm、底径7.2cm。焼成は良好で色調は淡橙白色を呈する。器面調整は回転ナデ後内底ナデ。底部外面の切り離し処理は回転ヘラ切りによって処理され、板状圧痕が認められる。9は推定口径9.8cm、器高1.0cm、推定底径7.4cm。焼成は良好で色調は淡灰白色を呈する。器面調整は回転ナデ後内底ナデ。底部外面の切り離し処理は回転ヘラ切りによって処理されている。10は推定口径10.4cm、器高0.9cm、推定底径7.4cm。焼成は良好で色調は淡灰色を呈する。器面調整は風化により観察困難であった。

丸底坏ａ（11）　推定口径13.3cm、器高3.6cm、推定底径7.7cm。焼成は良好で色調は橙灰白色を呈する。器面調整は回転ナデ後内底ナデ。底部外面の切り離し処理は回転ヘラ切りによって処理されている。口縁部を回転ナデ調整により外反させている。

丸底椀（12）　口径14.4cm、器高3.9cm、底径6.9cm。焼成は良好で淡橙白色を呈する。器面調整は回転ナデ後内面にミガキｃを施し、さらにナデ調整をおこなっている。口縁部調整のための回転ナデが施されている。底部外面の切り離し処理は回転ヘラ切りによって処理され、板状圧痕が認められる。体部と底部の境界を一周するように爪跡のような傷が認められた。７～８mm間隔でつけられており、明らかに故意であるが意図は不明。

器台（13）　脚部破片。残存高7.3cm。残存部断面の推定外径3.2cm、同推定内径1.2cm。焼成は良好で淡橙白色を呈する。器面調整は風化のため観察困難であった。

瓦類

平瓦（14）　破片。格子叩きが施される。残存部は、長さ7.5cm、幅7.4cm、厚さ1.9cm。焼成は良好で淡橙白色を呈する。鴻臚館亜式。

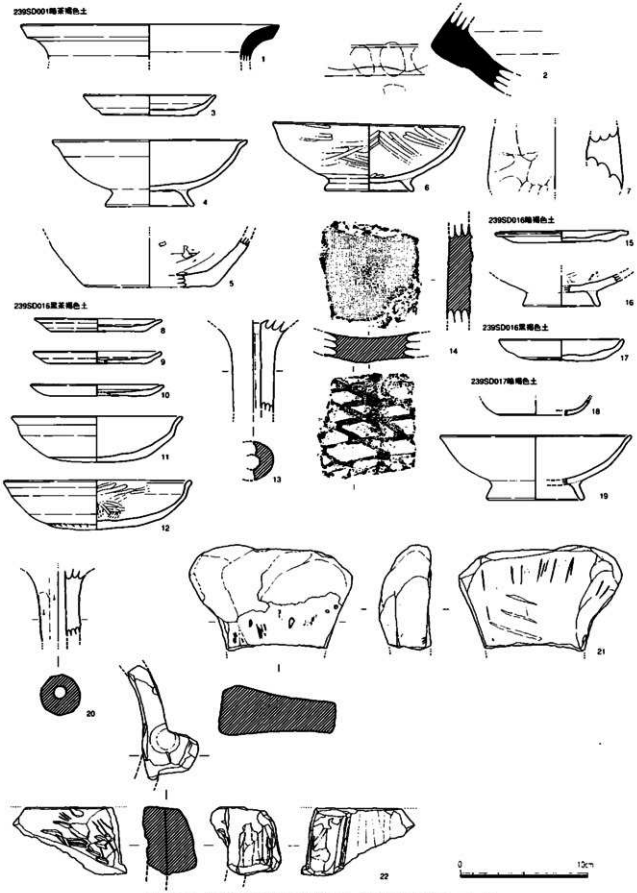


Fig.239-8　大宰府条坊跡第239次調査　出土遺物実測図1（1/3）

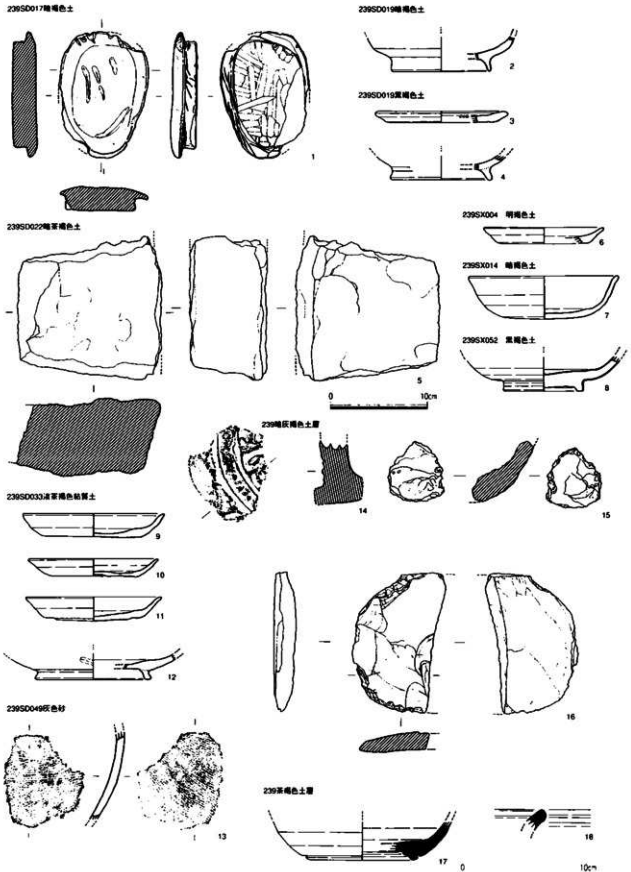


Fig.239-9 大宰府条坊跡第239次調査 出土遺物実測図②（10は1/4 ほかは全て1/3）

SD016暗褐色土出土遺物

土師器

小皿ａ２（15）　推定口径9.5cm、器高0.9cm、推定底径7.0cm。胎土は緻密で雲母片を少量含む。焼成は良好で色調は淡橙白色を呈する。底部外面の切り離し処理は回転ヘラ切りによって処理され、板状圧痕が認められる。口縁部は内面に沈線を施し、やや下方へ折れる。

黒色土器B類

椀ｃ（16）　底部破片。残存高2.5cm、推定底径5.8cm。器面調整は、内面にはミガキｃが認められたが、外面は風化により観察困難であった。焼成は良好で色調は黒色を呈する。胎土は緻密で白色の砂粒を少量含む。

SD016黒褐色土出土遺物

土師器

小皿ａ（17）　口径9.6cm、器高1.7cm、底径5.4cm。胎土は緻密で雲母片を少量含む。焼成は良好で色調は淡橙色を呈する。器面調整は風化のため観察困難であるが内底ナデの痕跡が確認できる。底部外面の切り離し処理は回転ヘラ切りによって処理され、板状圧痕が認められる。

SD017出土遺物（Fig.239-８・９）

SD017暗褐色土出土遺物

土師器

小皿ａ（18）　小破片。残存高1.2cm、推定底径5.4cm。胎土は緻密で砂粒、雲母片をわずかに含む。焼成は良好で色調は淡橙色を呈する。器面調整は風化のため観察困難であった。

椀ｃ（19）　推定口径14.8cm、器高5.1cm、推定底径7.4cm。焼成は良好で淡橙白色を呈する。器面調整は風化のため観察困難であった。

器台（20）　脚部破片。残存高5.5cm。残存部外径3.1cm、推定内径1.0cm。焼成は良好で淡橙白色を呈する。外面調整はヘラケズリを下方へと施し、受けとなる坏（乃至皿）部との接合部分にナデ調整を施している。

石製品

砥石（21）　砂岩製砥石破片。残存部の長さ8.2cm、最大幅12.8cm、最大厚4.1cm。使用面は３面（表面、裏面、石側面）で擦痕は全ての使用面に認められる。なお、使用面は風化によって剥落している可能性が指摘できる。

石鍋（22）　滑石製石鍋の把手及び口縁部破片。残存高5.2cm、推定口径21.5cm、器厚1.7cm。外面全体に、ノミ状工具による縦方向のケズリが施される。内面には何らかの工具で削り取られた痕が残る。

石鍋補修品（Fig.239-９－１）　滑石製。長軸9.85cm、短軸7.0cm、厚さ2.05cm。煤が付着している部分がノミ状工具による器面調整によって削り取られていることから、石鍋を再利用したものと思われる。差し込みとなる部分は断面形状が台形を呈しており、破損孔から抜け難い構造に成形したものと予想される。傘となる部分は粗いケズリにより調整される、一部に煤が付着しており補修後の使用を物語る。

SD019出土遺物（Fig.239-９）

SD019暗褐色土出土遺物

土師器

椀ｃ（２）　底部破片。残存高2.7cm、推定底径6.6cm。焼成は良好で色調は淡橙白色を呈する。胎

土は緻密で白色の砂粒を少量含む。器面調整は風化により観察困難であった。

SD019黒褐色土出土遺物

土師器

小皿a（3）　推定口径9.8cm、器高0.85cm、推定底径8.5cm。胎土は緻密で砂粒、雲母片を少量含む。焼成は良好で色調は淡橙白色を呈する。器面調整は回転ナデ後内底ナデ。底部外面の切り離し処理は回転ヘラ切りによって処理される。

椀c（4）　底部破片。残存高1.9cm、推定底径7.7cm。焼成は良好で淡橙白色を呈する。胎土は緻密で砂粒を少量含む。器面調整は風化のため観察困難であった。

SD022出土遺物（Fig.239-9）

SD022暗茶褐色土出土遺物

石製品

磚（5）　凝灰岩製。残存部の長軸15.1cm、短軸15.0cm、最大厚8.1cm、重量2,620g。

第1遺構面その他の遺構出土遺物（Fig.239-9）

SX004明褐色土出土遺物

土師器

小皿a（6）　推定口径9.2cm、器高1.3cm、推定底径6.6cm。焼成は良好で色調は淡橙色を呈する。器面調整は風化のため観察困難であった。

SX014暗褐色土出土遺物

土師器

坏a（7）　口径11.5cm、器高3.4cm、推定底径6.5cm。胎土は緻密で砂粒、雲母片を少量含む。焼成は良好で色調は橙白色を呈する。器面調整は回転ナデ後内底ナデ。底部外面の切り離し処理は回転ヘラ切りによって処理され、板状圧痕が認められる。大宰府土器型式編年Ⅶ期の所産と思われる。

SX052黒褐色土出土遺物

龍泉窯系青磁

椀（8）　底部破片。残存高2.7cm、底径6.1cm。胎土は緻密で焼成は良好。素地の色調は青灰色及び淡青灰色で、釉調は灰緑色を呈する。素地の見込み部にケズリによる沈線が一周する。高台はケズリ出しによって成形される。底部外面は基本的に無釉であるが、高台の内側にも微かに釉が掛かっている箇所が認められる。Ⅰ－1類と判断される。

（2）第2遺構面出土遺物

第2遺構面溝出土遺物（Fig.239-9）

SD033淡茶褐色粘質土出土遺物

土師器

小皿a1（9～11）　1は口径10.9cm、器高1.9cm、底径7.8cm。胎土は緻密で砂粒、雲母片をわずかに含む。焼成は良好で色調は淡橙白色を呈する。器面調整は回転ナデ後内底ナデ。底部外面の切り離し処理は回転ヘラ切りによって処理され、板状圧痕が認められる。2は口径10.0cm、器高1.4cm、底径6.7cm。胎土は緻密で砂粒、雲母片をわずかに含む。焼成は良好で色調は淡橙白色を呈する。器面調整は回転ナデ後内底ナデ。底部外面の切り離し処理は回転ヘラ切りによって処理され、板状圧痕が認められる。板状圧痕に伴う内底の盛り上がりが顕著である。口縁部内面及び口唇部の一部に煤の付着が認め

られる。3は推定口径10.5cm、器高1.9cm、底径7.6cm。胎土は緻密で砂粒、雲母片をわずかに含む。焼成は良好で色調は淡橙白色を呈する。器面調整は回転ナデ後内底ナデ。底部外面の切り離し処理は回転ヘラ切りによって処理され、板状圧痕が認められる。1・2に比べて底部外面の切り離し処理は粗い印象を受ける。

黒色土器B類

椀c（12）　底部破片。残存高2.1cm、推定底径8.8cm。胎土は緻密で砂粒を少量含む。焼成は良好で色調は黒色を呈する。器面調整は全体に回転ナデと高台貼付けに伴う回転ナデ。さらに体部外面と高台の接地部分にミガキが施される。

（3）第3遺構面出土遺物

第3遺構面溝出土遺物（Fig.239-9）

SD049灰色砂出土遺物

弥生土器

破片（13）　残存高6.9cm。胎土は砂粒を目立って含み、粗い印象を受ける。焼成は良好で淡橙白色を呈する。内外面には密にハケメ調整が施される。ハケは幅1.5cm、8条を単位とする。外面下方に煤の付着が認められる。

（4）整地層・堆積層出土遺物

暗灰褐色土層出土遺物（Fig.239-9）

瓦類

軒丸瓦（14）　瓦当部破片。推定直径は15.0cm、残存部の長さは7.7cm。胎土は緻密で白色砂粒及び黒色鉱物粒を少量含む。焼成は良好で色調は青灰色を呈する。外区文様は珠文、内区文様は蓮弁。残存部には珠文が6ヶ所確認でき、蓮弁は複弁である。印籠つぎの溝の端が認められることから、正対して左下方の破片と判断される。

金属製品

鉱滓（15）　椀型滓。長さ6.1cm、幅4.4cm、厚さ1.7cm。気泡の孔と小礫の混入が目立つ。色調は黄褐色を呈する。

石製品（16）　石鍬か。長さ10.9cm、厚さ1.6cm、残存部の幅7.3cm。下半部の表面は滑らかで、上半部に比べて稜線が目立たないほどになっている。頁岩製。

茶褐色土層出土遺物（Fig.239-9）

須恵器

坏c（17）　底部破片。残存高3.15cm、推定底径8.2cm。焼成はやや甘いが還元は良好で、色調は体部外面が灰黒色、その他の部位は灰色を呈する。器面調整は回転ナデで、貼付け高台を有するが底部外面の調整は観察困難であった。

須恵質土器

壺（18）　口縁部小破片。残存高1.7cm。焼成、還元ともに良好で青灰白色を呈する。器面調整は回転ナデで、内面に沈線を施す。

灰褐色粘質土層出土遺物（Fig.239-10）

須恵器

坏c（1）　底部破片。残存高1.4cm、推定底径8.2cm。焼成、還元ともに良好で、色調は青灰色を呈する。器面調整は回転ナデで、底部外面の切り離し処理は回転ヘラ切りによって処理され、高台貼付けに伴う回転ナデが施される。

壺（2）　底部破片か。残存高2.8cm、推定底径12.0cm。焼成、還元ともに良好で、色調は青灰色を呈する。器面調整は回転ナデ後内面ナデで、底部には平行するくっきりとした沈線が認められる。

土師器

直口壺（3）　推定口径16.2cm、器高31.8cm（残存高）、推定底径6.4cm。器面調整はハケメ後、外面ミガキで、底部穿孔されている。外面胴部から底部にかけて広範囲に黒斑が認められる（図版中のトーン部分）。表面の風化が顕著で大部分が調整不明といえる。古墳時代初頭の所産とみられる。

二重口縁壺（4）　推定口径17.6cm、器高23.7cm（残存高）、推定底径4.6cm。器面調整はハケメ後、内面ナデ、外面ミガキcが施され、底部穿孔されている。頸部と胴部の接合部分に指頭圧痕が認められる。底部付近に大きな黒斑が認められる（図版中のトーン部分）。表面の風化が顕著で大部分が調整不明といえる。古墳時代初頭の所産とみられる。

坏c（5）　底部破片。残存高1.9cm、推定底径5.3cm。胎土は緻密で砂粒、雲母片を少量含む。焼成は良好で色調は明橙色を呈する。器面調整は回転ヘラケズリ後ミガキa（回転ヘラミガキ）。高台貼付けに伴う回転ナデ。底部外面の切り離し処理は不明であった。

坏a x 坏d（6）　口縁部破片。推定口径11.1cm、残存高3.3cm。胎土は緻密で砂粒、雲母片を少量含む。焼成は良好で色調は淡橙色を呈する。器面調整は内面ミガキa（回転ヘラミガキ）、外面回転ナデ後ミガキaが施される。

把手（7）　長さ6.9cm、幅4.9cm、高さ4.5cm。胎土は緻密だが砂粒を目立って含む。強いヘラケズリの後、上面を強くオサエて引き上げる成形を施して。焼成は良好で色調は淡橙色を呈する。

高坏（8）　脚部破片。残存高6.0cm。焼成は良好で色調は淡橙色を呈する。胎土は緻密で砂粒、雲母片を少量に含む。風化のため器面調整は不明だが、外面にハケメがわずかに確認できる。

製塩土器

煎熟土器（9）　胴部破片。残存高3.2cm、器厚0.5cm。焼成は良好で色調は灰褐色を呈する。胎土には1mm前後の砂粒を多く含む。

瓦類

平瓦（10）　破片。残存部は、長さ7.1cm、幅7.6cm、厚さ2.7cm。胎土は緻密で砂粒をわずかに含む。焼成は良好で淡橙灰色を呈する。風化により器面調整は不明だが、模骨痕が顕著である。

表土（Fig.239-10）

瓦類

軒丸瓦（11）　瓦当部破片。推定直径は16.0cm、残存部の厚さは3.8cm。胎土は緻密で白色砂粒を目立って含む。焼成は良好で色調は表が灰白色、裏が灰黒色を呈する。外区文様は珠文、内区文様は蓮弁、中房文様は一連蓮子。珠文個数は不明、蓮弁は複弁六葉で、蓮子は7個と思われる。印籠つぎの溝が認められる。鴻臚館亜式。

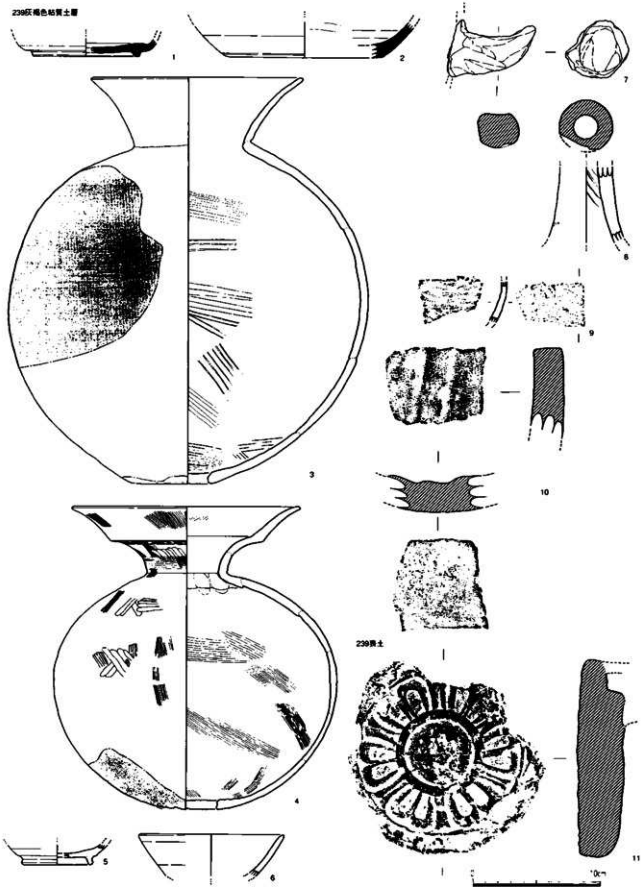


Fig.239-10　大宰府条坊跡第239次調査　出土遺物実測図３（1/3）

（2）大宰府条坊跡第240次調査

1. 層位

調査地は調査前まで宅地として利用されていた。明治以降に行なわれたと考えられる整地で1～1.6mの盛土が行なわれ、その下に0.1～0.3mの近世堆積土が認められる。上層を見ると近現代の盛土は調査区北端のＪ3・4グリッド付近が一番厚い。これは調査の最終段階で地山面まで下げた結果、ここからＧ4・5グリッド方向に小河川が流れており、元々地形が低かったため特に近現代になって大きく盛土を行ったと考えられる。地形が低いためかこの流路の東岸には本報告書にも取り上げたＳＥ004があり、西岸には近現代の井戸が３基掘削されている。また調査中つねに涌水や染み出し水が見られ、調査区壁面の崩落が激しかったのが本地区付近であるなど、水が集まりやすいこともこの場所の特徴を表している。

この小河川の東岸地山はＨ1・2グリッドからＤ4･5グリッド方向に幅約2mで帯状の微高地（黄褐色粘性土）が延びている。調査区南端では、この微高地はＣ7グリッドで東肩を検出しているが、調査区南西端Ｂ9グリッドでは微高地が続いており、この付近では幅が広がっていることが推定できる。しかしながら、小河川がこの微高地の西側を流下していることから、それほどの広さは考えにくい。さらに微高地東側（Ｇ・Ｈ1～Ｂ6グリッド）の内、Ｂ・Ｃ4～Ｂ6にかけては、最下層に植物遺体を含む暗褐色砂質土・黒色砂層といった水性堆積が見られ、ここでも涌水や染み出し水が激しかった。

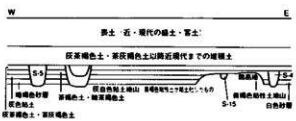


Fig.240-1　大宰府条坊跡第240次調査上層模式図

これらのことから、小河川と湿地（沼地？）に挟まれた微高地は上述のとおり狭小のうえ、隣接地の流水や涌水が著しいことから、奈良・平安時代には居住空間としては利用されなかったことが推定できる。涌水等については、いわゆる「水つき」の場所として、近世にいたるまでほとんど利用されなかったことが、調査結果における遺構の希薄さで理解できよう。

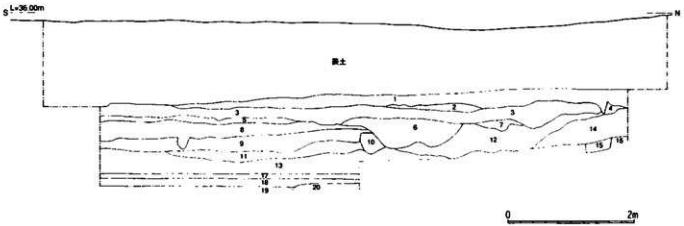
次に各遺構面についての概要を述べる。

第１遺構面

遺構を検出した調査区北半部では、当初、試掘の際確認されていた「茶色土」包含層を検出するため、北端から南に向かって表土剥ぎを行なった。その結果、J5･6グリッド付近で、平安時代の遺物を含む「茶褐色土層」を確認した事から同土層掘削深度で、掘り広げることとした。さらに方眼杭Ｊラインとｉラインの中間地点では「灰色粘土」が確認できたことから、それが遺構の埋土である可能性も考慮に入れ、南に表土剥ぎを続けた。この「灰色粘土」が、調査の結果、近世の長大土坑であるＳＫ010の埋土であった。その南側から灰茶褐色土層・茶灰褐色土層といった平安時代後期の遺物を含む土層を確認した。

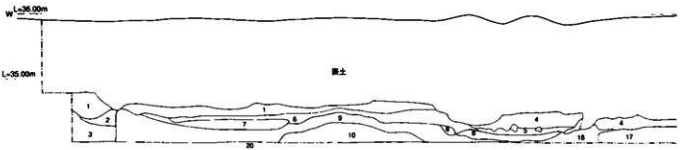
これらを含めてＳＫ010周辺の遺構面である灰茶褐色土層（Fig.240-2G・J6付近西壁13層が対応。茶灰褐色土層の北に隣接）、暗茶褐色土層（Fig.240-4東壁17層が対応。ＳＥ004周辺に分布）、茶褐色土層（Fig.240-2北壁20層が対応。ＳＫ001周辺に分布）はすべて南方向に傾斜して堆積しており、人工的な整地層と判断するのは困難である。このことからすべては自然堆積の可能性が高い。調査区北端は平安時代後期の土坑（ＳＫ001）も検出したが、大半を近世の長大土坑（ＳＫ010）によって切られており、平

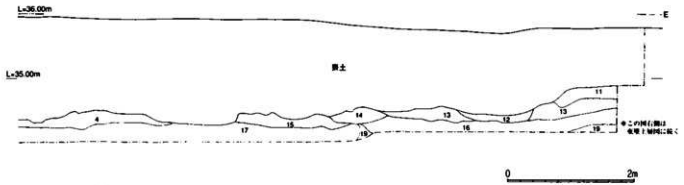
G～J 6付近西壁



1. 灰茶褐色砂質土
2. 明茶灰褐色土
3. 茶灰褐色粘質土
4. 灰褐色土
5. 茶褐色砂質土
6. 茶灰褐色粘性土
7. 灰色土
8. 淡茶褐色土
9. 茶灰褐色土（第1遺構面基盤層）
10. 暗茶褐色土
11. 茶褐色粘性土
12. 灰色粘性土
13. 灰茶褐色土（第1遺構面基盤層）
14. 灰色粘質土
15. 灰褐色粘性土（SK002埋土）
16. 茶褐色土（第1遺構面基盤層）
17. 灰色粘土
18. 明褐色砂層
19. 灰色砂層
20. 灰白色粘土

北壁

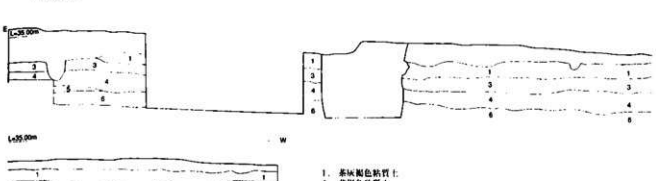




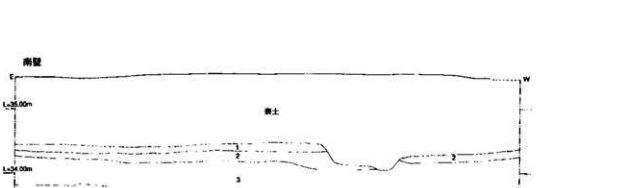
1. 灰茶褐色砂質土
2. 明灰色粘土
3. 灰色粘質土
4. 茶灰褐色土
5. 灰茶褐色粘質土
6. 茶褐色砂質土
7. 茶褐色粘質土
8. 明灰色土
9. 灰褐色粘質土
10. 灰色粘土
11. 明茶褐色粘質土
12. 灰褐色土
13. 明茶褐色粘性土
14. 茶褐色粘性土
15. 明茶褐色土
16. 灰茶褐色粘性土
17. 茶灰色粘性土
18. 淡茶褐色土
19. 灰茶褐色粘土
20. 茶褐色土

Fig.240-2　大宰府条坊跡第240次調査区北西壁および北壁土層図（1/60）

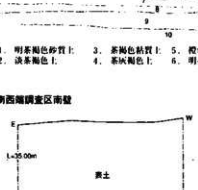
中央東西壁



南壁

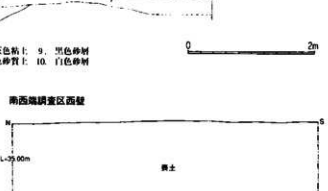


南西端調査区南壁



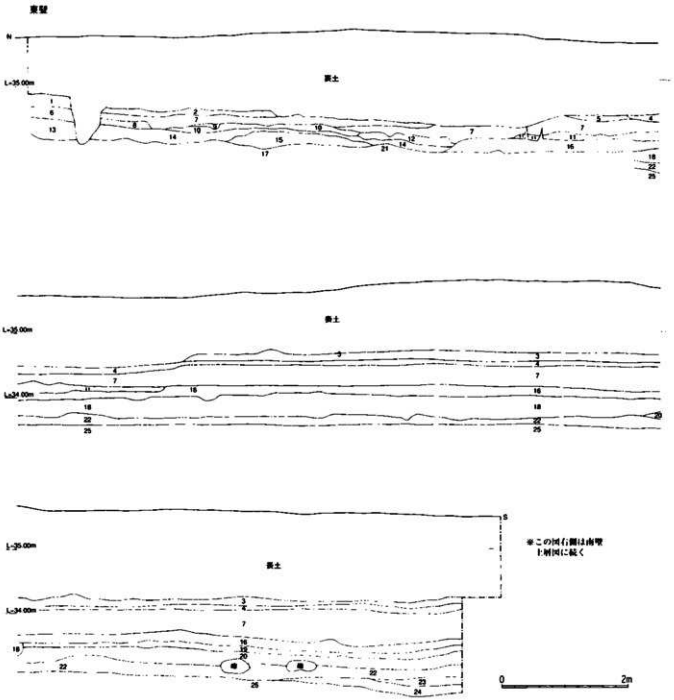
1. 淡茶褐色土（南壁2層）
2. 茶褐色粘質土（南壁3層）
3. 灰色土
4. 茶灰褐色土（南壁4層）
5. 灰褐色土
6. 明青灰色粘土（南壁7層）
7. 暗灰色粘土
8. 白色砂層（南壁10層）

南西端調査区西壁



1. 淡茶褐色土
2. 茶褐色粘質土
3. 暗灰茶褐色土
4. 灰色土
5. 茶灰褐色土
6. 灰褐色土
7. 明青灰色粘土
8. 暗灰色粘土
9. 白色砂層

Fig.240-3　大宰府条坊跡第240次調査区中央東西壁・南壁・南西端調査区南壁および西壁土層図（1/60）



1. 明茶褐色粘質土
2. 灰茶褐色砂質土
3. 明茶褐色砂質土
4. 淡茶褐色土
5. 茶褐色砂質土
6. 明茶褐色粘性土
7. 茶褐色粘質土
8. 灰茶褐色粘質土
9. 灰褐色土
10. 明茶褐色粘土
11. 暗灰茶褐色土
12. 茶褐色粘性土
13. 灰茶褐色粘性土
14. 淡茶褐色粘性土
15. 暗茶褐色粘性土
16. 茶灰褐色土
17. 暗茶褐色土
18. 茶灰褐色粘性土
19. 橙色土
20. 明茶褐色土
21. 灰茶褐色土
22. 明青灰色粘土
23. 暗褐色砂質土
24. 黒色砂層
25. 白色砂層

Fig.240-4　大宰府条坊跡第240次調査区東壁土層図（1/60）

安時代の様相は不明である。

上述の茶褐色土層・灰茶褐色土層・茶灰褐色土層の他、H1グリッドを中心とする地区で確認した、暗茶褐色土層などが、平安時代の基盤層と考えられる。これら諸土層の上には、整地層と特定できるような上面が安定した土層が確認できなかった。

このことから、本遺跡の遺構面の捉え方としては、第1遺構面は茶灰褐色土層を最新の基盤層とする遺構面である。同整地層が及ばない調査区北端は最初に遺構が確認された面を第1遺構面とするので、同面が必ずしも同時期の遺構のみであるとは限らない。これは調査当初に、近世長大土坑によって北端部の検討・理解が不十分であったという側面もあるので、その点も含めてご理解いただきたい。

暗茶褐色土層・灰茶褐色土層・茶灰褐色土層

これらは第1遺構面の基盤層となる層群である。調査区北半部の概ね方眼杭I列から南に分布し、平安時代後期の遺構の基盤層となるものである。暗茶褐色土層は10～20cm、灰茶褐色土層は厚いところで約30cm、茶灰褐色土層は10～20cmの厚さである。堆積順序は古層から暗茶褐色土層→灰茶褐色土層→茶灰褐色土層である。前述のとおり全層とも北から南に傾斜して堆積しており、自然堆積と判断できる。茶灰褐色土層は上面がほぼ水平に見えるが、調査区南端まで含めてみると、北端から南端にかけて標高34.20～33.80mと漸位的に下がっており、これも自然堆積と判断した。

出土遺物から判断すると堆積時期は、暗茶褐色土層は判断できる遺物の出土がなく不明であるが、灰茶褐色土層が11c代、茶灰褐色土層が12c代と考えられる。

第2遺構面

第1遺構面の基盤層である茶灰褐色土層、灰茶褐色土層を除去した後に検出した遺構面を第2遺構面とした。その基盤層は黄褐色粘性土（Fig.240-12の微高地の土層に対応）である。ただし、北端部に関しては近世遺構が地山面まで達していたため、その遺構壁面に切られて検出した平安期の遺構は第2遺構面の遺構とした。

2. 遺構（第1遺構面）

井戸

240SE004（Fig.240-7）

H0･1グリッドで検出した。形状はほぼ円形で直径2.1～2.15m、中央部の深さ1.38mを測る。床面に長さ約80cm、一辺4.8～5.5cmの角材4本をほぞ組した木枠がある。正方位からは約14°40′西に振れている。床面に木枠が残るのみで、深さもあまりない。さらに、地山の灰白色粘土層（Fig.240-2 G～J6付近西壁20層に対応）よりも深く掘り下げてはいるが、湧水もあまりないことから、溜井の可能性があると想定し、ここでは井戸として扱った。

土坑

240SK001（Fig.240-7）

J5グリッドで検出した。調査区境界にかかって検出した遺構のため形状は不明である。東西残存長1.25m、南北残存長0.41m、調整区壁際中央部の深さは0.18mを測る。土層の第4層は左右を分断するように縦に貫入していることから、2遺構である可能性もあるが、その左右の土層が土色、厚さともに対応していることから、今回は1遺構として報告した。

240SK002（Fig.240-7）

J6グリッドで検出した。調査区境界にかかって検出した遺構のため形状は不明である。壁際中央部の深さは0.14mを測るが、平面法量は不明である。遺物は出土していない。

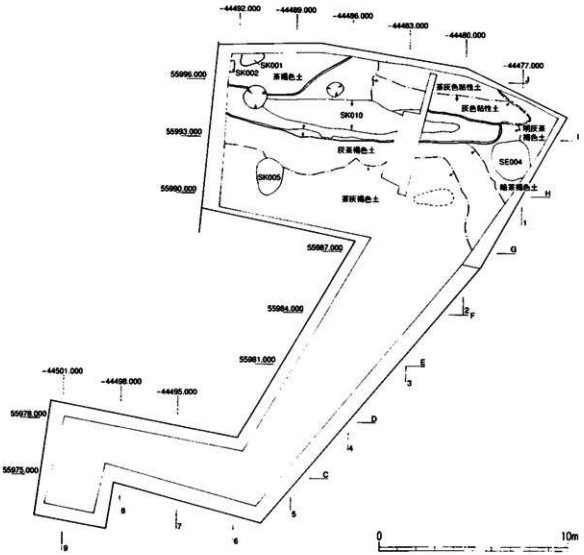


Fig.240-5　大宰府条坊跡第240次調査第１遺構面遺構図（1/200）

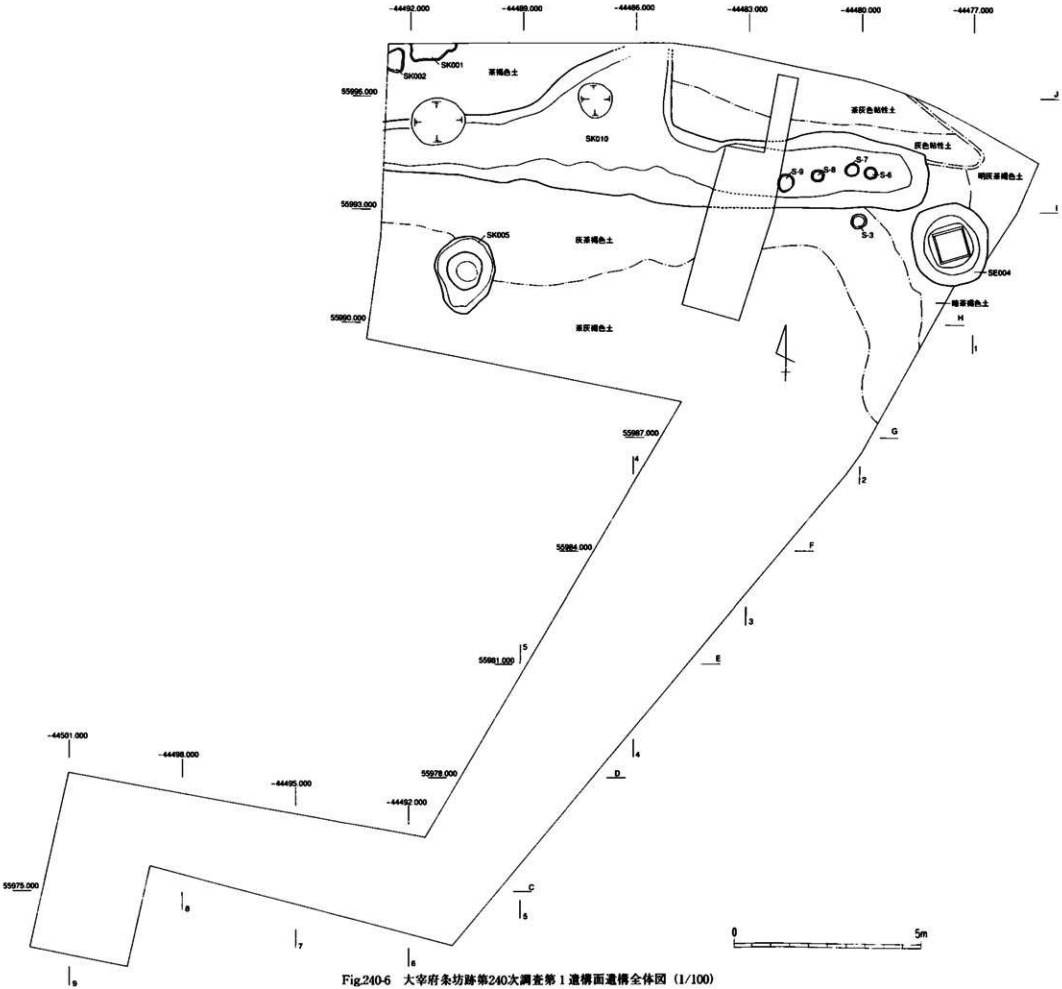


Fig.240-6　大宰府条坊跡第240次調査第１遺構面遺構全体図（1/100）

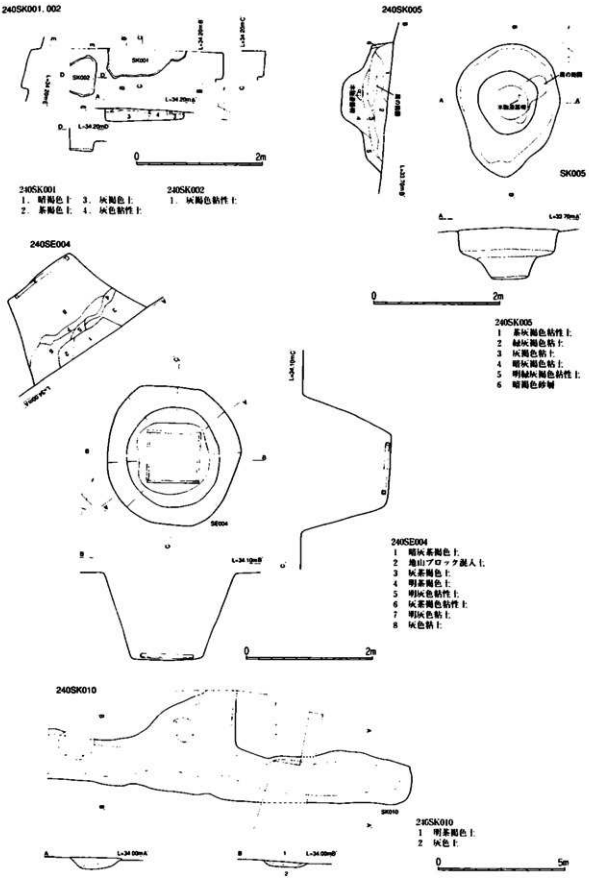


Fig.240-7 240SE004 240SK001・002・004・010実測図（1/60、SK010は1/150）

240SK005（Fig.240-7）

H5グリッドで検出した。形状は楕円形で長軸2.06m、短軸1.58m、中央部の深さ0.7mを測る。

第2層からは蓆、第4層からは木胎漆器椀が出土している。

240SK010（Fig.240-7）

H～J1～6グリッドで検出した。不整形の長大土坑で、西側は調査区外に延びている。残存長は14.15m、土層断面A-A'ラインの幅1.88m、同所中央部の深さ0.4mを測る。近世の遺構である。

240SX009（Fig.240-6）

I2グリッドで検出した小穴である。240SK010を切って掘り込まれており、近世以降の遺構である。

3. 遺物（第1遺構面）

SK001出土遺物（Fig.240-8）

SK001暗褐色土出土遺物

土師器

小皿a（1・2）　1は口縁部から底部にかけての破片で、推定口径9.6cm、器高1.3cm、推定底径7.0cmを計る。磨耗のため底部切り離しは不明。2は推定口径9.6cm、器高1.2cm、底径7.0cmを計る。磨耗のため調整、底部切り離しは不明。

丸底坏a（3～5）　3は口縁部から底部にかけての破片で、推定口径15.6cm、器高3.5cmを計る。磨耗で調整等は不明であるが、体部の一部にユビオサエの痕跡が認められる。4は口縁部から底部にかけての破片で、推定口径15.0cm、器高3.0cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。5はほぼ完形で、口径15.0cm、器高3.5cmを計る。底部切り離しはヘラ切りで、体部下半にユビオサエが認められる。

黒色土器B（6）　体部下半から高台部にかけての破片で、残存高3.0cm、推定底径6.0cmを計る。内面はミガキcである。

SK001茶褐色土出土遺物

土師器

小皿a（7～9）　7は口縁部から底部にかけての破片で、推定口径11.2cm、器高2.0cmを計る。低部はヘラ切りで、板状圧痕あり。体部外面は回転ナデ。8は完形で、口径9.8cm、器高1.5cm、底径7.0cmを計る。底部切り離しはヘラ切りであるが、他は磨耗のため調整不明。9は約半分の残存で、推定口径10.0cm、器高1.5cm、推定底径7.0cmを計る。底部切り離しはヘラ切りである。

丸底坏（10）　口縁部から底部にかけての破片で、推定口径15.0cm、器高5.1cmを計る。磨耗のため底部切り離しは不明であるが、内外面にミガキcが入る。

SK001灰褐色土出土遺物

土師器

小皿a（11）　口縁部から底部にかけての破片で、推定口径9.4cm、器高1.0cm、推定底径6.5cmを計る。調整等は磨耗のため不明。

丸底坏（12）　口縁部の破片で、残存高1.9cmを計る。磨耗のため調整等は不明。

坏a（13）　口縁部から底部にかけての破片で、推定口径12.0cm、器高2.0cm、推定底径9.2cmを計る。磨耗のため整形・調整は不明であるが、底部切り離しはヘラ切りと推定できる。

SK001灰色粘性土出土遺物

土師器

小皿a（14）　口縁部から底部にかけての破片で、推定口径9.0cm、器高1.0cm、推定底径7.0cmを計

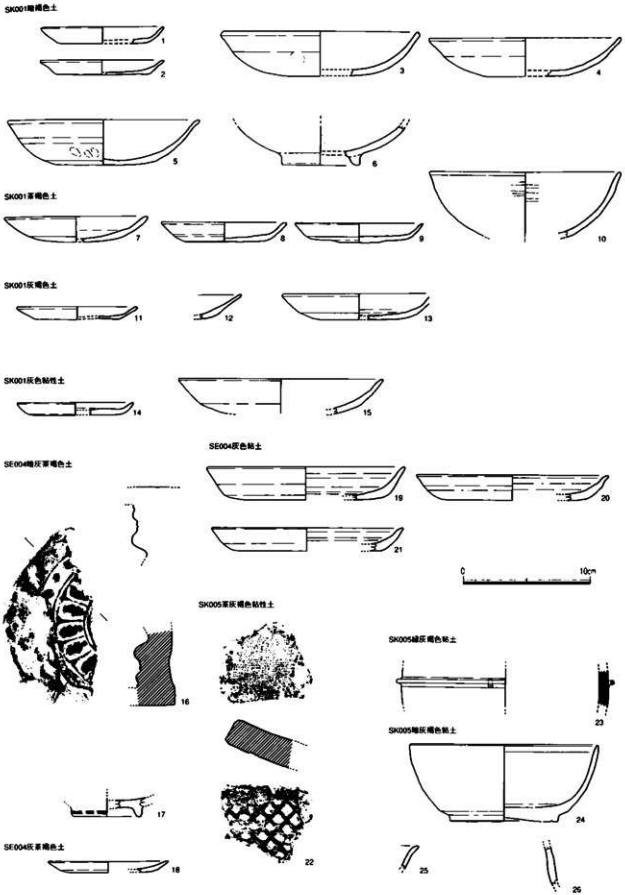


Fig.240-8　SE004・SK001・005出土遺物実測図（1:3）

る。底部切り離しは不明。

丸底坏a（15）　口縁部の破片である。推定口径10.6cm、残存高1.0cmを計る。磨耗のため底部切り離し及び内面ミガキは不明である。

SK004出土遺物（Fig.240-8・9）

SK004暗灰茶褐色土出土遺物

瓦類

軒丸蓮華文瓦（16）　外区は珠文で、内区は単弁の推定18弁である。外区珠文も蓮華文弁数に対応しているものと推定できる。

白磁

椀（17）　底部と高台部の小片で、残存高2.0cm、推定底径3.4cmを計る。高台は削り出しで、畳付は露胎している。胎土に化粧土を施した上に施釉している。Ⅱ類。

SK004灰茶褐色土出土遺物

土師器

小皿（18）　口縁部から底部にかけての破片で、推定口径9.4cm、器高0.9cm、推定底径7.0cmを計る。磨耗のため底部切り離し等は不明。

SK004灰色粘土出土遺物

土師器

坏a（19～21）　19は口縁部から底部にかけての破片で、推定口径15.4cm、器高2.6cm、推定底径12.0cmを計る。低部切り離しは糸切りで、内面は回転ナデである。20は口縁部から底部にかけての破片で推定口径15.0cm、器高2.0cm、推定底径12.0cmを計る。底部切り離しは不明で、内面は回転ナデである。21は口縁部から底部にかけての破片で、推定口径15.0cm、器高1.8cm、推定底径12.0cmを計る。底部切り離しは不明で、内面は回転ナデである。

井戸枠（Fig.240-9-1）　井戸底にある、ほぼ正方形の枠である。部材は長さ80～80.8cm、幅4.5～5.2cm、厚さ4.5～6.4cmの4本の角材をほぞで組んだものである。ほぞ組みの一部には隙間に木片を噛ませて固定しているものもある。

SK005土出土遺物（Fig.240-8・10）

SK005茶灰褐色粘性土出土遺物

瓦類

平瓦（22）　小片のため全容は不明であるが、残存幅5.9cm、残存高3.75cmを計る。上面は布目、下面は格子タタキで、端面の一部はヘラ切りである。

SK005緑灰褐色粘土出土遺物

須恵器

壺（23）　鍔付壺の破片で一部に穿孔が見られる。残存高は3.0cmで、内外面とも回転ナデである。

木製品

木杭（Fig.240-10-1）　自然木を利用して先端部のみを削って作った杭である。残存長67.15cm、中央付近の直径3.9cmを計る。

SK005暗灰褐色粘土出土遺物

木器

木胎漆器椀（24）　口縁部から底部にかけての破片で、推定口径14.8cm、器高6.0cm、推定底径8.4cmを計る。木胎部は木挽き成形で、高台部も造り出しである。木地のままの底部外面以外は、黒漆

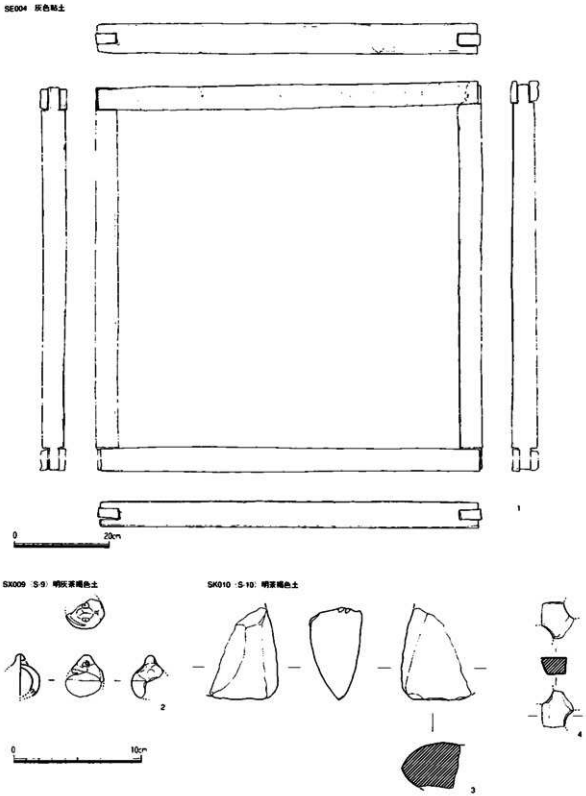


Fig.240-9　SE004・SX009・SK010出土遺物実測図（1は1/8、2～4は1/3）

塗りが施されている。

白磁

椀（25）　口縁部の破片で、残存高1.9cmである。釉薬はガラス質の透明釉で、貫入が入る。Ⅴ・2×Ⅷ・4類。

中国陶器

壺（26）　頸部の破片で、残存高3.25cmを計る。胎土からB群に属する遺物である。

SX009出土遺物（Fig.240-9）

SX009明灰茶褐色土出土遺物

土製品

土鈴（2）　鈕から下半にかけての破片である。残存高3.3cm、幅2.95cm、鈕径0.3cmを計る。体部下半は欠損しているため、スリットは認められず、丸も検出できなかった。

SK010出土遺物（Fig.240-9・10）

SK010明茶褐色土出土遺物

石器

石斧（9－3）　刃部片で、残存長7.2cm、残存幅5.4cm、残存厚3.55cm、残存重量172.9gを計る。石材は砂岩である。

土製品

七輪（9－4）　七輪のサナの破片で、穿孔部が2ヶ所確認できる。厚さ1.3cmを測る。

SK010灰色土出土遺物

瓦質土器

脚付破片（10－2）　脚部片で外面には矩形のスタンプ文を施してある。推定径16.0cm、残存高2.2cmを計る。

肥前系陶磁器（10－3・4）　3は、古唐津椀で体部下端から高台を含めた底部にかけての破片である。見込みには菊花文が描かれ、目砂あとも認められる。4は染付椀で、体部下端の破片である。見込みに二重圏線、外面に窓絵枠と思われる二重の線が確認できる。残存高は1.9cmを計る。

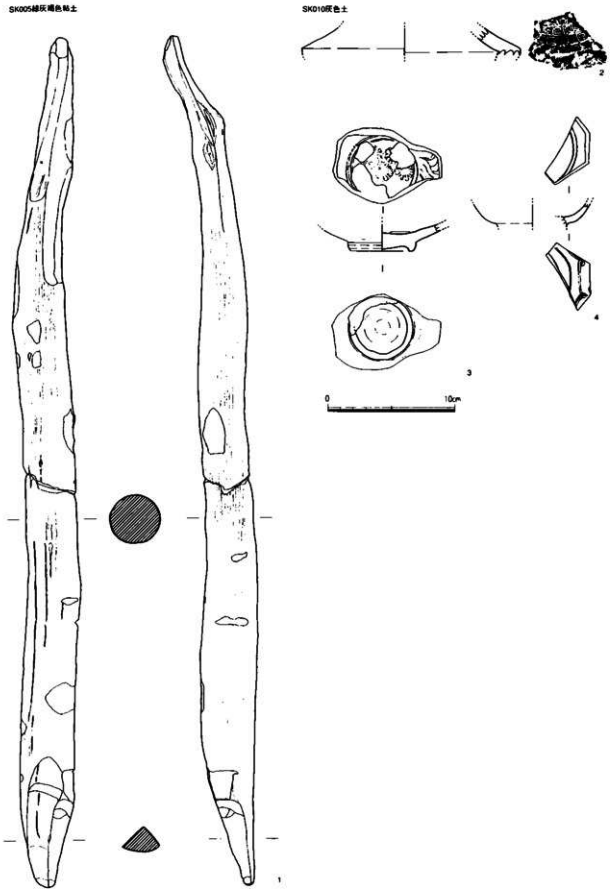


Fig.240-10　SK005・010出土遺物実測図（1/3）

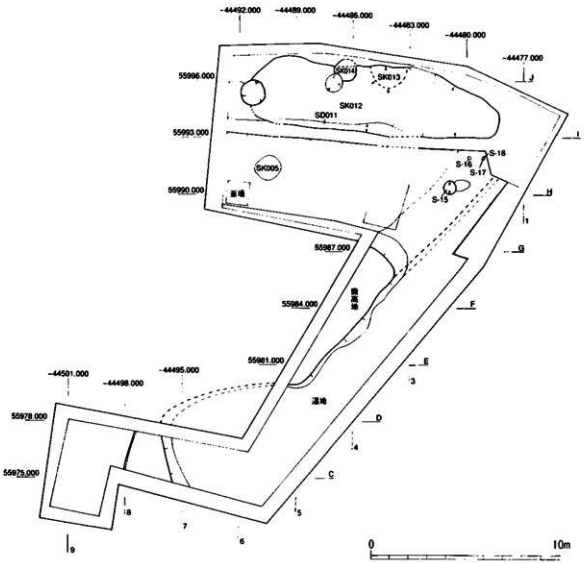


Fig.240-11　大宰府条坊跡第240次調査第２遺構面遺構配置図（1/200）

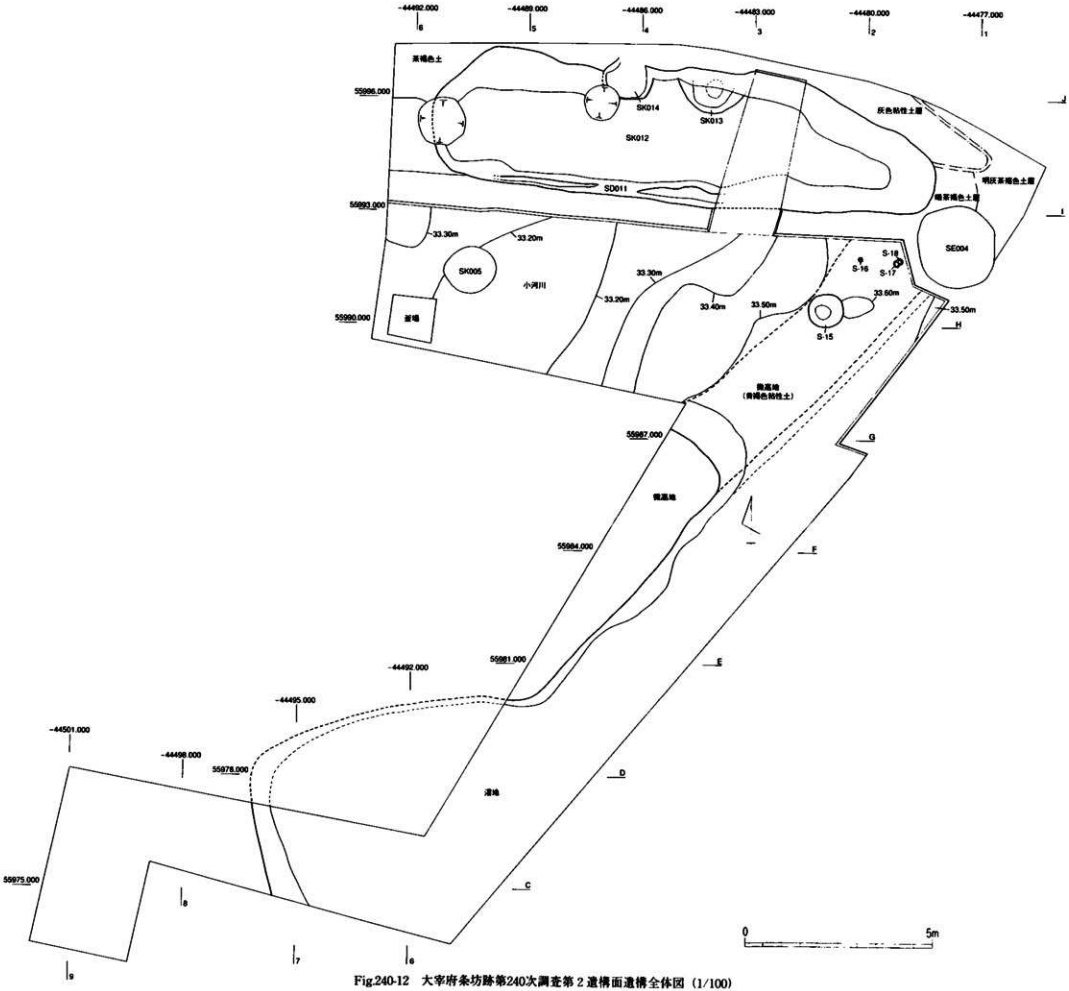


Fig.240-12　大宰府条坊跡第240次調査第２遺構面遺構全体図（1/100）

4. 遺構（第２遺構面）

土坑

240SK012（Fig.240-13）

H～J1～5グリッドで検出した。長大土坑で、西端が近現代の井戸によって切られているが、推定長軸13.5m、土層断面B－B'付近の幅3.6m、同所中央部の深さ0.7mを測る。近世の遺構で、第1遺構面の240ＳＫ010の直下にあり、本遺構の最終段階にＳＫ010が存在していたのであろう。

240SK013（Fig.240-13）

Ｉ・Ｊ３グリッドで検出した。調査区境界での検出なので全容は不明であるが、残存部から平面形は円形と推定できる。土層断面部の直径1.76m、同所中央部の深さ1.06mを測る。第11層は禾本科植物の純粋層で、厚いところで4cmを測る。この植物遺体層の下には約50cm近くも粘土層が堆積しており、本層がどのような状況・目的で形成されたのかは不明である。

240SK014（Fig.240-13）

Ｊ３・４グリッドで検出した。調査区境界での検出なので全容は不明であるが、平面形は概ね円形と推定できる。直径約1.3m、西壁部の深さ0.8mを測る。

溝

240SD011（Fig.240-13）

Ｉ3～5グリッドで検出した。東西方向に走行する遺構である。当初240ＳＫ010の埋土の一部と理解していたが、トレンチＩの土層断面（Fig.240-13　240SD011・SK012のB-B'土層図）からわかるように、240SK010と240SK012の間に位置していることから、別遺構と判断した。西側は検出した部分の続きが平面プラン確認段階で認められず、東側はトレンチＩによって削平されていたため、今回検出した範囲のみの報告となった。残存長は5.6m、土層断面Ａ－Ａ'ライン部での幅0.36m、深さ0.24mを測る。

5. 遺物（第２遺構面）

SD011出土遺物（Fig.240-14）

SD011明灰色土出土遺物

国産陶器

椀（１）　体部下端から底部にかけての破片で、残存高2.2cm、推定底径5.0cmを計る。胎土は粗めで、釉薬は外面底部を除く内外面に施され、ガラス質の緑色釉で貫入が入る。

壺（２）　体部下端の破片で、残存高5.6cm、推定底径7.0cmを計る。胎土は比較的緻密で、釉薬は白色釉で内面と外面の一部に施され、内面に貫入が入るが、外面には褐色釉による文様の一部が確認できる。

SK012出土遺物（Fig.240-14）

SK012灰色粘性土出土遺物

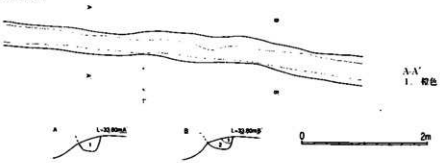
国産陶器

椀（３）　体部下端から底部にかけての破片で、残存高2.0cm、推定底径4.6cmを計る。胎土は比較的緻密で、外面の高台より内側以外は、内外面ともガラス質の緑色釉が施され、高台は直立する。

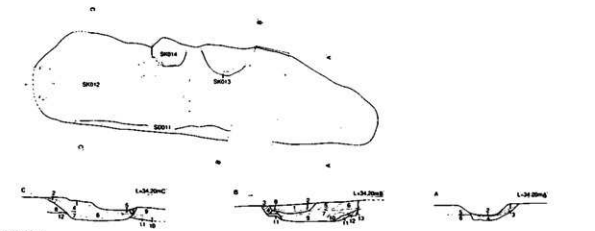
SK012青灰色粘土出土遺物

石器（４・５）　４は矢柄研磨器の破片と考えられ、残存長12.3cm、残存幅6.5cm、厚さ2.4cm、残存重量265.0ｇを計る。表面には1条の研磨溝が認められる。石材は結晶片岩である。５は砥石片で、残

240SK011



240SK011・SK012



240SK012

C-C'
1. 茶褐色土　SK010埋土
2. 淡灰褐色土
3. 橙色土　SD011埋土
4. 灰色粘質土
5. 青灰色粘土
6. 暗青灰色粘土
7. 暗青灰色混砂粘土
8. 茶褐色土
9. 灰茶褐色土
10. 灰色粘土
11. 暗褐色砂刻
12. 灰白色粘土

SK012埋土

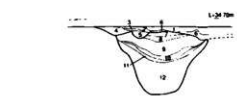
B-B'
1. 明茶褐色土
2. 灰色土
3. 灰色砂質土
4. 明灰色土
5. 灰色粘質土
6. 茶灰色粘質土
7. 青灰色粘土
8. 明青灰色粘質土
9. 暗青灰色粘土
10. 暗青灰色混砂粘土
11. 淡灰褐色粘質土
12. 灰色粘土
13. 灰白色粘質土

SK010埋土
SD011埋土
SK012埋土

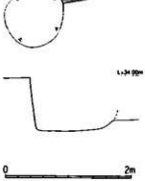
A-A'
1. 灰色粘質土
2. 青灰色粘土
3. 暗青灰色粘土
4. 明灰色砂質土
5. 灰色粘土
6. 灰白色粘土（又は灰色砂礫刻

SK012埋土

240SK013



240SK014



240SK013
1. 灰色粘質土
2. 茶褐色土
3. 植物遺体刻
4. 茶灰色土
5. 明灰色粘土
6. 赤茶褐色土
7. 青灰色粘土
8. 暗灰色粘土
9. 緑灰色粘土
10. 緑灰色粘土（地山ブロックを多量に含む）
11. 植物遺体刻
12. 灰色粘土

SK013埋土

Fig.240-13　240SD001・SK012・013・014実測図（1/60、SK012は1/150）

存長10.9cm、幅5.0cm、厚さ2.6cm、残存重量194.0gを計る。石材は凝灰岩である。

国産陶器（6・7）　6は体部下端から底部にかけての椀の破片で、残存高2.4cm、推定底径4.6cmを計る。胎土は比較的緻密で、畳付きが釉はぎされている以外は全て施釉されている。釉薬は透明釉で貫入が入る。7は皿×椀の底部片で残存高1.3cm、底径4.8cmを計る。見込みに蛇の目の褐釉を認めることができる。胎土は比較的粗い。

SK012暗青灰色粘土出土遺物

石製品

塼（8）　残存長10.25cm、残存幅6.05cm、残存厚5.1cm、残存重量389.1gを計る破片である。石材は凝灰岩である。

SK013出土遺物（Fig.240-14）

SK013灰色粘土出土遺物

土師器

椀c（9）　体部から底部にかけての破片で、残存高は3.4cmを計る。底部切り離しは糸切りである。内面は回転ナデのちミガキbのちミガキc、外面は回転ナデのちミガキcが施されている。外面の一部には指頭の痕跡が認められる。

6．遺物（堆積層）

灰褐色土層出土遺物（Fig.240-15）

須恵器

坏c（1）　体部下端から底部にかけての破片で、残存高1.8cm、推定底径4.8cmを計る。内外面とも回転ナデで、内面底部に焼成前に施された円弧状の沈線の一部が認められる。

肥前系陶磁器

椀（2）　底部の破片で、残存高1.8cm、推定底径4.5cmを計る。底部内外面とも回転ヘラ切りで、内面には3ヶ所の目砂跡が認められる。

茶灰褐色土層出土遺物（Fig.240-15）

須恵器

壺（3）　体部下半から底部にかけての破片で、残存高7.4cm、推定底径6.8cmを計る。外面の体部下端はヘラ削り、上端はハケ目で、それ以外は内外面とも回転ナデである。

土師器

丸底坏a（4）　約4／5の残存で、口径16.8cm、器高3.8cmを計る。磨耗のため調整は不明である。

脚付坏？（5）　底部片で残存高1.7cmを計る。脚部は欠損しており、調整も不明である。

白磁

椀（6）　口縁部片で残存高2.1cmを計る。素地に化粧土を塗布後ガラス質の透明釉を施している。Ⅴ－4×Ⅷ－3類。

灰茶褐色土層（Fig.240-15）

須恵器

皿（7）　口縁部から底部にかけての破片で、推定口径17.8cm、器高1.7cm、推定底径14.0cmを計る。内面体部はミガキa、外面体部は回転ナデ、底部はヘラ削りである。

瓦類

丸瓦（8）　破片で高さ6.5cm、推定径13.0cmを計る。外面は格子タタキで、内面には布目痕が残

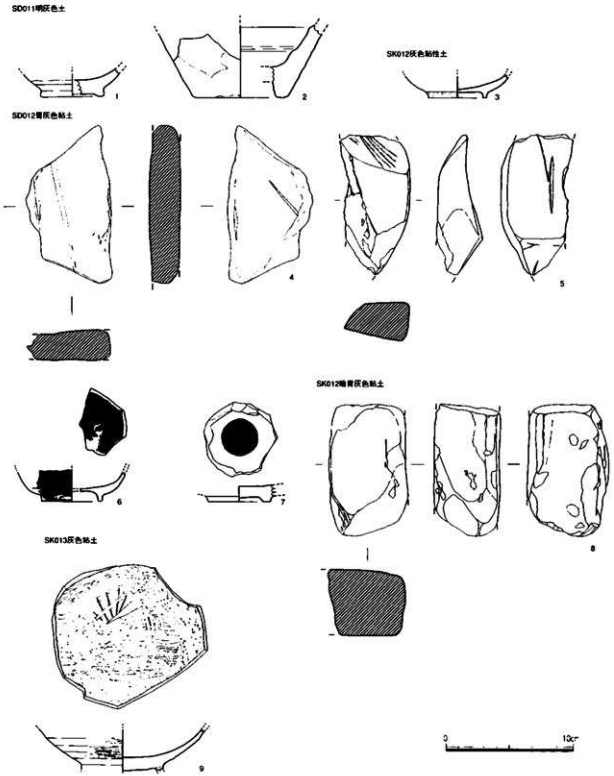


Fig.240-14　SD011・SK012・013出土遺物実測図（1/8）

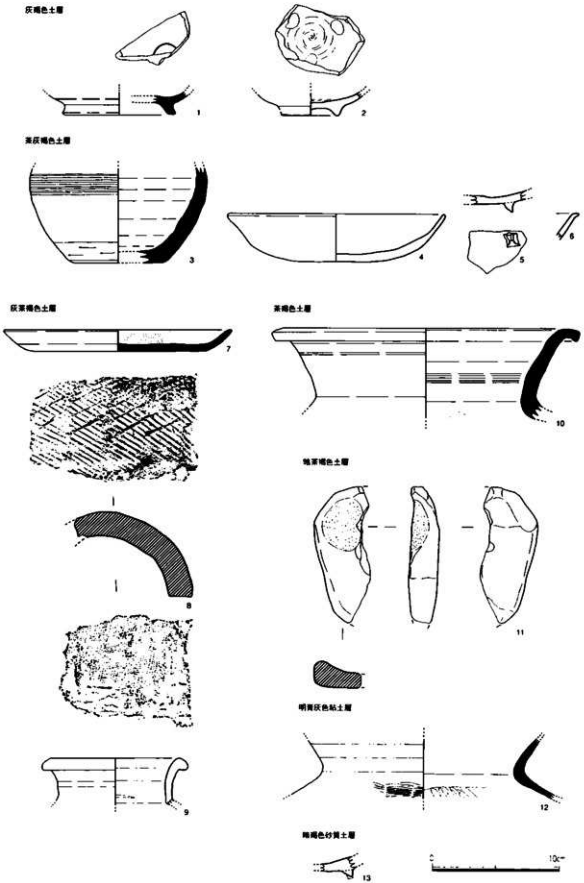


Fig.240-15　各土層出土遺物実測図（1 3）

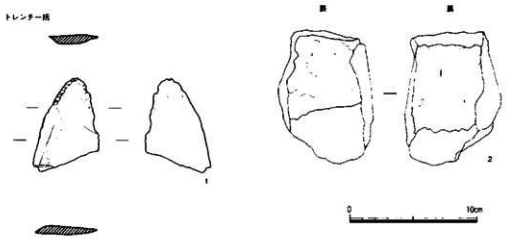


Fig.240-16　トレンチ一括出土遺物実測図（1/3）

る。

白磁

壺（9）　口頸部片で推定口径10.0cm、器高3.6cmを計る。頸部は外反気味に立ち上がり、口縁部は玉縁状である。Ⅲ類。

茶褐色土出土遺物（Fig.240-15）

須恵器

甕（10）　口頸部片で、頸部は逆「ハ」字状に立ち上がり、口縁部は大きく外反し、口縁部端は下方に肥厚する。

暗茶褐色土層出土遺物

石製品

不明製品（11）　片方にペッキングによる椀状の窪みがあるが、いかなる製品かは不明である。残存長10.6cm、残存幅3.7cm、厚さ2.1cm、残存重量120.2ｇを計る。石質は結晶片岩である。

明青灰色粘土層出土遺物（Fig.240-15）

須恵器

壺（12）　頸部から体部上端にかけての破片で残存高4.8cmを計る。頸部は内外面とも回転ナデ、体部は内面が同心円アテ具痕、外面は平行タタキである。

暗褐色砂質土層出土遺物（Fig.240-15）

土師器

坏c（13）　底部片で残存高1.5cmを計る。調整等は不明。

トレンチ一括出土遺物（Fig.240-16）

石器

掻器？（1）　一辺の一部に刃部があり、長さ7.3cm、幅5.1cm、厚さ0.7cm、残存重量23.6ｇを計る。石質は安山岩である。

埠？（2）　加工面が残っているのはごく一部で、全容は不明である。残存長10.4cm、残存幅7.3cm、厚さ9.8cm、残存重量1101.3ｇを計る。石質は花崗岩である。

（3）大宰府条坊跡第241次調査

1．層位

調査地は調査前まで宅地として利用されていた。明治以降に行なわれたと考えられる整地で1.4～2mの盛土が行なわれ、すべての上層の時期が確定できたわけではないが、少なくともその下に0.3m以上の中・近世堆積土が認められる。それらの下位にある茶褐色土層上面を第1遺構面の基盤面、さらにその下位の灰褐色砂質土層上面を第2遺構面の基盤面と認定した。茶褐色土層は方眼杭D～E列より北側全域に認められる。それより南には茶褐色砂層が露出しており、さらにその南は鮫若寺の丘陵から西に延びる尾根の北斜面となっている。調査は、まず茶褐色土層をわずかに掘り下げた上で精査し、遺構面の検出を行った。ここで検出した遺構の基本的な埋土は灰茶褐色土、暗茶褐色土である。遺構は西側に集中しており、東側は希薄である。このため調査期間短縮の必要もあり、遺構が確認できない部分については第2遺構面の検出を並行して行った。このため、現地で付した遺構番号の中には遺構面の順番に付いていないものも含まれる。第1遺構面の遺構調査終了後、西側も灰褐色砂質土層の検出に着手したが、同層が検出できたのは、方眼杭F列とG列の中間ラインより北側のみで、それより南側は尾根地山土層である淡黄褐色土が流入して粘土化して形成されたと考えられる灰白色粘土層が覆っている。

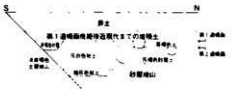


Fig.241-1　大宰府条坊跡第241次調査土層模式図

次に各遺構面についての概要を述べる。

第1遺構面

本遺構面は南端の尾根斜面とその裾部以外の、今回調査範囲のほぼ全域で確認できた。この遺構面の上に展開する遺構から出土する遺物は、8世紀中葉（須恵器：牛頸石坂C1）から9世紀前半（大宰府編年ⅥB期）のものが中心であるが、10世紀末から12世紀代（大宰府編年Ⅹ～ⅩⅡ期）のものも含まれるため、上限は後述する茶褐色土層の時期判断から9世紀前半、下限は12世紀代と考えられる。

茶褐色土層

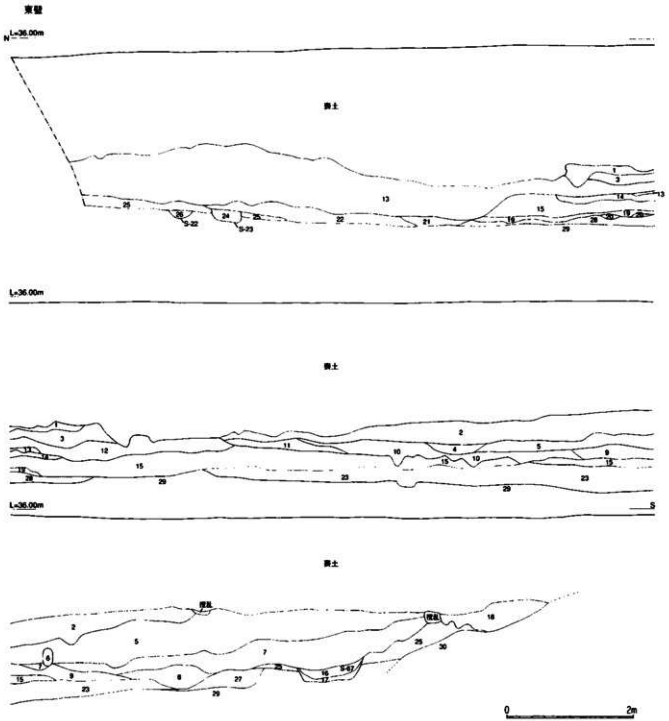
第1遺構面の基盤層である。本土層から出土する遺物は8世紀中葉（須恵器：牛頸石坂C1・C2）から9世紀前半（大宰府編年ⅥB期）のものが中心である。この基盤層が形成された下限は、9世紀前半ころと考えられる。一部12世紀代の遺物も出土しているが、これは後世の混入と判断している。

第2遺構面

第1遺構面の基盤層である茶褐色土層を剥ぎ取った下から検出した面を第2遺構面とした。この遺構面の上に展開する遺構から出土する遺物は7世紀末（須恵器：牛頸ハセムシ12）から9世紀初頭（大宰府編年ⅥA期）のものである。第2遺構面を覆う第1遺構面の基盤層である茶褐色土層の形成時期は下限が9世紀前半であるので、第2遺構面の遺構は、おおむねそれ以前の8世紀代から9世紀初頭頃形成されたことが推定できる。

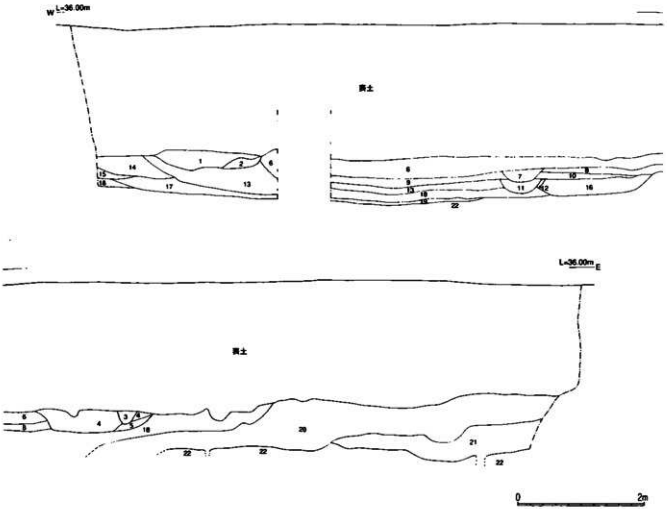
灰褐色砂質土層

第2遺構面の基盤層である。分布範囲は調査区北半部で、本土層中から出土する遺物は、7世紀末から8世紀中葉（須恵器：牛頸井手X—2・後出66—Ⅰ～牛頸石坂C1）のものである。このことから本土層が形成された下限は、8世紀中葉頃と考えられる。



1. 茶灰褐色土
2. 明茶褐色粘質土
3. 灰茶褐色土
4. 暗茶褐色土
5. 明茶褐色粘性土
6. 茶褐色粘性土ブロック
7. 暗茶褐色土
8. 茶褐色粘性土
9. 茶褐色粘質土
10. 灰茶褐色粘性土
11. 茶褐色粘質土
12. 明茶褐色土
13. 明褐色粘性土
14. 暗茶灰褐色土
15. 淡茶褐色土
16. 明茶褐色土（SK057埋土）
17. 淡茶褐色土（SK067埋土）
18. 淡茶褐色粘性土
19. 淡灰茶褐色土
20. 明青灰色粘土
21. 明茶灰褐色土
22. 灰褐色粘性土
23. 茶褐色土
24. 茶褐色土（S-23埋土）
25. 灰褐色砂質土
26. 灰茶褐色土（S-22埋土）
27. 茶褐色砂層
28. 青灰色粘土
29. 灰白色粘土
30. 淡黄褐色土(石陵地山)

Fig.241-2　大宰府条坊跡第241次調査区東壁土層図（1/60）



1．茶灰褐色粘性土
2．明茶褐色土
3．明茶褐色砂質土
4．明茶褐色粘性土
5．明茶褐色土
6．茶褐色粘質土
7．茶灰褐色土
8．茶褐色砂質土
9．茶灰褐色砂質土
10．灰茶褐色砂質土
11．明灰褐色砂質土
12．明灰茶褐色粘質土
13．灰褐色粘質土
14．明灰茶褐色土
15．灰褐色粘性土
16．淡茶褐色土（SK025埋土）
17．淡茶褐色土
18．茶褐色土
19．灰色砂質土（SD045埋土）
20．明灰茶褐色土
21．灰褐色粘性土
22．灰褐色砂質土

Fig241-3　大宰府条坊跡第241次調査区北壁土層図（1/60）

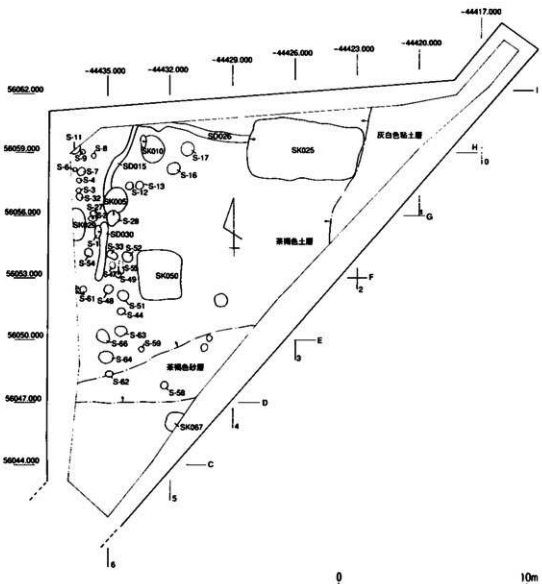


Fig.241-4　大宰府条坊跡第241次調査第１遺構面遺構配置図（1/200）

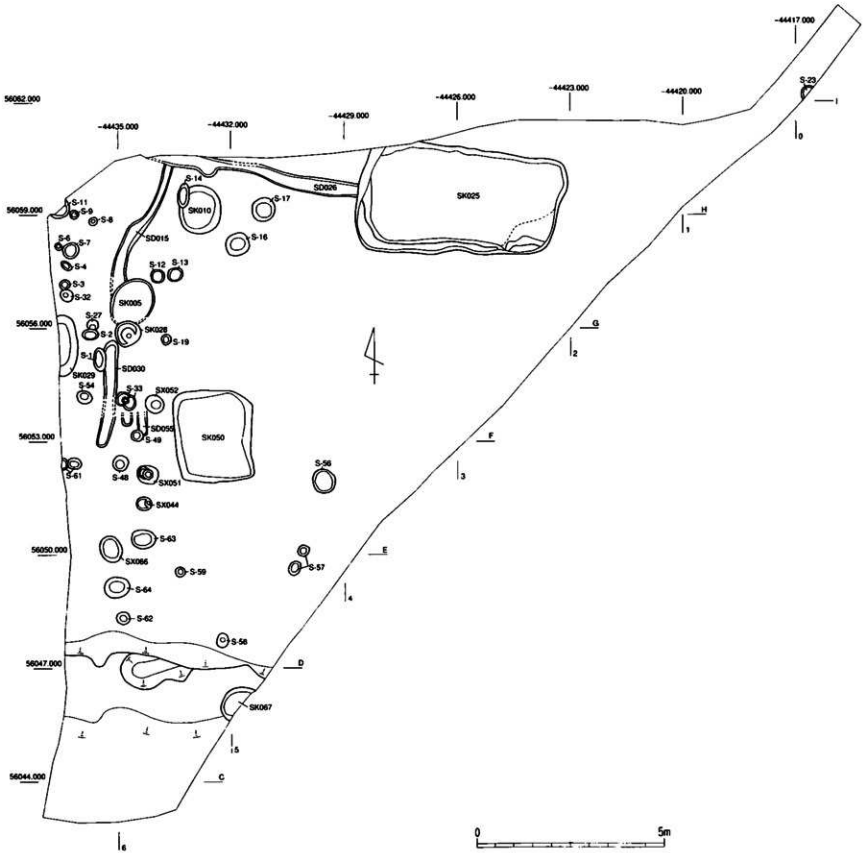


Fig.241-5　大宰府条坊跡第241次調査第１遺構面遺構全体図（1/100）

2. 遺構（第１遺構面）

掘立柱建物跡

241SB046（Fig.241-６）

E～G5～6で検出した。西列の北西隅と南西隅の柱穴は確認できなかったが、東列で検出した柱穴から判断して南北は４間、東西は１間である。南北長は柱穴の芯々間で7.06m、東西長は同じく1.95～2.00mである。深さは0.14～0.35mを測る。東西の間数については、西側の調査区外に延びる可能性もある。

土坑

241SK005（Fig.241-６）

G5・6グリッドで検出した。形状は楕円形であるが、南側は削平と別遺構との切りあいで不明である。推定長軸1.36m、短軸1.07m、中央部の深さ0.06mを測る。

241SK010（Fig.241-６）

G・H5グリッドで検出した。形状は楕円形で、長軸1.1m、短軸1.26m、中央部の深さ0.19mを測る。

241SK025（Fig.241-７）

G・H1～3グリッドで検出した。形状は隅丸長方形で、長軸5.34m、短軸2.68m、中央部の深さ0.16mを測る。比較的浅いが長大な土坑であり、何らかの理由で整地のために作られたのではないかと推定している。

241SK029（Fig.241-７）

F・G６グリッドで検出した。調査区境界にあるため全容は不明であるが、検出部から判断すると楕円形と推定できる。長軸1.48m、中央部の深さ0.22mを測る。

241SK050（Fig.241-７）

E・F4・5グリッドで検出した。隅丸長方形で長軸2.41m、短軸2.04m、中央部の深さ0.21mを測る。多量の遺物が出土している。

241SK067（Fig.241-７）

C4・5グリッドで検出した。調査区境界にあるため全容は不明であるが、検出部から判断すると楕円形と推定できる。深さは壁際中央部で0.22mを測る。

溝

241SD015（Fig.241-６）

G・H5・6グリッドで検出した。北部はＳＤ026に、南部はＳＫ005によって切られている。中央部の幅0.4m、深さ0.08mを測る。

241SD026（Fig.241-６）

H3～5グリッドで検出した。西部は調査区外に延び、東部はＳＫ025によって切られている。中央部の幅0.38m、深さ0.08mを測る。

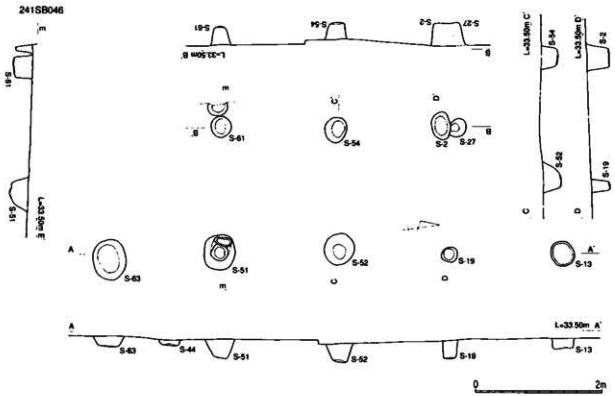
241SD030（Fig.241-７）

E・F6グリッドで検出した。中央の一部は削平のため欠損している。わずかに弧状であるが、長さは2.8m、幅0.34～0.36m、深さ0.09mを測る。

3. 遺物（第１遺構面）

241SK005出土遺物（Fig.241-８）

241SK005暗灰褐色土出土遺物



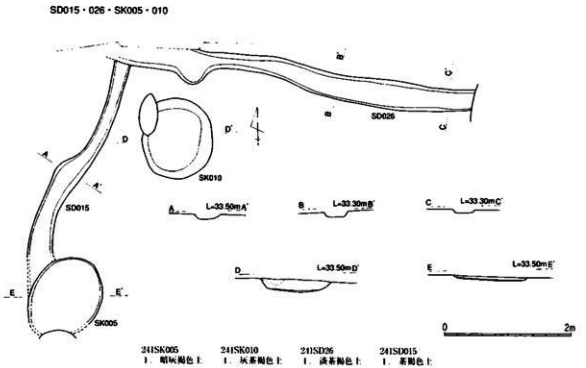


Fig.241-6 241SB046・SK005・010・SD015・026実測図 (1/60)

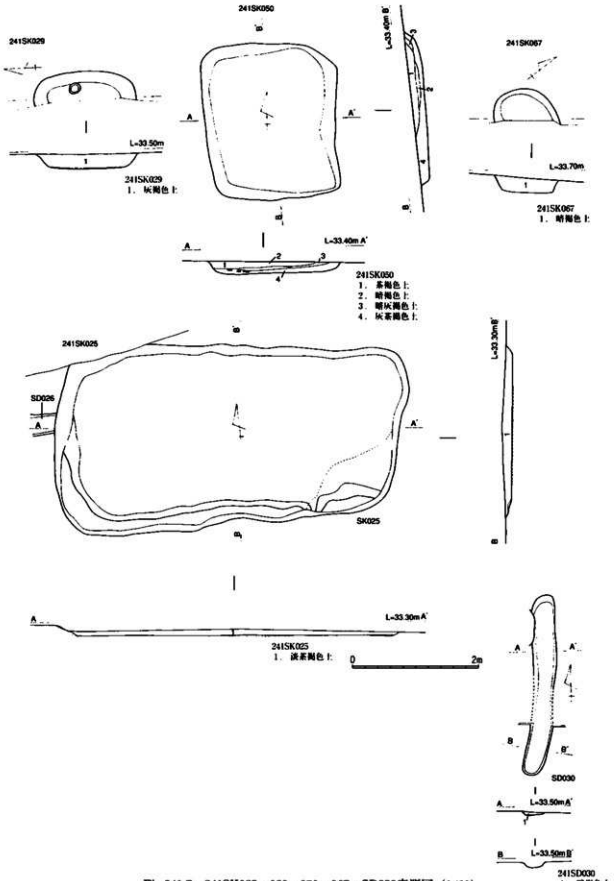


Fig.241-7　241SK025・029・050・067・SD030実測図（1/60）

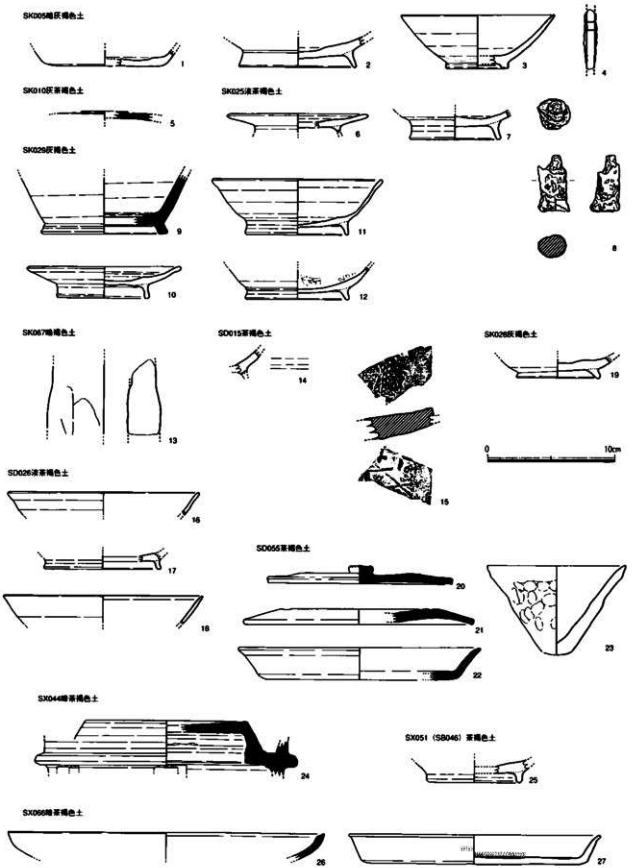


Fig.241-8　241SK005・010・025・029・067・SD015・026・028・055・SX044・051・066・出土遺物実測図（1/3）

土師器

坏a（1）　体部から底部にかけての破片で、残存高1.3cm、推定底径8.0cmを計る。内面はナデ調整であるが、外面は磨耗のため不明。

椀c（2）　体部下端からから底部にかけての破片で、残存高2.4cm、推定高台径9.0cmを計る。内面と外面底部はナデ、外面体部は回転ナデである。

越州窯系青磁

椀Ｉ－２b（3）　口縁部から高台部にかけての破片で、推定口径11.8cm、器高4.15cm、推定高台径4.8cmを計る。

金属製品

鏃茎×釘（4）　全体の途中の破片のため、全容は不明であるが、上部から下部にかけてわずかに細くなっている。残存長4.7cm、幅･厚さとも0.6cmである。

241SK010出土遺物（Fig.241-8）

241SK010灰茶褐色土出土遺物

須恵器

蓋c（5）　体部片で、残存高0.75cm、つまみの推定径は3.6cmを計る。外面体部は回転ヘラ削り。内面は磨耗のため不明。つまみは扁平で高さは0.15cmしかない。

241SK025出土遺物（Fig.241-8）

241SK025淡茶褐色土出土遺物

土師器

小皿c（6）　口縁部から底部にかけての破片で、推定口径10.6cm、残存高1.5cm、を計る。調整等は磨耗のため不明。

椀c（7）　体部下半から底部にかけての破片で、残存高2.3cm、高台径7.0cmを計る。内外面底部はナデ、外面体部から高台部にかけては回転ナデ。

金属製品

不明銅製品（8）　残存高4.4cm、低部径2.5cm、残存重量70.7ｇを測る。小仏像の一部か。

241SK028出土遺物（Fig.241-8）

241SK028灰褐色土出土遺物

土師器

椀c（19）　底部片で、残存高1.7cm、推定高台径6.4cmを計る。底部は内外面ともナデ、外面体部から高台部にかけては回転ナデ。

241SK029出土遺物（Fig.241-8）

241SK029灰褐色土出土遺物

須恵器

壺（9）　体部から底部にかけての破片で、残存高4.6cm、推定高台径9.6cmを計る。外面体部下端が回転ヘラ削り、底部がナデ。それ以外は回転ナデ。

土師器

小皿c（10）　ほぼ完形で口径11.8cm、器高2.55cm、高台径7.0cmを計る。磨耗のため底部切り離し及び調整は不明である。

椀c（11・12）　11は口縁部から底部にかけての破片で、推定口径13.2cm、器高4.35cm、高台径7.9cmを計る。底部切り離しは回転ヘラ切り。12は体部下端から底部にかけての破片で、残存高2.6cm、推定

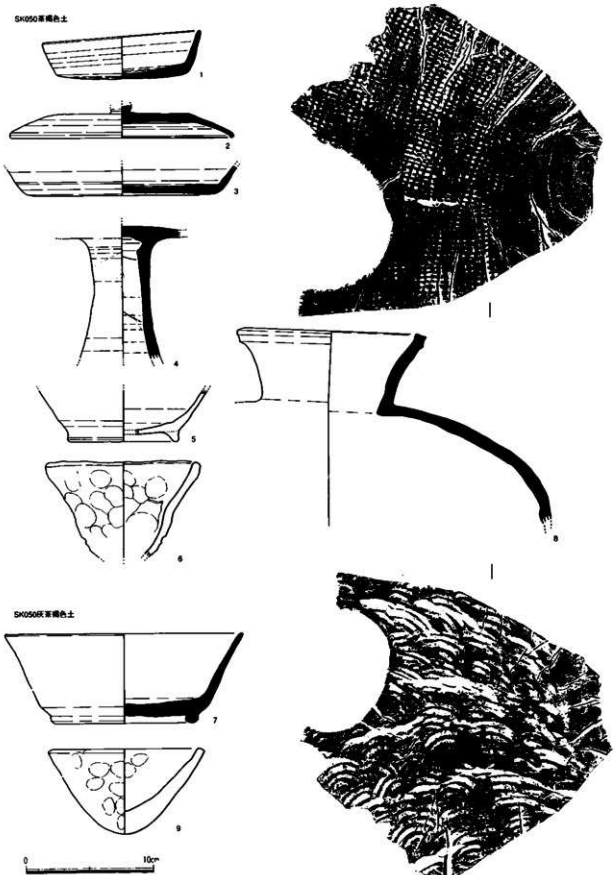


Fig.241-9　241SK050出土遺物実測図（1/3）

高台径7.9cmを計る。内面はミガキc、外面体部から高台部にかけては回転ナデ、底部はナデ。

241SK050出土遺物（Fig.241-9）

241SK050茶褐色土出土遺物

須恵器

坏a（1）　約半分の残存で、推定口径12.2cm、器高3.45cm、器高9.9cmを計る。内面と外面体部は回転ナデ、底部切り離しはヘラ切り。

蓋c3（2）　ほぼ完形で、口径17.2cm、器高2.5cm、つまみ径1.7cmを計る。体部外面内縁はナデ、外縁から内面にかけては回転ナデ。

皿（3）　体部下端から底部にかけての破片で、残存高2.3cm、推定底径13.8cmを計る。内面と外面体部は回転ナデ、外面底部は板圧痕。

高坏（4）　坏底部から脚部にかけての破片で、残存高10.3cmを計る。坏底部はナデ、脚部内外面とも回転ナデの後、斜めに絞り上げるような回転ナデが認められる。

土師器

椀c（5）　体部から底部にかけての破片で、残存高4.0cm、推定高台径8.4cmを計る。磨耗のため調整不明。

製塩土器

焼塩壺（6）　小片で、推定口径11.4cm、残存高7.5cmを計る。内外面ともユビオサエ。Ⅰ類。

241SK050茶褐色土出土遺物

須恵器

坏c（7）　口縁部から底部にかけての破片で、推定口径18.6cm、器高7.0cm、高台径10.7cmを計る。内面と外面体部は回転ナデ、外面底部はナデ。

製塩土器

横瓶（8）　口縁部から体部上半にかけての破片で、口径13.3cm、残存高15.5cmを計る。口頸部は内外面とも回転ナデ、内面体部は同心円圧痕、外面体部は格子タタキ。

焼塩壺（9）　約半分の残存で、口径12.2cm、器高6.7cmを計る。内面下半はユビナデ、上半と外面はユビオサエ。Ⅱb類。

241SK067出土遺物（Fig.241-8）

241SK067暗褐色土出土遺物

土製品

羽口（13）　約1/10の破片で、残存長5.9cm、推定直径8.8cmを測る。

溝出土遺物

241SD015出土遺物（Fig.241-8）

241SD015茶褐色土出土遺物

土師器

椀c（14）　底片で、残存高2.0cmを計る。内面はナデ、外面は回転ナデ。

瓦類

文字瓦（15）　小片で下面には格子タタキと文字の一部が残っているが、解読は不能である。

241SD026出土遺物（Fig.241-8）

241SD026灰茶褐色土出土遺物

土師器

坏（16）　口縁部片で、推定口径14.8cm、残存高1.8cm、を計る。磨耗のため調整等は不明。

高台片（17）　底部片で、残存高1.3cm、推定高台径9.0cmを計る。内面はナデ、外面は回転ナデ。

越州窯系青磁

椀（18）　口縁部片で、推定口径15.4cm、残存高2.2cm、を計る。釉薬はガラス質の黄褐色釉。Ⅰ類。

241SD055出土遺物（Fig.241-8）

241SD055茶褐色土出土遺物

須恵器

蓋c3（20）　推定口径14.3cm、器高1.4cm、つまみ径1.9cmを計る。体部外面外縁から内面にかけては回転ナデ、外面中央部はヘラ削り。

蓋4(21)　小片で、体部外面外縁から内面にかけてと外面中央部は回転ナデ、それ以外の外面はヘラ削り。

皿（22）　小片で、推定口径19.0cm、器高2.5cm、推定底径14.6cmを計る。内面と外面体部は回転ナデ、底部はナデ。

製塩土器

焼塩壺（23）　約半分の残存で、推定口径10.8cm、器高6.9cmを計る。内面はナデ、外面はユビオサエ。Ⅱｂ類。

241SX044出土遺物（Fig.241-8）

241SX044暗茶褐色土出土遺物

須恵器

円面硯（24）　陸から脚上端部にかけての破片で、推定陸径12.6cm、残存高4.2cmを計る。陸部はナデ、それ以外は回転ナデ。脚上端には方形透かしの一部が残っており、陸部は使用の痕跡はない

241SX051出土遺物（Fig.241-8）

241SX051茶褐色土出土遺物

土師器

椀c（25）　小片で、残存高1.8cm、推定高台径7.1cmを計る。磨耗のため調整不明。

241SX052出土遺物（Fig.241-10）

241SX052灰茶褐色土出土遺物

土師器

坏a（1）　ほぼ完形で、口径12.2cm、器高3.65cm、底径7.15cmを計る。内面底部はナデ、底部切り離しはヘラ切り。

甕a（2・3）　2は口縁部から体部上半にかけての破片で、推定口径29.8cm、残存高10.0cmを計る。内面体部はハケ目、外面体部はミガキ。3は口縁部から体部上半にかけての破片で、推定口径26.4cm、残存高9.4cmを計る。内面体部はヘラ削り、外面はハケ目。

鉢（4）　口縁部から体部にかけての破片で、推定口径21.0cm、残存高5.4cmを計る。磨耗のため調整不明。

241SX066出土遺物（Fig.241-8）

241SX066暗茶褐色土出土遺物

須恵器

高坏（26）　口縁部片で、推定口径24.6cm、残存高2.0cmを計る。内外面とも回転ナデ。

土師器

皿a（27）　口縁部から底部にかけての破片で、口径19.6cm、器高2.3cm、底径17.6cmを計る。内面と外面体部はミガキa、底部切り離しはヘラ切り。

茶褐色土出土遺物（第1遺構面基盤層）（Fig.241-10～14）

須恵器

蓋c1（Fig.241-10－5）　約半分の残存で、口径17.0cm、残存高3.6cm、つまみ径3.8cmを計る。著しい生焼けで、調整等は不明。

蓋2（Fig.241-10－6）　小片で、推定口径16.4cm、残存高1.4cmを計る。内面体部は回転ナデ、外面口縁部は回転ナデ、体部は回転ヘラ削り。

蓋c3（Fig.241-10－7）　約2／3の残存で、口径15.6cm、器高2.3cm、つまみ径2.5cmを計る。つまみはナデ、内面から外面外縁部までは回転ナデ、内縁部は回転ヘラ削り。

蓋3（Fig.241-10－8）　小片で、推定口径16.8cm、残存高1.8cmを計る。焼成不良で磨耗のため、調整不明。

小蓋c3（Fig.241-10－9）　約3／5の残存で、推定口径6.6cm、器高2.3cm、つまみ径1.6cmを計る。内面から外面外縁部までは回転ナデ、内縁部はミガキ。法量が小さく、ミガキが丁寧にかけられていることや、他の類例では古墳から出土していることなどから、祭祀用の須恵器と考えられる。

坏c（Fig.241-10－10）　ほぼ完形で、口径16.2cm、器高5.45cm、高台径10.0cmを計る。焼成不良で磨耗のため、調整不明。

高坏（Fig.241-10－11・12）　11は坏部片で、推定口径18.0cm、残存高1.4cmを計る。内面底部はナデ、体部から外面にかけては回転ナデ。12は短脚高坏の脚部片で、残存高4.3cm、脚裾径は9.6cmを計る。坏底部内面はナデ、脚部は内外面とも回転ナデ。

甕a（Fig.241-10－13）　口縁部から体部上端にかけての破片で、口径23.2cm、残存高7.7cmを計る。内面体部は同心円圧痕、外面体部は平行タタキ。口縁内面に自然釉付着。

鉢（Fig.241-10－14・15）　14は口縁部から底部にかけての破片で、推定口径24.2cm、器高17.1cm、底径15.2cmを計る。内面底部はナデ、体部と外面体部上半は回転ナデ、下半から底部にかけては回転ヘラ削り。15は体部から底部にかけて残存し、残存高9.45cm、底径5.8cmを計る。内面は回転ナデ、外面体部は回転ナデ後、ユビナデ、擦痕、ヘラ傷あり。外面底部はヘラによる調整あり。

鉢（Fig.241-11－1・2）　1は口縁部から体部上半にかけての破片で、推定口径36.2cm、残存高12.4cmを計る。内面は平行タタキ、外面は縄蓆状タタキで、外面に楕円形の中に「・」のヘラ文様がある。2は口縁部から体部上半にかけての破片で、推定口径37.0cm、残存高6.9cmを計る。内面から外面体部上端にかけては回転ナデ、外面体部下半は平行タタキ。口唇部は大きく外反し、肥厚する。

横瓶（Fig.241-11－3）　口縁部から体部上端にかけての破片で、推定口径9.1cm、残存高9.0cmを計る。口頸部は内外面とも回転ナデ、体部内外面も回転ナデで、外面には3～4条のヘラによる同心円沈線がめぐる。

円面硯（Fig.241-11－4・5）　4は海から脚裾までの破片で、残存高6.6cm、推定脚裾径19.0cmを計る。脚部には長方形透かしが開けられ、裾部には2条の沈線がめぐる。5は海から脚裾部の破片で、残存高4.4cm、推定脚裾径24.2cmを計る。内外面とも回転ナデだが、透かしは認められない。

脚（Fig.241-11－6・7）　両遺物とも獣脚の退化したもので、6は残存高2.8cm、手捏ねである。7は残存高2.3cmで、ヘラ削りである。

土師器

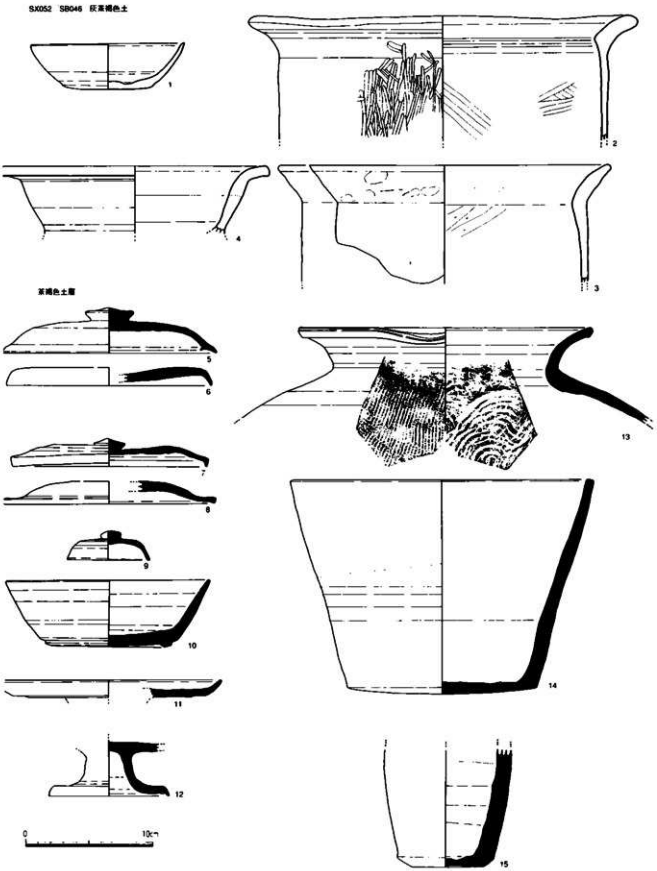


Fig.241-10 241SX052・茶褐色土層出土遺物実測図（1/3）

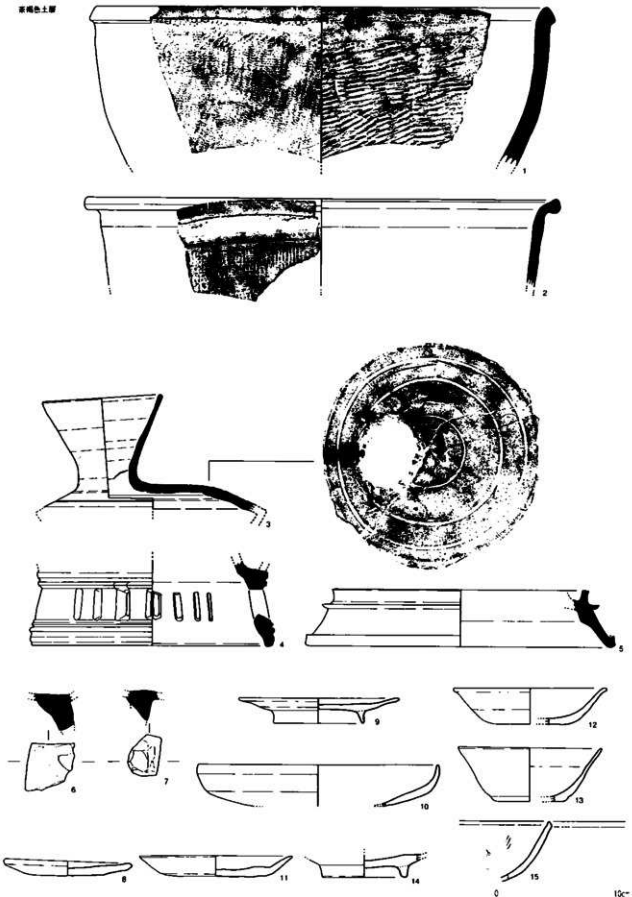


Fig.241-11　大宰府条坊跡第241次調査茶褐色土層出土遺物実測図(2)（1・3）

小皿a（Fig.241-11－8）　完形で口径10.0cm、器高1.1cm、底径6.0cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。

皿c（Fig.241-11－9）　約2／3の残存で、推定口径12.6cm、器高1.9cm、高台径7.0cmを計る。磨耗のため調整不明。

皿b（Fig.241-11－10）　小片で、推定口径18.6cm、残存高3.3cmを計る。磨耗のため、調整等は不明。

坏a（Fig.241-11－11～13）　11は約半分の残存で、推定口径12.0cm、器高1.6cm、底径8.0cmを計る。底部切り離しは回転ヘラ切り。12は約1／4の残存で、推定口径12.0cm、器高2.8cm、推定底径7.0cmを計る。底部切り離しは回転ヘラ切り。13は約半分の残存で、推定口径11.2cm、器高4.2cm、底径6.0cmを計る。

坏c（Fig.241-11－14）底部片で、残存高1.8cm、高台径6.6cmを計る。高台接合部はナデ、それ以外は磨耗のため不明。

坏（Fig.241-11－15）　小片で、残存高4.6cmを計る。内外面ともナデ。畿内産土師器である。

坏c(Fig.241-12－1）　小片で、残存高1.6cmを計る。内面には螺旋および平行暗文。畿内産土師器である。

椀（Fig.241-12－2）　約1／4の残存で、推定口径16.0cm、残存高5.9cmを計る。磨耗のため調整等は不明。

壺×鉢（Fig.241-12－3）　体部から底部にかけて残存し、残存高13.2cm、底径6.7cmを計る。内面は指頭による整形、外面は磨耗のため不明。

甕（Fig.241-12－4）　約1／4の残存で、推定口径18.7cm、残存高16.7cmを計る。角閃石を含む。

把手付甕（Fig.241-12－5）　口縁から体部下半にかけて残存し、推定口径23.5cm、残存高28.4cmを計る。体部内外面ともハケ目を基本とし、内面の一部にヘラ削り。把手部の整形はヘラ削り。

製塩土器

焼塩壺（Fig.241-12－6）　約1／3の残存で、推定口径8.6cm、器高5.5cmを計る。内外面ともによるユビオサエ。Ⅰ類？

煎熬土器（Fig.241-12－7）　小片で、残存高9.0cmを計る。内外面ともタタキで、内面の一部にユビオサエ痕跡。

黒色土器A

椀c(Fig.241-12－8～10）　8は小片で、残存高2.4cmを計る。磨耗のため調整等は不明であるが、外面体部下端に沈線。9は約1／3の残存で、残存高4.5cm、推定高台径7.6cmを計る。10は約1／4の残存で、残存高2.2cmを計る。磨耗のため調整等は不明。

越州窯系青磁

椀（Fig.241-12－11）　小片で、推定口径18.0cm、残存高4.5cmを計る。破片の端の口縁部がわずかに窪み、体部に連弁の一部が観察できることから、輪花椀である。Ⅰ－2b類。

長沙窯系青磁

水注（Fig.241-12－12）　頸部から体部上半にかけての破片で、残存高6.4cmを計る。片部に把手基部が残存している。

瓦類

行基瓦（Fig.241-13－1）　約1／4の残存で、残存高7.9cmを計る。上面はナデ、下面は布目痕。

平瓦（Fig.241-13-2・3）　2は破片で、残存幅10.1cm、厚さ1.8cmを計る。上面は布目痕、下面は格子タタキ。3は小片で、残存幅2.3cm、厚さ1.05cmを計る。上面は格子状タタキ。

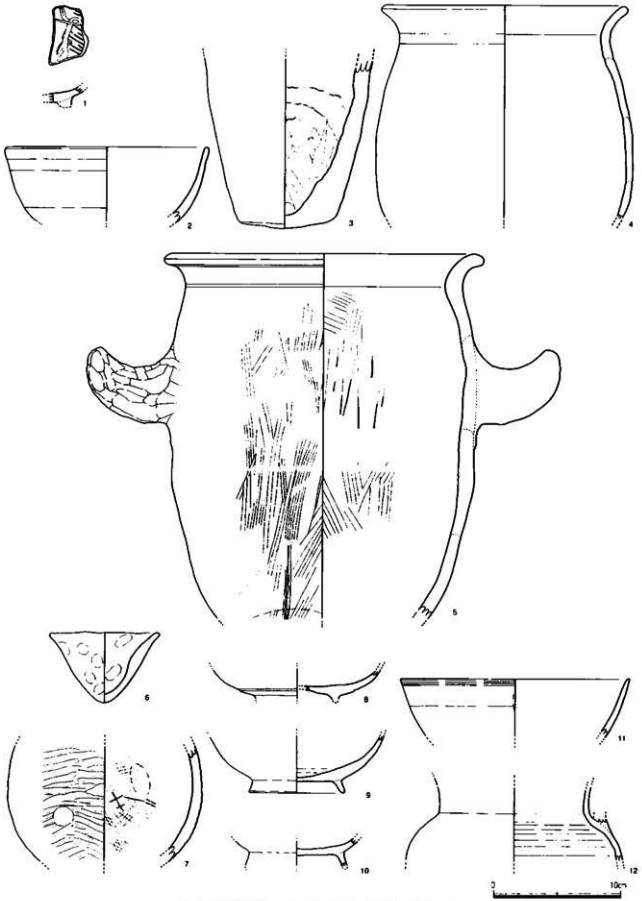


Fig.241-12　大宰府条坊跡第241次調査茶褐色土層出土遺物実測図(3)（1/3）

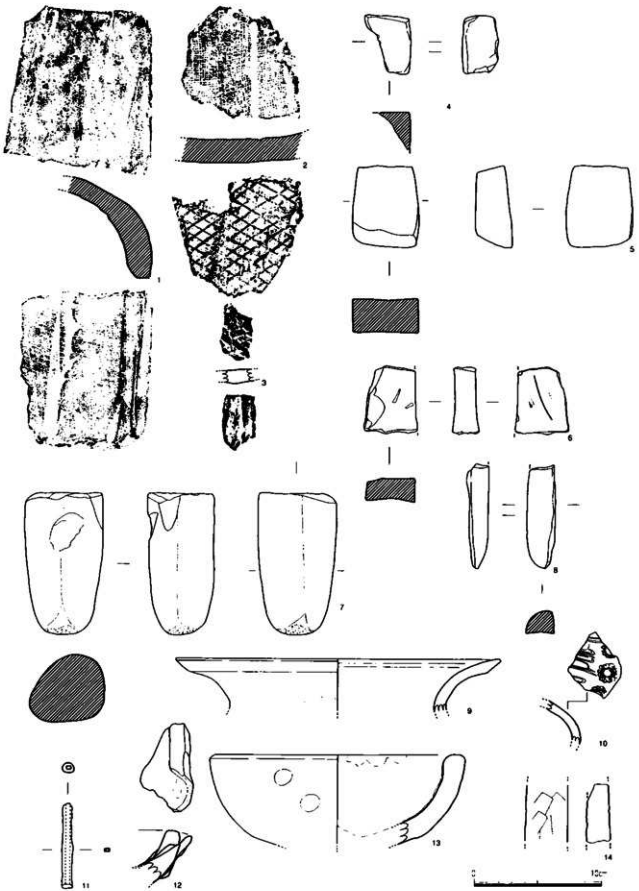


Fig.241-13　大宰府条坊跡第241次調査茶褐色土層出土遺物実測図(4)（1 3）

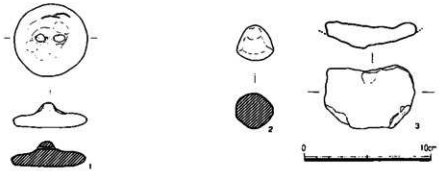


Fig.241-14　大宰府条坊跡第241次調査茶褐色土層出土遺物実測図(5)（1/3）

石製品

塼（Fig.241-13－４）　残存長4.6cm、残存幅3.5cm、残存厚2.3cm、残存重量39.8ｇを計る。石材は凝灰岩である。

砥石（Fig.241-13－５・６）　５は上半部が欠損しており、残存長6.4cm、幅5.2cm、厚さ2.6cm、残存重量155.6ｇを計る。４面に使用痕あり。石材は凝灰岩。６は上下が欠損し、残存長5.3cm、幅4.2cm、厚さ1.7～2.05m、残存重量68.0ｇを計る。石材は凝灰岩。４面に使用痕あり。

叩き石（Fig.241-13－７）　約半分欠損し、残存長11.0cm、幅6.2cm、残存重量561.6ｇを計る。石材は結晶片岩である。

不明製品（Fig.241-13－８）　破片で、残存長8.1cm、残存幅2.2cm、残存厚1.7cm、残存重量37.0ｇを計る。石材は結晶片岩。表面の摩耗が著しいので、人為的に形成されたものと判断して、図示をした。ただし、断面図の右側と下側は欠損している。

灰釉陶器

壺（Fig.241-13－９）　口縁部片で、推定口径25.4cm、残存高4.0cmを計る。内外面とも回転ナデ後、灰釉が施されている。

新羅土器

壺（Fig.241-13－10）　肩部の小片で、残存高3.4cmを計る。肩に多弁花スタンプ文とその上部に縦方向の流水状文様がヘラで施されている。7世紀代か。

金属製品

鎌茎×釘（Fig.241-13－11）　残存長6.6cm、幅0.85cmを計る。わずかに観察できる本体部分の形状は長方形で、幅0.35cm、厚さ0.25cm、残存重量6.7ｇを計る。

土製品

取瓶（Fig.241-13－12・13）　12は片口部の破片で、残存高4.15cmを計る。内外面ともに鉱滓の付着が見られるが、内面により著しい。13は片口部は残っていないが、口縁部から体部にかけての断面形状がわかる資料である。推定口径20.0cm、残存高7.0cmを計る。

羽口（Fig.241-13－14）　残存長4.6cm、直径6.7cmを計る。外面調整はヘラ削り。

鏡模造品（Fig.241-14－１）　完形で、直径5.9cm、器高2.0cm、鈕孔径0.2cmを計る。

土玉（Fig.241-14－２）　一部剥離欠損しており、直径は2.8～3.0cm、残存重量14.0ｇを計る。一部にユビオサエあり。

その他

鉱滓（Fig.241-14－３）　残存幅7.3cm、厚さ1.8cm、残存重量71.3ｇを計る。椀形滓とみられる。

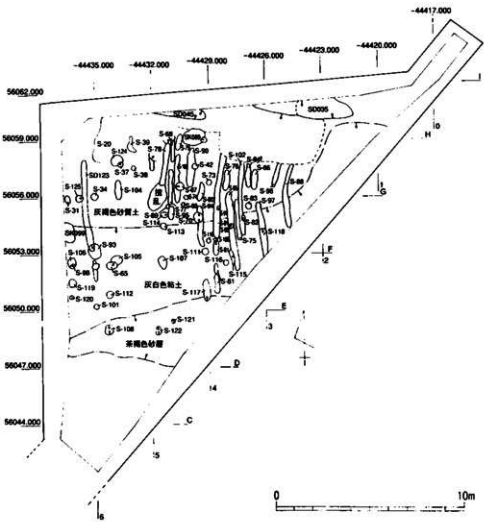


Fig.241-15　大宰府条坊跡第241次調査第２遺構面遺構配置図（1/200）

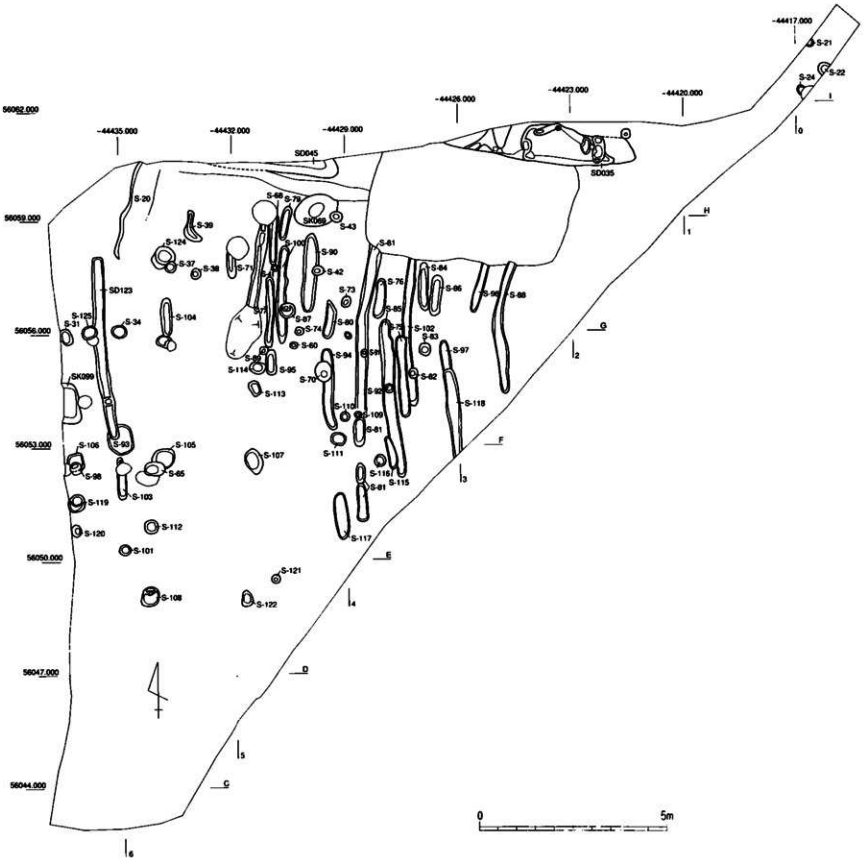


Fig.241-16　大宰府条坊跡第241次調査第２遺構面遺構全体図（1/100）

4. 遺構（第２遺構面）

土坑

241SK069（Fig.241-17）

G・H4グリッドで検出した。楕円形で、長軸1.21m、短軸0.85m、中央部の深さ0.58mを測る。

241SK099（Fig.241-17）

F6グリッドで検出した。調査区境界での検出なので全容は不明であるが、残存部から平面形は隅丸長方形と推定できる。壁部の長軸1.04m、同所中央部の深さ0.06mを測る。

溝

241SD035（Fig.241-17）

F・G5・6グリッドで検出した。東西方向に走行する遺構であるが、西側は調査区外に延びており、全容は不明である。床面は凹凸が激しいが、全体として溝と判断した。幅0.95m、中央部の深さ0.08mを測る。位置的に条坊路側溝の可能性がある。

241SD045（Fig.241-17）

H4・5グリッドで検出した。大部分が調査区外に延びており全容は不明である。

241SD123（Fig.241-17）

F・G6グリッドで検出した。わずかに弧状であるが長さ5.16m、幅0.32m、深さ0.12mを測る。

5. 遺物（第２遺構面）

241SK069出土遺物（Fig.241-19）

241SK069茶褐色土出土遺物

須恵器

蓋3（１）　小片で、推定口径17.7cm、残存高1.8cmを計る。内外面とも回転ナデ。

坏a（２）　約１/５の残存で、推定口径16.8cm、器高2.4cm、推定底径14.1cmを計る。底部切り離しはヘラ切りで、後ナデ。

241SK099出土遺物（Fig.241-19）

241SK099茶褐色土出土遺物

須恵器

蓋3（３）　小片で推定口径18.5cm、残存高1.4cmを計る。内外面とも回転ナデ。

坏a（４）　約半分の残存で、推定口径15.0cm、器高4.0cm、推定底径9.0cmを計る。底部切り離しは回転ヘラ切り。

坏c（５）　小片で、残存高3.9cm、推定高台径11.8cmを計る。内面底部はユビナデ、体部から外面体部・高台部・底部外縁までが回転ナデ。

小坏（６）　約１/３の残存で、推定口径9.2cm、器高3.6cm、推定高台径6.6cmを計る。外面底部は回転ヘラ削り、それ以外は回転ナデ。

皿（７）　小片で、推定口径20.1cm、器高2.15cm、推定底径16.0cmを計る。内面底部はユビナデ、体部内外面は回転ナデ、外面底部は回転ヘラ削り。

ＳＤ035出土遺物（Fig.241-19）

ＳＤ035茶褐色土出土遺物

須恵器

円面硯（８）　海から脚裾部にかけての破片で、残存高6.5cm、推定脚裾径20.0cmを計る。内外面と

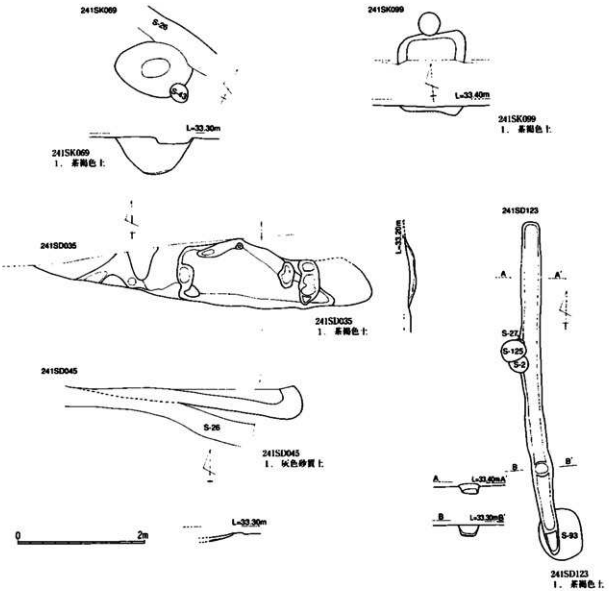


Fig.241-17　241SK069・099・SD035・045・123実測図（1/60）

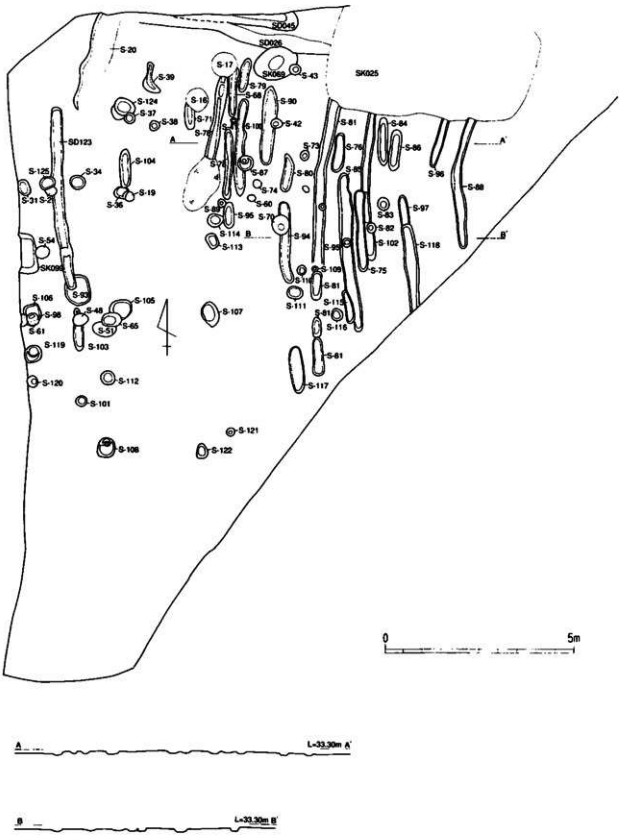


Fig.241-18 畝溝実測図（1/100）

も回転ナデで、外面には縦方向と斜め方向の沈線が施されている。

土師器

坏a（9）　小片で、残存高2.1cm、推定底径7.6cmを計る。内面はナデ、外面底部は板圧痕。

坏c（10）　約半分の残存で、推定口径11.0cm、器高3.6cm、推定底径7.0cmを計る。磨耗のため調整不明。

瓦類

丸瓦（11）　小片で、残存高4.0cmを計る。上面は格子タタキ、下面は布目痕。

軒丸瓦（12）　瓦当部約半分の残存で、残存高8.3cmを計る。外区は圏線で、その内側に珠文帯がある。いわゆる鴻臚館式軒丸瓦である。

平瓦（12）　小片で、残存高は3.1cmを計る。上面は布目痕、下面は格子タタキで、縁部はナデ消し。

241SD081出土遺物（Fig.241-19）

241SD081茶褐色土出土遺物

須恵器

蓋3（14）　約1／5の残存で、推定口径10.9cm、残存高1.5cmを計る。外面中央部は回転ヘラ削り、内外面外縁は回転ナデ。

241SD088出土遺物（Fig.241-19）

241SD088茶褐色土出土遺物

須恵器

蓋c3（15）　約1／3の残存で、推定口径16.2cm、残存高1.7cmを計る。外面中央部は回転ヘラ削り、内外面外縁部は回転ナデ。

壺（16）　小片で、推定口径15.9cm、残存高5.0cmを計る。内外面とも回転ナデ。

SD094出土遺物（Fig.241-19）

SD094茶褐色土出土遺物

須恵器

蓋3（17）　小片で、推定口径18.0cm、残存高1.3cmを計る。

灰褐色砂質土層（第2遺構面基盤層）（Fig.241-19）

須恵器

蓋1（18）　小片で、推定口径16.0cm、残存高1.3cmを計る。外面中央部は回転ヘラ削り、それ以外は回転ナデ。

蓋3（19）　小片で、推定口径14.0cm、残存高0.7cmを計る。焼成不良で調整等は不明。

坏c（20）　底部片で、外面底部はナデ、それ以外は回転ナデ。

土師器

坏a（21）　小片で、推定口径18.0cm、残存高4.9cmを計る。内外面ともミガキcを施す。畿内産土師器である。

丸底坏（22）　小片で、推定口径14.0cm、残存高2.1cmを計る。磨耗のため調整等不明。

土製品

羽口（23）　小片で、残存長4.8cm、残存幅3.7cm、厚さ2.0cmを計る。

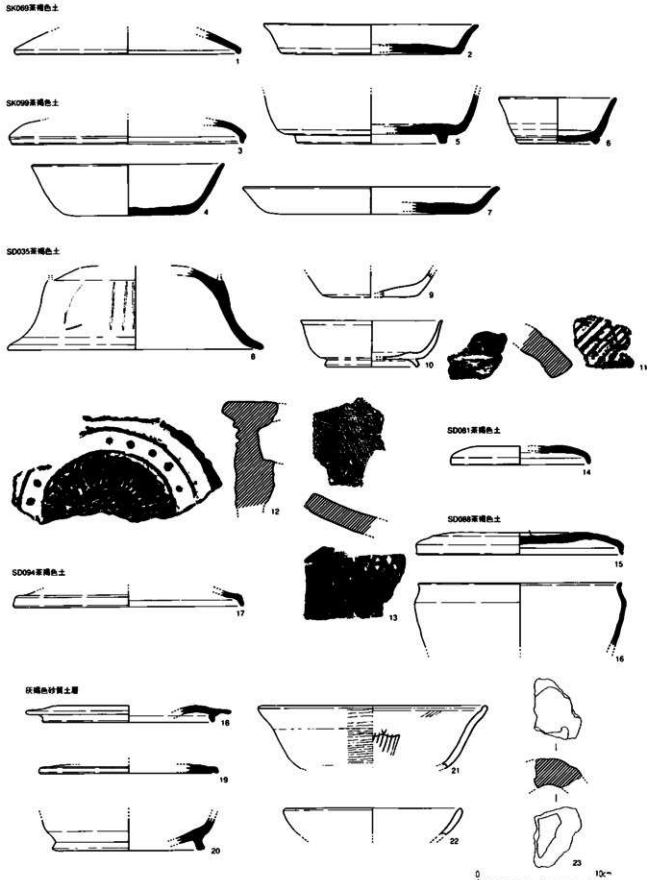


Fig.241-19　SK069・099・SD035・081・088・094・灰褐色砂質土層出土遺物実測図（1/3）

6. 遺物（整地層・堆積層）

明茶褐色土層出土遺物（Fig.241-20）

土製品

取瓶（1）　片口部の破片で、残存高3.1cmを計る。内外面に鉱滓が付着するが、内面がより著しい。

肥前系陶磁器

淡茶褐色土層出土遺物

土師器

小皿a（2）　約4/5の残存で、口径10.1cm、器高1.05cm、底径5.6cmを計る。磨耗のため調整等不明。

須恵質土器

坏（3）　約2/5の残存で、推定口径12.2cm、器高4.5cm、推定底径7.2cmを計る。篠窯の坏で底部切り離しは回転糸切り、それ以外は回転ナデ。

淡灰茶褐色土層出土遺物

須恵器

蓋c3（4）　約4/5の残存で、口径10.4cm、器高2.4cm、つまみ径2.4cmを計る。外面中央部は回転ヘラ削り、外縁内外面は回転ナデ、それ以外はナデ。

茶褐色砂層出土遺物

須恵器

蓋3（5）　小片で、推定口径14.0cm、残存高0.6cmを計る。焼成不良で磨耗のため調整等不明。

甕a（6）　小片で、残存高3.4cmを計る。内外面とも回転ナデで、外面頸部に櫛描き波状文を施す。

土師器

椀（7・8）　7は口縁部から体部上半の小片で、推定口径14.4cm、残存高3.7cmを計る。磨耗のため調整不明。8は口縁部から体部上半の小片で、推定口径16.1cm、残存高4.9cmを計る。口縁部は外反する。磨耗のため調整不明。

表土出土遺物

須恵器

把手付鉢（9）　口縁部から体部上半にかけての破片で、推定口径27.4cm、残存高10.3cmを計る。内外面とも回転ナデで、把手部はヘラによる整形。

土師器

小皿c（10）　ほぼ完形で、口径10.6cm、器高2.85cm、高台径8.7cmを計る。磨耗のため調整不明。

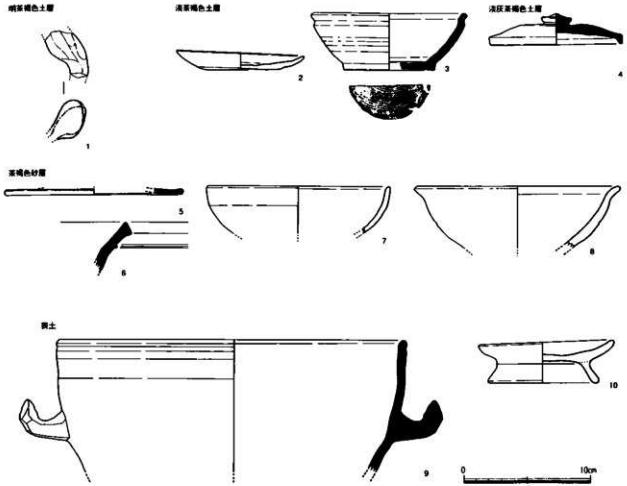


Fig.241-20　明茶褐色土・淡茶褐色土・淡灰茶褐色土・茶褐色砂層各土層及び表土出土遺物実測図（1/3）

Ⅵ．まとめ

1．大宰府条坊跡第239次調査における条坊溝と整地層に関する考察

当該調査においては、調査区南西部で急激な地形変化が確認された。比高差にして約75cmを2.5m程度の距離で上昇する。この地形を整地するように、第２遺構面基盤層が形成されており、さらに地形変換ライン北側には質の異なった土を数層にわたって整地した様子が確認された。この整地層は条坊の区画溝と思われる遺構の西側において顕著であり、あたかも版築したかのような状況が見て取れる。

この整地層については、調査区グリッドのＣラインで土層図を作成し、その堆積状況を記録したわけだが（Fig.239-２、Pla.239-６－２参照）、第１遺構面の時期において構築されたものと第２遺構面の時期において構築されたものとの２時期に分けられることに、整理作業が進捗して行く中で気付く結果となった。この整地は第２遺構面ではわずかで、第１遺構面において顕著となるものの、構築方法の類似性から発掘調査時に時期差を看過してしまったもので、調査担当者としては不本意なものとなってしまった。

さて、本稿では各遺構面および検出された条坊溝と整地層との相関性を整理しておきたい。

最も古い時期の遺構面である第３遺構面の時期において当該地域の整地が確認されなかったということは、奈良時代後半以前の当該地は、地形のもつ傾斜をそのままに生活が営まれていたということになる。当該時期の条坊溝はＳＤ049と想定されるが、北に向かってやや西偏して走行していることから、地形をそのまま受け入れた状況で構築された可能性を示唆している（地形を削平している可能性が残されているので「可能性」の域を出ない）。

次の時期は第２遺構面となるが、第１遺構面を整地し、あらためて条坊溝を構築したと思われる。当該時期の条坊溝は南北にほぼまっすぐ走行するＳＤ033である。この溝を構築する前段階で、基盤層となる灰褐色粘質土（基本土層図中の61）により広範囲にわたって整地しているが、これとは別に淡黄褐色粘質土と茶褐色粘質土（同57･58）によっても整地されている。この整地層はＳＤ033の西側においてのみ確認されており、構築規模は大きいとは言えないものである。

ＳＤ033は一見地形に左右されていないように思われるが、グリッドのＣライン（Ｘ＝56098.00）の北を遺構の南端とする点に注目したい。遺構密度が低い第２遺構面ではあるが、検出された全ての遺構はＣラインの北、ＳＤ033の東側に存在する。また、倒木痕が地形変換ライン上から検出されている。これらの事実から、奈良時代後半から平安時代前期の当該地では、地形をある程度平坦に整地しつつも、条坊溝であるＳＤ033を丘陵裾部の地形変換ラインに沿って行き来が可能な状態で構築したものと考えられる。往来となるＳＤ033の西側地域に、溝を構築する以前に微調整的な整地がなされた上で区画溝を構築したものと解される。すなわち、急激な地形変換を条坊区画に則した形で利用した結果、このような遺構配置になったのではないだろうか。

次に第１遺構面である。地形の急激な変換を大規模に整地しているのが特徴的である。当該時期の条坊溝としてはＳＤ017が一番古いものとなる。ＳＤ017はＳＤ033の直上の構築された遺構で、地形変換を無視するかのように、南北に縦断走行する。第２遺構面と同様に条坊溝の西と東で整地の仕方がやや異なる。また、第２遺構面では基盤層の上に微調整的な整地を実施していたが、当該時期の場合はまず地形変化を少なくするような数層にわたる整地（基本土層図中の48～55）を実施し、その上に基盤層となる茶褐色土層（同47）を厚く整地している。整地によって地盤改良をした後にあらためて条坊溝を構築しているのである。ＳＤ017は後に掘りなおされており、これがＳＤ001となる。この条坊溝を境界として東域は遺構密度が高い。

一層して異なる質の土を幾重にも重ねることでより強固な整地を実現したものと思われるが、これも丘陵裾部であったが故の工法であった可能性が指摘できる。条坊溝の東側にはこのような工法が用いられていないことから、平安時代前期末から中期の当該地では、往来と居住区の用途の差を意識して、必要に応じた工法を用いた大規模な土地改良的整地と区画整備がなされたということになるだろう。

当該調査の成果をもとに、版築工法的な盛土整地とそれ以外の整地が、検出された遺構とどのような関係性を持つのかについて述べたが、このような盛土整地がいかなる条件の土地でなされたのかを確定するには、今後の調査成果の蓄積を待たなければならないだろう。 (横澤)

2. 240次調査地の地形と遺構の編年観

240次調査地は、本文中でも触れたように、比較的浅い土層から湧水や染み出し水が見られる。地山面まで掘り下げると西側には北東から南西に向かって小河川が流れ、微高地を挟んだ南東側には湿地状の堆積が見られる。平安時代以降の遺物を含む土層も整地層と断定することは困難で、自然堆積の可能性が高いと判断している。今回の調査で検出したＳＫ005・013・014はその性格が特定できないので、確定的な言及はできないが、ＳＥ004や近現代の井戸が多く掘削されていることや調査中の湧水の多さから、本来的に居住地としての利用がなされていなかったと考えられる。近世の長大土坑も、何らかの水管理のために設けられたものと推定している。居住区としての利用が可能になったのは、北側を東西に延びる尾根と同じ高さに盛土を行った近現代になってからである。

次に、検出遺構の時期であるが、ＳＫ001・005は本遺跡の中では比較的古く、11世紀末から12世紀前半ころのものである。ＳＥ004・ＳＫ013は土師器の底部切り離し技法から12世紀前半以降のものである。ＳＫ010・012やＳＤ011からは近世遺物が出土しており、当該期の遺構である。 (作田)

3. 241次調査地の遺構基盤層と遺構の編年観

241次調査地は遺構面が２面あるが、本文の土層説明の中でも触れたように、第１遺構面を形成する茶褐色土は大宰府編年ⅥB期が下限であろう。しかしながら本遺跡の南部を東西に延びる尾根の裾部にあたる本土層の南部からは、須恵器編年牛頸井出Ｘ－２号・後田66号窯の時期の残存良好な須恵器が多く出土している。これは８世紀中頃に形成された遺構面に、その後尾根上から流入したものであろう。その上に展開する遺構は大宰府編年ⅩⅡ期のものも含まれるが、須恵器編年牛頸石坂Ｃ１・２号から同井出24号、大宰府編年ⅥB期からⅦ期にかけてのものが中心で、概ねⅥB期からⅦ期が下限と考えている。

第２遺構面の基盤面である灰褐色砂質土から出土する遺物は７世紀末～８世紀中葉（須恵器：牛頸井出Ｘ－２・同後田66－Ⅰ～牛頸石坂Ｃ１）のもので、概ね８世紀中頃に形成されたものであろう。その上に展開する遺構は須恵器編年牛頸ハセムシ12号から大宰府編年ⅥA期のもので、下限を大宰府編年ⅥA期と考えている。

このことから当該地が最初に本格的な開発を受けたのは８世紀中葉頃で、当初は、西半部が居住域として利用され、東半部は畑の畝溝が多数存在することから、耕作地として利用されていた。さらに途中整地を加えて、少なくとも12世紀代までは継続して利用されていたことが明らかとなったが、それ以降の継続状況は未解明である。

その他遺構としては第１遺構面の掘立柱建物跡跡ＳＢ046や第２遺構面の条路溝と思われるＳＤ035などがあり、当初から計画的な開発が行われていたことが推定できる。

240次調査地とは尾根を挟んで反対側に位置するが、本遺跡は層厚の薄い粘土層はあるものの、基本

的に厚さ１mを越す締りの強い砂層が広がり、排水もよく、湧水等もないため、開発の対象地になったものと考えられる。

しかし今回の調査では、開発の契機を明らかにするまでには至らなかったため、この点は今後の課題としたい。

この他、本遺跡から出土した須恵器の中には焼き歪みや生焼けの著しいものが一定量あり、周辺に窯が存在する可能性も指摘しておきたい。

前述したように本遺跡へ流入した須恵器が多く見られることから、南東部に広がる丘陵上に、７世紀後半の大規模な遺跡が展開していたことは明らかである。

本遺跡の全容解明のためには、窯や大規模な遺跡の存在の可能性も含めて、丘陵上にあったといわれる般若寺との関係を考慮に入れた検討が必要となろう。（作田）

掘立柱建物・溝・その他の主要遺構の座標方位一覧

大宰府条坊跡239次　主要遺構（溝）の座標・方位一覧

遺構名	計測位置	X座標	Y座標	X方向	Y方向	方位
239SD001	北端任意中点	56100.540	-44382.620	-603.726	444.17335	N-05° 19′ 08″ -E
	南端任意中点	56094.310	-44383.200	-609.961	443.65572	
239SD016	北端任意中点	56101.210	-44378.340	-603.013	448.44643	N-06° 31′ 40″ -W
	南端任意中点	56099.200	-44378.110	-605.020	448.69653	
239SD017	北端任意中点	56102.410	-44383.350	-601.863	443.42467	N-00° 33′ 13″ -E
	南端任意中点	56094.130	-44383.430	-610.143	443.42753	
239SD019	北端任意中点	56103.310	-44376.780	-600.897	449.98534	N-12° 48′ 58″ -E
	南端任意中点	56101.200	-44377.260	-603.012	449.52648	
239SD033	北端任意中点	56102.220	-44383.390	-602.053	443.38658	N-00° 19′ 32″ -E
	南端任意中点	56098.700	-44383.410	-605.573	443.40180	
239SD049	北端任意中点	56102.620	-44382.230	-601.642	444.54252	N-13° 05′ 23″ -W
	南端任意中点	56096.470	-44380.800	-607.777	446.03399	
239SD051	北端任意中点	56100.530	-44379.930	-603.709	446.86332	N-12° 59′ 41″ -W
	南端任意中点	56098.060	-44379.360	-606.173	447.45800	

大宰府条坊跡240次　主要遺構（溝・土坑）の座標・方位一覧

遺構名	計測位置	X座標	Y座標	X方向	Y方向	方位
240SE004	北端任意中点	55993.180	-44477.880	-712.033	349.99240	N-14° 39′ 11″ -W
	南端任意中点	55991.000	-44477.310	-714.207	350.58419	
240SK005	北端任意中点	55992.270	-44490.510	-713.069	337.37214	N-01° 23′ 50″ -E
	南端任意中点	55990.220	-44490.560	-715.120	337.34265	
240SK010	東端任意中点	55993.875	-44478.200	-711.341	349.66546	N-85° 33′ 17″ -W
	西端任意中点	55994.975	-44492.350	-710.383	355.50516	
240SD011	東端任意中点	55993.380	-44484.200	-711.896	343.67072	N-84° 28′ 21″ -W
	西端任意中点	55993.920	-44489.780	-711.412	338.08559	
240SK012	東端任意中点	55993.600	-44478.225	-711.616	349.64321	N-82° 06′ 06″ -W
	西端任意中点	55995.450	-44491.560	-709.900	363.29037	

大宰府条坊跡241次　主要遺構（掘立柱建物跡・溝・土坑）の座標・方位一覧

遺構名	計測位置	X座標	Y座標	X方向	Y方向	方位
241SK010	北端任意中点	56059.740	-44432.950	-645.027	394.25413	N-02° 18′ 33″ -W
	南端任意中点	56058.500	-44432.900	-646.266	394.31653	
241SK025	東端任意中点	56058.900	-44422.950	-645.767	404.26203	N-84° 24′ 25″ -W
	西端任意中点	56059.420	-44428.260	-645.300	398.94709	
241SK029	北端任意中点	56056.340	-44436.490	-648.462	390.74832	N-01° 04′ 27″ -E
	南端任意中点	56054.740	-44436.520	-650.065	390.73434	
241SD030	北端任意中点	56055.650	-44435.280	-649.140	391.96517	N-04° 11′ 24″ -E
	南端任意中点	56052.920	-44435.480	-651.872	391.79250	
241SB046	北端任意中点	56055.740	-44434.730	-649.044	392.51424	N-07° 45′ 28″ -E
	南端任意中点	56052.290	-44435.200	-652.499	392.07879	
241SK050	北端任意中点	56054.340	-44432.560	-650.423	394.69814	N-04° 45′ 49″ -W
	南端任意中点	56051.940	-44432.360	-652.820	394.92215	
241SK069	北東端任意中点	56059.520	-44429.320	-645.210	397.88615	N-61° 11′ 21″ -E
	南西端任意中点	56058.970	-44430.320	-645.770	396.89170	
241SD123	北端任意中点	56058.060	-44435.590	-646.733	391.63107	N-05° 31′ 13″ -W
	南端任意中点	56052.990	-44435.100	-651.798	392.17178	

＊政庁南門中点は、X＝56,708.680、Y＝-44,820.730（国土座標第Ⅱ系）である
＊政庁南門中点からの距離は、政庁中軸線の振れ（G.N 0° 34′ 24″ E）を考慮
＊道路は各側溝芯々間任意中点を計測している。

大宰府条坊跡第239次調査　遺構番号台帳（1）

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年順に基づく。

S－番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時期	地区番号
1	239SD001	溝	南北に走行	暗茶褐色土	24・25→17→23→1	1	平安	A4～D4
2		小穴？		暗褐色土→砂利層		1		C5
3		小穴群	4基	暗褐色土		1		B4
4	239SX004	小穴群	9基	明褐色土		1		B4・C4
5		欠番						
6		小穴	黄褐色土ブロックまばら	暗灰褐色土		1		C4
7		小穴群	2基	暗褐色土		1		B4・C4
8		土坑	タライ形、炭化物まばら	暗褐色土		1		B3・C4
9		小穴群	13基、炭化物粒子、焼土粒子目立つ	黒褐色土	9→16・19	1		B3・C3・C4・D1～3
10		欠番						
11		小土坑		黒褐色土		1		C3
12		小土坑	炭化物まばらに含む	暗褐色土		1		C3
13		小穴	炭化物粒子、焼土粒子目立つ	黒褐色土		1		C4
14	239SX014	小穴	炭化物まばらに含む	暗褐色土	51→14	1	平安	C3
15		欠番						
16	239SD016	溝	やや東へ折れて南北に走行	暗茶褐色土→灰褐色土→黒褐色土→黒茶褐色土→暗褐色土→暗褐色土→茶褐色土	9→16・19→53	1	Ⅹ期後半	C2・C3・D3
17	239SD017	溝	南北に走行	暗灰褐色土→暗茶褐色土→暗褐色土	24・26・27→17→23→1	1	Ⅹ期前後	A4～D4
18		小穴		明褐色土	47→18	1		D3
19	239SD019	溝	やや東に傾くが南北に走行	暗茶褐色土→黒褐色土→暗褐色土	9・28→19	1	平安	D2
20		欠番						
21		小穴	炭化物粒子まばらに含む	黒褐色土		1		D2
22	239SD022	溝	炭化物粒子まばらに含む	暗茶褐色土		1		C4・D4
23	239SD023	溝		暗褐色土→黒褐色土→茶褐色土	17→23→1	1		A4・B4
24		小穴	炭化物粒子わずかに含む	茶褐色土	24→17→1	1		B4・B5
25		欠番						
26		小穴	炭化物粒子を多く含む	黒褐色土	26→17→1	1		B4
27		土坑	炭化物粒子、焼土粒子まばら	暗茶褐色砂質土	27→17	1		C4
28		小穴	2基、炭化物粒子、焼土粒子目立つ	暗茶褐色土	19→28	2		C2・D2
29		小穴	炭化物粒子わずかに含む	暗茶褐色土		2		D4
30		欠番						

大宰府条坊跡第239次調査　遺構番号台帳（2）

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年観に基づく。

S－番号	遺構番号	種別	備考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時期	地区番号
31		小穴	2基。炭化物粒子、焼土粒子まばらに含む	暗茶褐色土		2		C3・D3
32		小穴	炭化物粒子わずかに含む	暗褐色土		2		C3
33	239SD033	溝	南北に走行	暗灰色粘質土→淡茶褐色粘質土	33→27→17	2	X期前半	A4・D4
34		小穴	黄白色粘質土ブロックが目立って混入	明茶褐色土		2		C4
35		欠番						
36		小穴	黄白色粘質土ブロックをわずかに含む	明茶褐色土		2		C4
37		小穴	炭化物粒子をわずかに含む	暗茶褐色土		2		C4
38		小穴	炭化物粒子をまばらに含む。黄白色粘質土ブロックが目立って混入。	明茶褐色土		2		C4
39		小穴群	3基。	淡茶褐色砂		3		C5・D5
40		欠番						
41		小穴群	4基	明褐色土		3		B4・C4
42		小穴群	6基	暗灰色砂	41→42	3		C4・C5
43		小穴	炭化物をわずかに含む	灰色砂質土		3		C4
44		小穴		茶褐色砂	44→42	3		C5
46		小穴		暗灰色砂		3		D2
47		小穴群	3基	暗灰色砂質土	47→18・51	3		D3
48		土坑	灰白色砂質土（地山）ブロックをまばらに含む	暗灰色砂質土		3		D3
49	239SD049	溝	南北に走行	暗灰色砂質土		3		B4・C4・D4
50		欠番						
51	239SD051	溝	南北に走行	暗灰色砂質土→茶褐色砂	47→51→44	3	平安	B3・C3
52	239SX052		壁面土層から存在が確認された遺構で詳細は不明。	黒茶褐色土→黒褐色土		1		D2・D3
53			壁面土層から存在が確認された遺構で詳細は不明。	暗褐色土→黒褐色土	9・16→53	1		C2
54		倒木痕	遺構プラン確認時点では複数の小穴と思われたが、調査の結果倒木痕と判明。			3		B4
青灰色粘土層			旧水田の土層として認識。この層を含め、新しい土層は表土とした。	明褐色土層・黒茶褐色土層→青灰色粘土層→表土				
黒茶褐色土層				暗灰褐色土層→黒茶褐色土層→灰褐色土→青灰褐色粘土層				

大宰府条坊跡第239次調査　遺構番号台帳（3）

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年順に基づく。

S－番号	遺構番号	種別	備考	堆土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時期	地区番号
暗灰褐色土層			遺物を多く含む。	暗褐色土層・茶灰褐色土・明茶灰褐色土層→暗灰褐色土層→黒茶褐色土層				
明褐色土層				暗褐色土層・黒褐色土層→明褐色土層→青灰色粘土層				
暗褐色土層				黒褐色土層・茶褐色土層・暗茶褐色土層・明茶灰褐色土層→暗褐色土層→青灰褐色粘土層・明褐色土層・黒茶褐色土層・暗灰褐色土層				
暗茶褐色土層				茶褐色土層→暗茶褐色土層→明褐色土層・暗褐色土層				
黒褐色土層			調査区東端に堆積。炭化物粒子や焼土粒子を多く含み、遺物も目立つ。	茶褐色土層→黒褐色土層→明褐色土層・暗褐色土層				
茶褐色土層			第2遺構面を覆う整地層で、除去後に第2遺構面を検出。第1遺構面から検出された遺構の基盤層となる層。	黄褐色粘質土層・茶褐色粘質土層・暗褐色砂・灰褐色粘質土層→茶褐色土層→茶灰褐色土層・暗茶褐色土層・黒褐色土層			平安	1区調査区全域
灰褐色粘質土層			第3遺構面を覆う整地層で、除去後に第3遺構面を検出。第2遺構面から検出された遺構の基盤層となる層。	灰白色砂質土・明茶色粘質土→灰褐色粘質土→暗褐色砂・茶褐色土			平安	調査区全域
明茶色粘質土層			灰褐色粘質土が変質した可能性がある。	灰白色砂質土→明茶色粘質土→灰褐色粘質土				
灰白色砂質土層			地山。第3遺構面の基盤層	灰白色砂質土→明茶色粘質土・灰褐色粘質土				

大宰府条坊跡第239次調査　出土遺物一覧表（1）

S－1暗茶褐色土

須恵器	蓋3、蓋c、坏c、壺、甕、大甕
土師器	小皿a、坏c、丸坏c、椀c、甕、甕（角閃石入り筑後産か？）、鉢×鍋、把手
黒色土器A類	破片
黒色土器B類	椀c
瓦器	破片
瓦類	平瓦（格子目）、平瓦、軒丸瓦、破片
灰釉陶器	破片（掛け流しか？）（1）
縄文土器	破片？
土製品	羽口

S－2暗褐色土

須恵器	甕、供膳具
土師器	破片
越州窯系青磁	椀：Ⅰ－2b（1）
土製品	不明製品

S－4明褐色土

須恵器	壺、甕、供膳具
土師器	小皿a、椀c、煮炊具（角閃石入り筑後産か？）
黒色土器B類	破片
瓦類	破片

S－6暗灰褐色土

須恵器	蓋3、皿a
土師器	高台？
瓦器	椀

S－8暗褐色土

須恵器	甕、破片
土師器	破片
瓦類	平瓦（格子目）、破片（縄目）

S－9黒褐色土

須恵器	壺
土師器	椀c、破片（角閃石入り筑後産か？）、把手（角閃石入り筑後産か？）、破片（煤付着）
黒色土器B類	破片

S－11黒褐色土

須恵器	供膳具
土師器	坏×椀、甕×破片

S－12暗褐色土

須恵器	供膳具
土師器	破片
弥生土器	破片

S－14暗褐色土

須恵器	坏
土師器	坏a（1期）
瓦類	平瓦（格子目、縄目）

S－16茶褐色土

土師器	供膳具、椀c

S－16暗褐色土

土師器	小皿a1、小皿a2
黒色土器B類	椀c

S－16黒茶褐色土

須恵器	甕、破片
土師器	小皿a1、丸坏a、椀c、丸椀、器台、破片
黒色土器B類	椀、破片
瓦類	平瓦（縄目、格子目）
緑釉陶器	破片（1）

S－16黒褐色土

須恵器	蓋1、壺、甕、供膳具
土師器	小皿a、坏a、椀c、破片（角閃石入り筑後産か？）、破片
黒色土器A類	椀c
越州窯系青磁	椀：Ⅱ（2）
瓦類	瓦（焼し）

S－16暗茶褐色土

須恵器	破片
土師器	小皿a、高坏、椀c、甕

大宰府条坊跡第239次調査　出土遺物一覧表（2）

S－17暗褐色土

須恵器	蓋3，坏，坏a，坏c，鉢，壺，壺×甕，甕，供膳具（ヘラ記号）
土師器	小皿a，坏×小皿，椀c×坏c，椀c，高坏，器台，壺，甕a，甕，煮炊具（角閃石入り筑後産か？），.
黒色土器A類	椀c
黒色土器B類	椀c，椀？
越州窯系青磁	椀：Ⅰ（1），Ⅱ（1），Ⅱ－2d（1）
瓦類	瓦，平瓦（縄目，格子目），丸瓦（格子目，縄目），破片
石製品	砥石（砂岩製），黒曜石破片，チャート，石鍋（滑石製：補修品，被耳）

S－19暗茶褐色土

須恵器	甕，
土師器	破片
黒色土器A類	椀×坏

S－19暗褐色土

須恵器	坏a，坏c，鉢，甕，供膳具
土師器	坏，坏a，椀c，甕b，煮炊具
黒色土器B類	椀c
瓦類	平瓦（縄目），丸瓦，破片
石製品	滑石

S－19黒褐色土

須恵器	坏a，甕
土師器	小皿a，高坏，椀c，煮炊具（角閃石入り筑後産か？）
黒色土器A類	椀c

S－22暗茶褐色土

須恵器	坏，甕
土師器	椀c，供膳具，煮炊具
黒色土器A類	破片
瓦類	破片
石製品	埠（凝灰岩）

S－23

須恵器	甕

S－27暗茶褐色土

土師器	破片

S－27暗茶褐色砂質土

須恵器	甕
瓦類	平瓦（縄目，縄面調整が凸面にある）

S－33暗茶褐色粘質土

須恵器	蓋3，壺
土師器	小皿a1，甕（角閃石入り筑後産か？）
黒色土器B類	椀c
瓦類	丸瓦（格子目），破片（縄目）

S－49暗灰色砂質土

弥生土器	破片

S－49灰色砂

弥生土器	破片

S－52黒褐色土

龍泉窯系青磁	椀：Ⅰ－1（1）

S－52黒茶褐色土

須恵器	壺

S－54　倒木痕

弥生土器	甕×壺

大宰府条坊跡第239次調査　出土遺物一覧表（3）

黒茶褐色土層

土師器	破片（平安～）

暗灰褐色土層

須恵器	蓋1，蓋3，蓋3＞蓋2，蓋4，蓋c，坏，坏a，坏c，高坏×壺，高坏（長脚），壺b，壺，鉢，甕，大甕b
土師器	椀c，高坏，鉢，壺×鉢，甕×鍋，煮炊具，破片（角閃石入り筑後産か？），.
黒色土器B類	破片
瓦器	椀c
越州窯系青磁	椀：Ⅰ(4)，Ⅰ－2(1)，Ⅰ－2ウ(1)，Ⅱ(1)
龍泉窯系青磁	椀：Ⅰ(5)，Ⅰ－2(1)，Ⅰ－2a(1)，Ⅰ－6a(1)，Ⅰ×Ⅱ(1)，Ⅱ(1)，Ⅱ－b(5)，Ⅳ(1)，椀(1)，破片(6) 坏：Ⅲ－2(1)，Ⅲ－3b(1)
同安窯系青磁	椀：Ⅰ(1)，Ⅰ－1c(1)，Ⅱ(1)，破片(1) 皿：Ⅰ(1)，Ⅰ－1(1)，Ⅰ－1b(1)
瓦類	軒丸瓦（鴻臚館系），文字瓦（"平井"），平瓦（縄目，格子目），破片（縄目，格子目），瓦玉
石製品	硬石，玉石，石鍋？（頁岩），破片（安山岩）
土師質土器	擂鉢
須恵質土器	捏鉢（東播系），甕（常滑？）
緑釉陶器	椀（1），破片（浩西）（1）
灰釉陶器	灰釉陶器？椀（1），壺（2）
肥前系陶磁器	破片
国産陶器	擂鉢（近現代），破片
国産磁器	破片（近現代）
白磁	椀：Ⅳ(5)，Ⅴ(1)，Ⅴ－4(1)，Ⅴ－1×Ⅷ－2(1)，Ⅸ(1)，椀？(1)，破片（10） 皿：Ⅲ－1(1)，Ⅵ(1)，Ⅷ？(1) 坏：B(1) 壺：Ⅱ×Ⅲ(1)
中国陶器	盤：Ⅰ(1)
須恵質（輸入）	朝鮮系無釉陶器（2）
黒釉陶器	椀（天目）(1)，破片（1）
弥生土器	甕
金属製品	鉈尖，鉄釘
上製品	珪化木，取紙，羽口
その他	焼土塊

明褐色土層

須恵器	甕（肥手有り）
土師器	破片（平安～），破片
龍泉窯系青磁	椀：Ⅰ(1)

暗褐色土層

須恵器	坏，壺
土師器	供膳具，煮炊具，破片
龍泉窯系青磁	椀：Ⅰ－1c(1)
瓦類	平瓦（縄目）

暗茶褐色土層

須恵器	甕
土師器	煮炊具
越州窯系青磁	椀：Ⅱ(1)
瓦類	平瓦（格子目）

黒褐色土層

須恵器	高坏，壺，甕
土師器	坏，椀c，鉢，鉢×甕，甕b，甕（角閃石入り筑後産か？），破片
黒色土器A類	破片
越州窯系青磁	椀：Ⅰ－1b(1)

明茶灰褐色土層

土師器	破片

茶褐色土層

須恵器	皿a，蓋1，蓋3，蓋c1，坏，坏a，坏c，坏c（内面削痕あり），高坏×蓋，鉢×甕，壺，壺（肥後系か？），甕a，甕
土師器	蓋c，皿a，坏，坏a（ヘラ記号あり），坏a，坏c，坏d，椀，椀c，大椀c，高坏，鉢，甕a，甕（角閃石入り筑後産か？），.
瓦類	平瓦（縄目），丸瓦（縄目），瓦玉
須恵質土器	甕？
緑釉陶器	破片（甕か？）(1)
国産陶器	破片（近世）
その他	炭化物

黄白色粘質土層

須恵器	壺，甕
弥生土器	破片

大宰府条坊跡第239次調査　出土遺物一覧表（4）

明茶褐色粘質土層

土師器	破片

灰褐色粘質土層

須恵器	坏c、壺、甕、甕？
土師器	直口壺、二重口縁壺、坏、坏c、坏d、高坏、煮炊具（角閃石入り筑後産か？）、把手、破片
製塩土器	煎熟土器
瓦類	平瓦（模骨有り）、破片？

明茶色粘質土層

土師器	破片

カクラン

須恵器	坏、坏c、高坏、甕
土師器	坏a、坏d、椀c、鉢×甕、甕a（角閃石入り筑後産か？）、破片
越州窯系青磁	椀：Ⅰ－1a（1）
龍泉窯系青磁	椀：Ⅰ－2b（1）、Ⅰ－4（1）
瓦類	平瓦（縄目）

表土

須恵器	蓋c、坏a、坏c、坏、高坏、高坏×皿、壺、甕
土師器	小皿a、坏a×坏d、椀c、供膳具、煮炊具、甕a、甕(角閃石入り筑後産か？)、破片
黒色土器A類	破片
瓦類	平瓦（格子目、縄目）、丸瓦、軒丸瓦（瓦当）、破片
土製品	カマド

大宰府条坊跡第240次調査　遺構番号台帳（１）

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年観に基づく。

S－番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構切合（古→新）	遺構面	時期	地区番号
1	240SK001	土坑		灰色粘土→灰褐色粘性土→茶褐色土→暗褐色土		1	平安	I5
2	240SK002	小土坑		灰褐色粘性土		1		J6
3		小穴		灰褐色土		1		B1・2
4	240SE004	井戸	床面に正方形枠組みが残っているのみ	灰色粘土→明灰色粘土→灰茶褐色粘性土→明灰色粘性土→明茶褐色土→灰茶褐色土→地山ブロック混入土→暗灰茶褐色土		1		B0・1
5	240SK005	土坑		明緑灰褐色粘性土→暗灰褐色粘土灰褐色粘土→緑灰褐色粘土→茶灰褐色粘性土			平安	B5
6		小穴		明灰茶褐色土	10→6	1	近世～	I1
7		小穴		明灰茶褐色土	10→7	1	近世～	I1・2
8		小穴		明灰茶褐色土	10→8	1	近世～	I1
9	240SX009	小穴		明灰茶褐色土	10→9	1	近世～	I1
10	240SD010	土坑	不整形大型土坑	灰色土→明茶褐色土	10→6　10→7　10→8　10→9		近世～	H～J1～6
11	240SD011	溝	東西に走行	東部：明灰色土→灰色砂質土　西部：橙色土	12→11	1	近世～	I3～5
12	240SX012	土坑	長楕円形大型土坑	中央部：暗青灰色混砂粘土→暗青灰色粘土→青灰色粘土→茶灰色粘性土→灰色粘性土　西部：暗青灰色混砂粘土→暗青灰色粘土→青灰色粘土→灰色粘性土→淡灰褐色土→茶褐色土	12→11 13→12 14→12？	1	近世～	H～J1～5

大宰府条坊跡第240次調査　遺構番号台帳（2）

※上要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年観に基づく。

13	240SK013	土坑	木本科植物遺体層あり	灰色粘土→植物遺体層→湿地山ブロック緑灰色粘土→緑灰色粘土→暗灰色粘土→青灰色粘土	13→12	1	平安	1・J3
14	240SK014	土坑			14→12?	1		J3・4
15		土坑		灰褐色粘性土				H2
16		小穴		茶褐色土		1		H1
17		小穴		茶褐色土		1		H1
18		小穴		灰茶褐色土		1		H1
茶灰褐色土層			グリッドH列より南に分布し、出土遺物から平安時代に形成された層と考えられる。	暗茶褐色土→灰茶褐色土→茶灰褐色土				
灰茶褐色土層			グリッドG～I列を中心に分布し、出土遺物から平安時代に形成された層と考えられる。	暗茶褐色土→灰茶褐色土→茶灰褐色土				
暗茶褐色土層			グリッドF～I列を中心に分布するが、出土遺物から平安時代前期ごろに形成されたものと考えられる	暗茶褐色土→灰茶褐色土→茶灰褐色土				
暗褐色砂質土層・黒色砂層			調査区南東部に分布し、地山である白色砂層の上に堆積する。層中からは植物遺体も出土し、土質や堆積状況等を加味すると沼地または湿地が広がっていたものと考えられるが、無遺物のため時期等の詳細は不明である	白色砂層→黒色砂層→暗褐色砂質土→明青灰色粘土→明茶褐色土				
明青灰色粘土層			B～G2～5の東壁22層に相当する土層である。出土遺物は僅少で、時期等の詳細は不明である。	白色砂層→黒色砂層→暗褐色砂質土層→明青灰色粘土層→明茶褐色土層→橙色土層→茶灰褐色粘性土層				
暗褐色砂質土層			調査区北西部に分布し、河川堆積によって形成されたものと考えられる。出土遺物から奈良時代ごろに形成されたものと推定できる。	灰色砂礫層→暗褐色砂層→灰色粘土→灰茶褐色土				

大宰府条坊跡第240次調査　出土遺物一覧表（1）

S－01　暗褐色土

土師器	丸底坏a、小皿a、高台片、鉢？
黒色土器B	椀c
瓦類	片

S－01　茶褐色土

土師器	小皿a、小皿a（ヘラ）、椀
黒色土器A	椀
その他	炭化物

S－01　灰褐色土

須恵器	甕、坏c、蓋1、鉢a
土師器	坏a、丸底坏、小皿a、鉢×鍋
黒色土器B	椀

S－01　灰色粘性土

須恵器	蓋3×高坏
土師器	甕、小皿a、坏a、丸底坏×椀、鉢？
黒色土器B	片
縄文土器	？

S－03　灰色褐色土

須恵器	甕、坏c
土師器	甕、壺、坏

S－04　暗灰茶褐色土

須恵器	甕、壺、坏、蓋1、供膳具
土師器	小皿a、供膳具
白磁	椀：Ⅱ（1点）
瓦類	軒丸瓦（鴻臚館式）

S－04　茶灰褐色土

須恵器	甕、壺、壺×坏、供膳具、片
土師器	甕×壺、小皿a
黒色土器B	壺×椀
瓦類	平瓦（縄目）

S－04　灰色粘土

須恵器	甕×壺、壺、壺×鉢、坏c
土師器	坏a、高坏
瓦類	片（格子）、片（いぶし）
その他	埋構？

S－05　茶灰褐色粘性土

須恵器	甕、坏、蓋
土師器	椀、高台片、鉢？、煮炊具、片
瓦類	平瓦、片（縄目・格子）

S－05　緑灰褐色粘土

須恵器	甕、壺、坏c、坏
土師器	甕、椀？、煮炊具（角閃石）

S－05　灰褐色粘土

須恵器	甕、供膳具
黒色土器B	片？
瓦類	平瓦（縄目）

S－05　暗灰褐色粘土

須恵器	甕、壺
土師器	供膳具
鉢	（B部）浙江省
白磁	椀：Ⅴ－2×Ⅷ－4（1点）
その他	焼土塊

S－06　明灰茶褐色土

土師器	片
その他	凝石？

S－07　明灰茶褐色土

須恵器	甕
土師器	片

S－08　明茶褐色土

須恵器	甕、坏
土師器	片

S－09　明灰茶褐色土

土師器	高台片、片
瓦類	瓦（格子）
白磁	椀：Ⅳ×Ⅴ×Ⅷ（1点）
土製品	土錘

大宰府条坊跡第240次調査　出土遺物一覧表（2）

S－10　明茶褐色土

須恵器	甕、甕×壺、壺、坏、坏a、坏c、蓋、蓋c、蓋1、蓋3、蓋4、高坏、片
土師器	甕、坏、坏a、坏c、坏c?、坏c×椀、煮炊具、煮炊具（角閃石）、供膳具、片
龍泉窯系青磁	椀：Ⅰ－2（1点）、Ⅰ－2a（1点）、Ⅰ?（1点）、Ⅱ－b（1点） 他器種：盤Ⅳ（1点）
同安窯系青磁	椀：Ⅰ－1b（1点） 瓦類：丸瓦、平瓦（縄目・格子）、平瓦片、片（縄目）、片
石製品	蛤刃石斧、黒曜石フレーク、碁石（白）
須恵質土器	東播系擂鉢
瓦質	片
肥前系陶磁器	椀×皿、片
白磁	椀：Ⅳ（1点）、Ⅳ×Ⅴ（2点）、Ⅴ－4b×4c（1点）、Ⅶ－2×3（1点）、片（1点） 皿：Ⅵ（1点） 壺他：小壺×蓋（広東系）（1点）
中国陶器	他器種：盤Ⅱ（1点）、片（B部）
須恵質（輸入）	朝鮮系無釉陶器（1点）
弥生土器	甕
土製品	取瓶、七輪
その他	石炭、鉱滓

S－10　灰色土

須恵器	甕a、甕、壺、壺×鉢、坏a?、坏c、坏×蓋、蓋、蓋c、蓋c3、蓋1、蓋3、片
土師器	甕（角閃石）、坏a、丸底坏a、坏×椀、椀、椀c、小皿a、鉢、鉢（脚）、高坏、高坏?
黒色土器B	椀c
越州窯系青磁	壺：Ⅱ（1点）
龍泉窯系青磁	椀：Ⅰ（2点）、Ⅱ－b（4点）、Ⅲ×坏Ⅲ（1点）
同安窯系青磁	椀：片（1点）
瓦質	片（脚付）
肥前系陶磁器	椀
白磁	椀：Ⅱ－1×2（1点）、Ⅳ（2点）、Ⅳ－1b（1点）、Ⅴ（1点）、Ⅴ－1×Ⅶ－2（1点）、Ⅴ－2×Ⅶ－4（1点）、Ⅶ（1点）、Ⅸ（1点）、片（1点） 皿：Ⅴ（1点）
瓦類	軒丸瓦、、丸瓦、平瓦（縄目・格子）、片（縄目・格子）、片（格子）、片
土製品	炉壁?、片
その他	石炭、鉱滓、スレート

S－11　橙色土

須恵質土器	東播系擂鉢
瓦質	鉢

S－11　明灰色土

須恵器	甕、壺、壺b、坏c、蓋c、蓋3、蓋?
土師器	坏c、丸底坏、小皿a、鉢、高台片
青磁（未分類）	椀（近世）
瓦類	丸瓦、片（縄目・格子）
土師質土器	鉢
須恵質土器	鉢
瓦質	鉢（13c?）、壺×鉢、鉢、釜
黒釉陶器	椀（天目）

大宰府条坊跡第240次調査　出土遺物一覧表（3）

S－12　明灰色土

須恵器	壺
土師器	椀c、片
中国陶器	他器種：耳壺（B類）

S－12　灰色粘性土

須恵器	壺、壺×蓋？（カキ目）、片
土師器	椀c、片（瓦器？）
瓦類	片（縄目・格子）
国産陶器	椀、近世椀？
白磁	皿：Ⅸ1点）

S－12　茶灰色粘性土

須恵質土器	常滑焼壺？

S－12　青灰色粘土

須恵器	壺、坏a、坏c、坏、坏？、蓋c
土師器	壺、壺a、坏c、丸底坏、椀、椀c、小皿a、大蓋？（奈良？）、鉢、把手、煮炊具、煮炊具（角閃石）、供膳具、片
瓦類	丸瓦（格子）、平瓦（格子）、片（縄目）
石製品	砥石
須恵質土器	東播系擂鉢
白磁	椀：Ⅰ－1（1点）、Ⅱ－0×1（1点）、Ⅱ（1点）
灰釉陶器	椀
弥生土器	壺×壺
その他	紅海

S－12　暗青灰色粘土

須恵器	壺、壺a、壺、坏、蓋、蓋1、蓋c、蓋3
土師器	壺、壺a、丸底坏×椀、椀、椀c、皿a、小皿a、鉢、鉢×鍋、盤、煮炊具、片
黒色土器B	椀c、椀
越州窯系青磁	椀：Ⅰ（1点）、Ⅰ－5（1点）
龍泉窯系青磁	椀：Ⅱ－b（1点） 他器種：坏Ⅲ－2（1点）
瓦類	丸瓦（格子）、平瓦（縄目・格子）、片（縄目・格子）、博、片
須恵質土器	片口鉢
白磁	椀：Ⅳ×Ⅴ（1点）
その他	生産工具、石炭

S－12　暗青灰色産砂粘土

白磁	椀：未分類（12c）

S－12　暗灰色砂質土

須恵器	壺a（11c代？）
土師器	椀c（9～10c）
越州窯系青磁	椀：Ⅰ－2（9c代）
瓦類	平瓦（縄目すり消し）、片

S－13　緑灰色粘土

須恵器	壺、坏、供膳具
土師器	丸底坏、椀c、鉢

S－13　灰色粘土

須恵器	壺、壺×蓋、坏a、坏（ヘラ記号あり）
土師器	壺、坏c、大坏c×壺、坏a×小皿a、小皿a（ヘラ）、椀c
白磁	椀：Ⅴ－4×Ⅷ－3（XⅢ～XⅤ期）
黒色土器B	椀c

S－15　灰褐色土

須恵器	壺、壺×蓋、坏、蓋3
土師器	片

灰褐色土層

須恵器	壺、坏c
土師器	坏c、丸底坏a、小皿a（ヘラ切り）、煮炊具、片
瓦類	丸瓦（格子）、平瓦（格子）、平瓦、片（いぶし瓦）
肥前系陶磁器	椀

灰色粘性土層

須恵器	壺、坏c
土師器	坏a？、片
龍泉窯系青磁	他器種：片（Ⅳ？）
国産陶器	片
白磁	椀：片（1点）

大宰府条坊跡第240次調査　出土遺物一覧表（4）

茶灰褐色土層

須恵器	甕a、甕、大甕b、壺、壺（穿孔？）、壺（漆付着）、坏c、坏、坏×蓋、蓋c、蓋c3、蓋3、蓋4、蓋3×蓋b、高坏
土師器	甕a（ハケ目）、甕、甕×鉢、壺、壺（畿内系？）、坏a、坏c、坏、丸底坏、坏×椀、椀c、椀、小皿a、小皿、皿、皿b？、大皿、柳付、肥手、煮炊具、片
黒色土器A	椀c
黒色土器B	椀c
同安窯系青磁	椀：Ⅰ－1b（1点）
瓦類	平瓦（縄目・格子）、平瓦片
石製品	滑石片（石鍋？）
瓦質	鉢（13c）
白磁	椀：Ⅱ－3×4（1点）

灰茶褐色土層

須恵器	甕a、甕、大甕a、壺、壺b？、壺c？、壺？、壺×鉢、壺b×高坏、坏a、坏c、坏、皿a、皿、皿（ミガキa）、皿×高坏、蓋c、蓋3、蓋、鉢a、片
土師器	甕、甕（角閃石）、坏a、坏a（板圧痕）、坏c、坏、坏×丸底坏、坏a×小皿a、椀c、椀、蓋3、蓋、蓋×皿、皿、盤、器台、肥手？、煮炊具（角閃石）、煮炊具、供膳具、片（角閃石）、片
製塩土器	焼塩壺Ⅱa
黒色土器B	椀c、片
石製品	滑石片、安山岩？
越州窯系青磁	椀：Ⅱ－b（1点）（13c初頃）
肥前系陶磁器	椀（混入？）
瓦類	丸瓦（格子）、平瓦（縄目・格子）、丸瓦片、平瓦片、片（縄目）、片
国産陶器	擂鉢・鉢（近世・混入？）
白磁	壺他：壺Ⅲ（内外面に釉掛）（10c後半～13cまで残る）
中国陶器	甕：Ⅳ（1点）（12c後半） 他器種：耳壺Ⅵ×Ⅶ（1点）

茶褐色土層

須恵器	甕a

暗茶褐色土層

須恵器	甕、大甕、壺、坏、坏×皿、皿a、坏c、坏、蓋c、蓋3、蓋c3、片
土師器	甕a、坏a、大坏c、片
瓦類	軒平瓦、丸瓦、平瓦（縄目）、片（縄目）、片

明青灰色粘土層

須恵器	甕、壺
土師器	柳、片

暗褐色砂質土層

土師器	坏c、煮炊具

トレンチ一括

須恵器	甕、壺、坏c、蓋c、蓋3、蓋4
土師器	壺、坏a、坏、坏×丸底坏、坏×椀、高坏
龍泉窯系青磁	椀：Ⅱ－a（1点）
瓦類	平瓦（縄目・格子）、丸瓦片、瓦？、片（いぶし瓦）
石製品	剥片（安山岩）
肥前系陶磁器	端反椀（1点）
白磁	椀：Ⅳ（2点）、Ⅴ－2×Ⅶ－4（1点）、Ⅴ－4b×Ⅵ－2b（ヘラ描き）
弥生土器	片？

表土

須恵器	甕、坏c、坏、高坏
土師器	坏a？
黒色土器B	片
瓦類	片（縄目・格子）
須恵質土器	東播系擂鉢（13c）
白磁	椀：Ⅳ×Ⅴ×Ⅶ（1点）

大宰府条坊跡第241次調査　遺構番号台帳（1）

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年順に基づく。

S一番号	遺構番号	種別	備考	埋土状況（古→新）	遺構切合（古→新）	遺構面	時期	地区番号
1		小穴		茶褐色土	30→1	1		F6
2	241SB046	小穴		灰茶褐色土	27→2	1	平安～	F6
3		小穴		灰茶褐色土		1		G6
4		小穴		灰茶褐色土		1		G6
5	241SK005	土坑		暗灰褐色土	15→5→28	1	平安中～後期	G5・6
6		小穴		暗茶褐色土		1	平安～	G6
7		小穴		灰茶褐色土		1		G6
8		小穴		灰褐色土		1		G6
9		小穴		暗茶褐色土		1	平安～	G・H6
10	241SK010	土坑		灰茶褐色土	10→14	1	奈良～	G・H5
11		小穴		灰茶褐色土		1		G・H6
12		小穴		茶褐色土		1		G5
13	241SB046	小穴		灰茶褐色土		1		G5
14		土坑		明茶褐色土	10→14	1	平安～	G4・5
15	241SD015	溝	北北東から南南西にややくねりながら走行	茶褐色土	15→5→28　20→15	1	平安～	G・H5・6
16		小穴		灰茶褐色土	71→16	1		G4・5
17		小穴		灰茶褐色土	68→17　78→17	1		G・H4
18		小穴		赤茶褐色土	29→18	1		F6
19	241SB046	小穴		赤茶褐色土		1	奈良～	F5
20		溝		暗茶褐色土	20→15	2		G・H5
21		小穴		茶褐色土		2		I1
22		小穴		灰茶褐色土		2		I1
23		小穴		茶褐色土		1		I1
24		小穴		灰茶褐色土		2		I1
25	241SK025	整地土坑		淡茶褐色土	26→25　35→25	1	平安前期～	G・H1～3
26	241SD026	溝	北東西に走行	淡茶褐色土	26→25　45→26　69→26	1		H3～5
27		小穴		暗褐色土	27→2	1	奈良～	G6
28	241SB046	小穴		灰褐色土	15→5→28	1	平安中く後期	F・G5・6
29	241SK029	土坑	調査区西壁にかかり、全容は不明	灰褐色土	29→18	1	平安前期末	F・G6
30	241SD030	溝	南北に走行	暗褐色土	30→1	1	平安～	E・F6
31		小穴		茶褐色土		2		F・G6
32		小穴		灰茶褐色土		1		G6
33	241SB046	小穴		灰茶褐色土→灰褐色土	33→27→17	1	奈良～	F5・6

大宰府条坊跡第241次調査　遺構番号台帳（2）

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年観に基づく。

S一番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時期	地区番号
34		小穴		茶褐色土		2		F・G5・6
35	241SD035	溝	ほぼ東西に走行	茶褐色土	35→25	2		H1～3
36		小穴		灰茶褐色土		2		F5
37		小穴		灰茶褐色土	124→37	2		G5
38		小穴		茶褐色土		2		G5
39		土坑？	「1」字穴で、遺構かどうかも不明	灰茶褐色土		2		G・H5
40		欠番						
41		小穴		茶褐色土		2		G4
42		小穴		茶褐色土	44→42　90→42	2		G4
43		小穴		茶褐色土	69→43	2		G・H4
44	241SX044	小穴	掲載遺物あり	暗茶褐色土	44→42	1		E5
45	241SD045	溝	ほぼ東西に走行	灰色砂質土	45→26	2		H4・5
46	241SB046	掘建柱建物跡				1	VIB期	E～G5～6
47		小穴		茶褐色土	47→18・51	1		F5
48		小穴		茶褐色土	103→48	1		F5・6
49		小穴		茶褐色土		1		F5
50	241SK050	土坑	調査区の中では大きな土坑で出土遺物も多いが、性格等の詳細は不明。下層には横板等比較的残りの良い須恵器も目立つが、いずれもｆｃ末からｇｃ初頭の遺物で、本遺構が形成された時期とは整合性が無く、南側丘陵地からの流れ込みと考えられる。	灰褐色土→暗褐色土→茶褐色土		1		E・F4・5
51	241SX051（241SB046）	小穴	掲載遺物あり	茶褐色土	47→51→14	1	平安前～中期	E5
52	241SX052（241SB046）	小穴	記載遺物あり	灰茶褐色土		1	VIB期	F5
53		欠番						
54	241SB046	小穴		灰茶褐色土		1		F6
55	241SD055	溝	南北に走行　北半部は不明 掲載遺物あり	茶褐色土→明茶褐色土		1	奈良～	F5
56		小穴		暗褐色土		1		E4
57		小穴群	２基。	暗茶褐色土		1		D・E4
58		小穴		明茶褐色土		1		D5
59		小穴		暗茶褐色土		1		D5
60		小穴		茶褐色土		2		F4
61	241SB046	小穴群	２基	暗茶褐色土		1	奈良～	E6
62		小穴		暗茶褐色土		1		D5・6

大宰府条坊跡第241次調査　遺構番号台帳（３）

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年表に基づく。

S－番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時期	地区番号
63	241SB046	小穴		暗茶褐色土		1		E5
64		小穴		暗茶褐色土		1		D5・6
65		小穴		茶褐色土	105→65	2		E5
66	241SX066	小穴	瓦破片遺物あり	暗茶褐色土		1		D・E5・6
67	241SB067	土坑	調査区東壁にかかり、全容は不明	暗茶褐色土		1		C4・5
68		畝溝	南北に走行	茶褐色土	68→17	2		G・H4
69	241SX069	土坑		茶褐色土	69→43　69→26	2		G・H4
70		小穴		茶褐色土	94→70	2		F4
71		畝溝?		茶褐色土	71→16	2		G4・5
72		小穴		茶褐色土		2		F3・4
73		小穴		茶褐色土		2		G3・4
74		小穴		茶褐色土		2		F・G4
75		畝溝		茶褐色土	102→75	2		F3
76		畝溝		茶褐色土		2		G3
77		畝溝		茶褐色土		2		F・G4
78		畝溝		茶褐色土	78→17	2		G4
79		畝溝?		茶褐色土		2		G・H4
80		畝溝		茶褐色土		2		F・G4
81		畝溝		茶褐色土	81→91	2		F・3
82		小穴		茶褐色土	102→82	2		F3
83		小穴		茶褐色土		2		F3
84		畝溝		茶褐色土		2		G3
85		畝溝		茶褐色土	85→92	2		E→G3
86		畝溝		茶褐色土		2		G3
87		小穴		茶褐色土	100→87	2		G4
88		畝溝		茶褐色土		2		F・G2
89		小穴		茶褐色土		2		F4
90		畝溝		茶褐色土	90→42	2		G4
91		小穴		茶褐色土	81→91	2		F3
92		小穴		茶褐色砂質土	85→92	2		F3
93		小穴		茶褐色土	123→93	2		E・F5・6
94		畝溝		茶褐色土	94→70	2		F4
95		畝溝?		茶褐色土	95→114	2		F4
96		畝溝		茶褐色土		2		G2
97		畝溝		茶褐色土	97→118	2		F3
98		小穴		茶褐色土	106→98	2		E6
99	241SX099	土坑		茶褐色土		2		F6
100		畝溝		茶褐色土	100→87	2		F・G4
101		小穴		明茶褐色土		2		E5・6

大宰府条坊跡第241次調査　遺構番号台帳（4）

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の触年期に基づく

S－番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時期	地区番号
102		畝溝		茶褐色土	102→75　102→82	2		F・G3
103		溝		茶褐色土	103→48	2		E5・6
104		畝溝？		茶褐色土		2		G5
105		小穴		茶褐色土	105→65	2		E5
106		小穴		茶褐色土	106→96	2		E6
107		小穴		茶褐色土		2		E4
108		小穴		茶褐色土		2		D5
109		小穴		茶褐色土		2		F3
110		小穴		茶褐色土		2		F3・4
111		小穴		茶褐色土		2		F4
112		小穴		茶褐色土		2		E5
113		小穴		茶褐色土		2		F4
114		小穴		茶褐色土	95→114	2		F4
115		畝溝？		明茶褐色土	85→115	2		E・F3
116		小穴		茶褐色土		2		E3
117		畝溝？		茶褐色土		2		E4
118		畝溝		茶褐色土	97→118	2		E・F3
119		小穴		茶褐色土		2		E6
120		小穴		茶褐色土		2		E6
121		小穴		茶褐色土		2		D4
122		小穴		茶褐色土		2		D4
123	241SD123	溝		茶褐色土	123→125　123→93	2		F・G6
124		小穴		茶褐色土	124→37	2		G5
125		小穴		暗茶褐色土	123→125	2		F・G6
茶褐色土層			第1遺構面を形成する整地層で、多くの遺物を含む。時期的には7c代から11c代のものであるが、新しいものほど多くであり、掘り込みの可能性あり。中心をなす遺物中最も新しい群は8c後半から9c代である。この層を切り込む遺構からの出土遺物も、同期のものであり、本土層は概ね該期に形成されたと推定できる。	北西部：(河川堆積) 砂層→灰褐色砂質土→茶褐色土→淡茶褐色土→灰褐色粘性土　南東部：(河川堆積) 砂層→暗灰色粘土→灰白色粘土→茶褐色砂層→茶褐色土→淡茶褐色土	左欄太字は遺物掲載土層			
灰褐色砂質土			主に調査区北西部に分布し、第2遺構面を形成する整地層である。伴う遺物は7c末～8c中頃のものである。この層を切り込む遺構からの出土遺物も、ほぼ同時期ないし9c初頭までのものである。	(河川堆積) 砂層→灰褐色砂質土→茶褐色土→淡茶褐色土	左欄太字は遺物掲載土層			

大宰府条坊跡第241次調査　出土遺物一覧表（1）

S－01　茶褐色土

須恵器	甕、坏、蓋3
土師器	鍋c、片

S－02　灰茶褐色土

須恵器	甕、坏、供膳具
土師器	供膳具、片

S－03　灰茶褐色土

土師器	甕、片

S－04　灰茶褐色土

土師器	片

S－05　暗灰茶褐色土

須恵器	甕、壺、壺b、坏×皿、皿、蓋
土師器	椀c、椀c×小皿c、小皿a1、坏a、片
黒色土器A	椀
越州窯系青磁	椀：小椀Ⅰ－2b（1点） 壺×水注：片（1点）
瓦類	片（縄目）

S－06　暗茶褐色土

須恵器	供膳具
土師器	片

S－07　灰茶褐色土

須恵器	坏c
土師器	鉢、片

S－08　灰褐色土

土師器	片
石製品	不明

S－09　暗茶褐色土

須恵器	坏
土師器	椀c、坏×小皿a、煮炊具

S－10　灰茶褐色土

須恵器	甕、坏c、蓋1・3・c、皿、片
土師器	甕、蓋3、片（角閃石）、片
瓦類	平（縄目）
石製品	不明

S－11　灰茶褐色土

土師器	坏×椀、小皿a、片
瓦類	片

S－12　茶褐色土

須恵器	甕a、片
土師器	片

S－13　灰茶褐色土

須恵器	坏、蓋3
土師器	片

S－14　明茶褐色土

須恵器	甕、坏、坏×蓋
土師器	椀c、片
瓦類	片（縄目）
その他	鉱滓

S－15　茶褐色土

須恵器	片
土師器	椀c、坏×鍋、片
瓦類	文字瓦

S－16　灰茶褐色土

須恵器	坏c、蓋
土師器	甕、皿b、片

S－17　灰茶褐色土

須恵器	壺、坏、坏c
土師器	甕、片

S－18　赤茶色土

土師器	坏×小皿

S－19　赤茶色土

須恵器	坏c、片
土師器	煮炊具
瓦類	平瓦（縄目）

S－20　暗茶褐色土

須恵器	甕、坏、坏a、蓋、蓋3、高坏
土師器	甕、坏a、供膳具
瓦類	片

大宰府条坊跡第241次調査　出土遺物一覧表（2）

S－21　茶褐色土

須恵器	甕

S－22　灰茶褐色土

土師器	片

S－24　灰茶褐色土

須恵器	坏a、蓋
土師器	片

S－25　淡茶褐色土①

須恵器	甕、壺、皿、蓋×高坏
土師器	甕、椀c、坏

S－25　淡茶褐色土②

須恵器	甕、壺、坏c、蓋3・c
土師器	供膳具、煮炊具
瓦類	瓦（磚目）

S－25　淡茶褐色土③

須恵器	甕、壺（肥後/荒尾?）、坏a・c、坏×蓋
土師器	坏a、坏c×椀c
瓦類	瓦（磚目）、片
金属製品	不明銅製品

S－25　淡茶褐色土④

須恵器	甕、坏、坏a・c
土師器	椀c、坏a、小皿c、煮炊具（角閃石）
瓦類	平瓦（格子）、片

S－25　淡茶褐色土

須恵器	甕、坏、坏c
土師器	坏×椀、蓋3、煮炊具（閃光石）、片
瓦類	平瓦（磚目）

S－26　淡茶褐色土

須恵器	甕、壺、坏、坏c、蓋、蓋1・3・a、片
土師器	甕、椀、坏、小皿a2、高台片、片
土製品	羽口
越州窯系青磁	椀：Ⅰ（1点）
瓦類	平瓦（磚目・格子）、片

S－27　暗褐色土

須恵器	甕、高坏
土師器	坏c、煮炊具（角閃石）

S－28　灰褐色土

須恵器	甕、、高坏×壺×蓋
土師器	甕（角閃石）、小甕、椀c、坏a×小皿a、片
瓦類	平瓦片

S－29　灰褐色土

須恵器	甕、壺、坏、蓋1・3、皿
土師器	甕a、坏、椀、椀c、蓋c、小皿、小皿c
石製品	砥石（1点）
越州窯系青磁	椀：Ⅱ（1点）
瓦類	平瓦（磚目）、平瓦片

S－30　暗褐色土

須恵器	甕、坏、坏c、片
土師器	坏a、片
瓦類	平瓦（磚目）

S－31　茶褐色土

須恵器	壺、坏、蓋
土師器	椀、椀c、坏×椀、片
瓦類	平瓦（磚目）

S－32　灰茶褐色土

土師器	片

S－33　灰褐色土

須恵器	蓋
土師器	甕、椀c、片

S－35　茶褐色土

須恵器	甕、壺b、坏c、蓋3、高坏、円面硯、片
土師器	甕、甕（角閃石）、坏a、椀c、皿×盤、坏×皿、高坏、片
製塩土器	焼塩壺Ⅰ×Ⅱ
黒色土器A	椀c
瓦類	平瓦（磚目・格子）、鴟尾形式軒丸瓦（海弁）

大宰府条坊跡第241次調査　出土遺物一覧表（3）

S－36　灰茶褐色土

須恵器	甕
土師器	片

S－37　灰茶褐色土

須恵器	坏
土師器	片

S－39　灰茶褐色土

須恵器	甕
土師器	甕、片

S－40　青灰色粘土

須恵器	甕、坏c、高坏
土師器	甕、甕（角閃石）、坏b
弥生土器	壺（中期）
土製品	環、不明

S－41　茶褐色土

須恵器	甕

S－44　暗茶褐色土

須恵器	甕、坏×蓋、円面硯
土師器	片

S－47　茶褐色土

須恵器	甕
土師器	供膳具

S－48　茶褐色土

須恵器	坏、坏c、蓋×坏、蓋3
土師器	坏a、坏×小皿、煮炊具（角閃石）、片

S－49　茶褐色土

須恵器	甕、坏、蓋1
土師器	坏c、片

S－50　茶褐色土

須恵器	甕、壺、坏、坏a・c・c3、蓋、蓋1・3・c、皿a、鉢b、高坏、把手、片
土師器	甕a、甕（布留）、壺、坏、坏a・c・d、蓋3・c3、皿a・b、坏×壺、皿×鍋、煮炊具（角閃石）、片
製塩土器	焼塩壺Ⅰ・Ⅱ類、片
黒色土器A	片
瓦類	平瓦（縄目）、片
その他	樹脂？、鉱滓

S－50　暗褐色土

須恵器	甕、坏、坏a・c
土師器	甕、皿×鍋、煮炊具、供膳具

S－50　灰茶褐色土

須恵器	甕、壺b、坏、坏a・c、蓋3・4、高坏、皿
土師器	甕、甕（角閃石）、片
製塩土器	焼塩壺Ⅰ、Ⅱ、Ⅱa

S－50　灰茶褐色土①

須恵器	高坏

S－50　灰茶褐色土②

須恵器	横瓶

S－50　灰茶褐色土③

須恵器	坏c

S－51　茶褐色土

須恵器	甕、坏、坏c、高坏
土師器	甕、坏a、椀c、煮炊具（角閃石）

S－52　灰茶褐色土

須恵器	甕、壺、坏、坏c、蓋3
土師器	甕a（頸部にユビオサエ）、坏a（6b期）、鉢

S－53　灰茶褐色土

須恵器	坏、蓋
土師器	片

大宰府条坊跡第241次調査　出土遺物一覧表（4）

S－54　灰茶褐色土

須恵器	甕、坏、蓋、椀×鉢
土師器	片
瓦類	丸瓦片、片

S－55　茶褐色土

須恵器	甕、甕a、甕×壺、坏、坏a・c、蓋1・2・3・c・c3・c4、皿a、鉢b、高坏、瓶
土師器	甕、坏a・c、皿a・b、煮炊具（角閃石）、片
製塩土器	焼塩壺Ⅱ－a・b、煎熬土器
瓦類	丸瓦片、平瓦（縄目）
その他	焼土塊

S－55　明茶褐色土

須恵器	甕、坏
土師器	供膳具、片

S－56　暗茶褐色土

須恵器	甕、壺、坏、蓋1・3
土師器	甕、坏、片

S－57　暗茶褐色土

須恵器	甕、壺、坏
土師器	甕、坏、蓋3、鉢×盤、片

S－58　明茶褐色土

須恵器	坏c、片
土師器	甕

S－59　暗茶褐色土

土師器	甕

S－61　暗茶褐色土

須恵器	甕、蓋×坏
土師器	甕（角閃石）、坏
瓦類	平瓦（縄目）

S－62　暗茶褐色土

須恵器	甕、壺、蓋3、坏×蓋
土師器	片

S－63　暗茶褐色土

須恵器	壺、坏、坏c、蓋、蓋（壺aの蓋）、高坏
土師器	坏c・d、片
製塩土器	焼塩壺Ⅱ－a
瓦類	平瓦（縄目）

S－64　暗茶褐色土

須恵器	甕、壺×鉢、坏、坏a、坏×皿、蓋、蓋3
土師器	甕（角閃石）、甑×甕、片

S－66　暗茶褐色土

須恵器	甕、壺、坏、蓋c、高坏、高坏？
土師器	甕、甕（角閃石）、坏、坏c、蓋3、皿a
製塩土器	焼塩壺Ⅱ－a
瓦類	平瓦（縄目）

S－67　淡茶褐色土

須恵器	壺、大坏、坏、坏c、蓋、蓋3・c3、瓶
土師器	甕a、甕（角閃石）、坏、片
瓦類	丸瓦（縄目）、平瓦片
土製品	羽口？

S－68　茶褐色土

須恵器	高坏
土師器	片

S－69　茶褐色土

須恵器	甕、壺b、壺×坏c、坏、坏a・c、蓋1・3、高坏
土師器	甕、坏×皿、片

S－70　茶褐色土

須恵器	甕、壺？、坏、坏×蓋、蓋3
土師器	片

S－72　茶褐色土

土師器	片

大宰府条坊跡第241次調査　出土遺物一覧表（5）

S－75　茶褐色土

須恵器	甕、坏c
土師器	甕、坏、片

S－76　茶褐色土

土師器	甕a（角閃石）

S－77　茶褐色土

土師器	甕a

S－78　茶褐色土

須恵器	甕
土師器	甕、供膳具

S－81　茶褐色土

須恵器	甕、甕a、坏、蓋3・c、小蓋3（口径12cm以下）、横瓶
土師器	甕、甕（角閃石）、坏、片

S－83　茶褐色土

須恵器	甕
土師器	片

S－84　茶褐色土

土師器	片

S－85　茶褐色土

須恵器	甕、壺、壺?、坏×蓋、蓋3
土師器	甕、坏、片

S－87　茶褐色土

土師器	甕

S－88　茶褐色土

須恵器	甕、坏、蓋、蓋c3
土師器	甕、坏
製塩土器	?
瓦類	片

S－89　茶褐色土

須恵器	片
土師器	片

S－90　茶褐色土

須恵器	甕、蓋1
土師器	煮炊具（角閃石）、片

S－92　茶褐色砂質土

須恵器	壺×瓶

S－93　茶褐色土

須恵器	壺、坏
土師器	甕、甕a、坏、片

S－94　茶褐色土

須恵器	甕、壺、坏、坏×蓋、蓋、蓋3
土師器	甕、皿、片
黒色土器A?	片

S－95　茶褐色土

須恵器	蓋
土師器	甕、甕a、片

S－97　茶褐色土

須恵器	蓋a、坏、坏c、蓋3
土師器	甕、甕a、坏、片
瓦類	平瓦（縄目）

S－99　茶褐色土

須恵器	甕、坏a・c、蓋、蓋3、皿a、皿a×高坏
土師器	甕a、甕（角閃石）、片

S－100　茶褐色土

須恵器	坏、坏c
土師器	皿b、片

S－101　明茶褐色土

須恵器	坏×蓋
土師器	片

S－103　茶褐色土

須恵器	蓋1
土師器	甕a、煮炊具、供膳具

大宰府条坊跡第241次調査　出土遺物一覧表（6）

S－104　茶褐色土

須恵器	甕、坏
土師器	煮炊具（片）
その他	焼土塊

S－106　茶褐色土

須恵器	甕、壺、坏、坏×蓋、蓋c、鉢
土師器	甕、坏a
瓦類	片
土製品	羽口

S－108　茶褐色土

須恵器	甕、坏、坏c、蓋、蓋c3・3、高坏
土師器	甕、坏、坏×蓋、片
瓦類	片？

S－109　茶褐色土

須恵器	坏、蓋3
土師器	甕、坏、片

S－113　茶褐色土

須恵器	坏×蓋、高坏
土師器	坏×皿、煮炊具

S－114　茶褐色土

須恵器	片
土師器	坏×皿

S－115　明茶褐色土

須恵器	甕、坏、片

S－116　茶褐色土

須恵器	片
土師器	供膳具

S－118　茶褐色土

須恵器	甕、坏、蓋c
土師器	甕a、坏、片

S－119　茶褐色土

須恵器	甕、坏
土師器	甕a、片
黒色土器A	片

S－121　茶褐色土

須恵器	坏
土師器	甕

S－123　茶褐色土

須恵器	坏、坏c、蓋
土師器	甕、坏、片
石製品	黒曜石（姫島産）

S－124　茶褐色土

須恵器	蓋3、片
土師器	甕、甕a、片

S－125　暗茶褐色土

須恵器	坏c、蓋、片
土師器	甕、片

大宰府条坊跡第241次調査　出土遺物一覧表（7）

明茶褐色土層　F・G2

須恵器	壺、壺、坏、坏c、蓋、蓋c・1・3、高坏、横瓶、瓶
土師器	壺、坏×皿、皿b
土製品	取瓶

茶褐色砂質土層

須恵器	坏c、蓋、蓋3
土師器	坏、坏a、片
椀	椀（13c後半～14c前半）
瓦類	平瓦（格子）、いぶし瓦
石製品	滑石片
白磁	椀：Ⅳ×Ⅴ類

淡茶褐色土層

須恵器	壺、壺a、蓋1・3・c・c1、坏、坏a・c、皿、壺、高坏、短脚高坏、把手
土師器	壺、壺a、椀c、椀×坏、大坏×鍋、坏×小皿、小皿a1（ヘラ）、皿、皿b、蓋3、煮炊具（角閃石）、把手
製塩土器	熱処土器
黒色土器A？	椀c
越州窯系青磁	椀：I－2bウ（1点）

茶褐色土層

須恵器	壺、壺a・b・e？・d×f、小壺、壺×壺、大壺、壺、壺a、高坏、低脚高坏、皿、皿a、鉢、鉢a3・b、坏a・c、小坏c、坏×蓋、蓋1・2・3・4・5・3・c・c1・c3・c（角閃石）・4、小蓋a3・c3、瓶、手捏ね、脚、把手、片（漆付）
土師器	壺、壺（角閃石）、壺a把手付、壺×鉢、鉢、鉢×瓶、瓶、壺、坏（畿内系）、坏c（畿内産）、坏a・c・d、坏a×皿b、皿a・b、小皿、小皿a・c、皿c×鍋、蓋3、椀c（畿内系？）、器台、把手、片
製塩土器	焼塩壺I、IIa・b、熱処土器
黒色土器A	椀c、片
越州窯系青磁	椀：I－2（9c後半）1点
長沙窯系青磁	水注（9c代）（2点）
瓦類	丸瓦、丸瓦（ヘラ記号）（行基）、平瓦（縄目・格子）（ナデ消し）、片　＊ナデ消しは8c初頭以前
須恵質土器	捏ね鉢
灰釉陶器	壺（1点）、壺（1点）、蓋（2点）、皿×鍋（1点）
国産陶器	擂鉢
中国陶器	壺：片（F群）13c代　＊F群は法量が大きい
須恵質（輸入）	新羅土器壺[多弁花文（スタンプ）二重円の回りに花弁状、]
石製品	砥、砥石、碁石（6点）、安山岩、黒曜石
金属製品	不明、棒状
土製品	取瓶、羽口（銅精錬）、鋳模造品
その他	焼土塊、鉱滓、椀形滓、炉壁？

茶褐色土層　D3－1

須恵器	横瓶、高坏、坏、蓋1、片
土師器	壺（角閃石）、片

茶褐色土層　D4－1

須恵器	壺b？

大宰府条坊跡第241次調査　出土遺物一覧表（8）

茶褐色土層　D4－3

須恵器	坏
土師器	甕a（7c後半）＝頸部内面に使がない、坏×皿、片

茶褐色土層　D4－4

須恵器	甕a

茶褐色土層　D4－5

須恵器	坏c
土師器	片

茶褐色土層　D4－6

須恵器	甕a（D4－7の甕と同一個体の可能性あり）、甕×壺、坏
土師器	甕（角閃石）、片

茶褐色土層　D4－7

須恵器	甕（D4－6の甕aと同一個体の可能性あり）、甕、蓋3、高坏、坏c、小坏c
土師器	甕（角閃石）

茶褐色土層　D6－1

須恵器	大甕、坏、坏a、蓋c

茶褐色土層　D6－2

須恵器	大甕
土師器	片

茶褐色土層　D6－3

須恵器	大甕
須恵質土器	坏（羽釜）　*脚底部拓本
灰釉陶器	甕（1点）
瓦類	平瓦（縄目・格子）、平瓦片
石製品	刀子、不明
その他	焼土塊

茶褐色土層　D6－4

須恵器	大甕、坏
土師器	煮炊具、供膳具

茶褐色土層　D6－5

須恵器	大甕
土師器	坏×皿b、片

茶褐色土層　D6－6

須恵器	片
瓦類	丸瓦

茶褐色土層　D6－7

須恵器	大甕
土師器	煮炊具、片

茶褐色土層　E4－1

土師器	鉢、片

茶褐色土層　E4－2

須恵器	坏c

茶褐色土層　E4－3

須恵器	甕

茶褐色土層　E4－4

土師器	甕

茶褐色土層　E4－5

須恵器	甕c3

茶褐色土層　E4－6

須恵器	甕

茶褐色土層　E4－7

須恵器	蓋1

茶褐色土層　E4－8

土師器	皿b、片

茶褐色土層　E5－1

須恵器	甕、坏c
土師器	皿b？

茶褐色土層　F2－1

須恵器	横瓶、大甕a、甕a、坏
土師器	甕、坏×皿b

茶褐色土層　F4－1

須恵器	甕、坏a
土師器	片

大宰府条坊跡第241次調査　出土遺物一覧表（9）

茶褐色土層　G3－1

須恵器	坏、坏c、短脚高坏
土師器	皿b、片

茶褐色土層　F2・D3

須恵器	甕、蓋3

茶褐色土層　H－1

須恵器	甕、壺、蓋1、小蓋c3

灰褐色砂質土層

須恵器	甕、壺、坏、坏c、蓋、蓋c・1・3、皿×高坏
土師器	甕、坏、坏aorb（畿文～8c初頃）、皿b
土製品	羽口

茶褐色砂層

須恵器	甕、甕a（7c）、坏×蓋、蓋3、瓶
土師器	甕・壺（古式土師器）、坏、皿b、皿b×鉢、鉢、高坏（古墳時代）、片

表土（北東端部調査区壁面）

須恵器	甕、壺、坏、坏c、蓋、皿
土師器	甕、坏a、椀c、高坏、片
瓦類	丸瓦（縄目）、平瓦（縄目）、平瓦片
その他	鉱滓

表土（調査区東壁）

須恵器	甕、甕a、壺、坏、坏c、蓋1・c・c3
土師器	甕、坏、坏a、椀c、鉢、片
土製品	羽口

表土（調査区南東壁）

須恵器	坏、坏c、蓋、蓋1・3
土師器	甕、坏a、椀c、皿×坏、
越州窯系青磁	椀：Ⅰ（1点）
瓦類	平瓦（縄目・格子）、片（縄目）
弥生土器	甕
金属製品	不明、鉱滓×不明
瓦器	椀

表土（調査区西壁）

須恵器	甕、坏、蓋
土師器	坏、把手×鍋

表土　G－1

土師器	椀、椀c（Ⅷ～Ⅸ期）、小椀c

表土

須恵器	甕、甕a・b、甕×壺、壺、壺b、坏、坏a、坏c、坏×蓋、蓋、蓋1・3、鉢（把手付）、皿、高坏
土師器	甕、甕b？、甕×鍋、甕×鉢、壺×鉢、坏、坏a、椀c、坏×皿、小皿a・a1・c、片、片（貼付突帯あり）
黒色土器A	椀、椀c
黒色土器b	椀、椀c、片
瓦器	椀
越州窯系青磁	椀：Ⅰ（1点）、Ⅱ（1点）
瓦類	平瓦（縄目・格子）、片
肥前計陶磁器	椀（近世）
国産陶器	椀×皿（近世）
国産磁器	椀（近世）、不明（近・現代）
白磁	椀：Ⅱ1（2点）、Ⅱ3（1点）、Ⅳ（1点）、Ⅴ4×Ⅷ－b（1点）、Ⅸ（1点）、片（1点） 皿：Ⅵ（1点） 他：片（広東系）、片
石製品	滑石製石鍋？、砥石（1点）
土製品	金属関連生産用具
その他	鉱滓、鉱滓？、焼土塊、タイル

攪乱　G－3・4

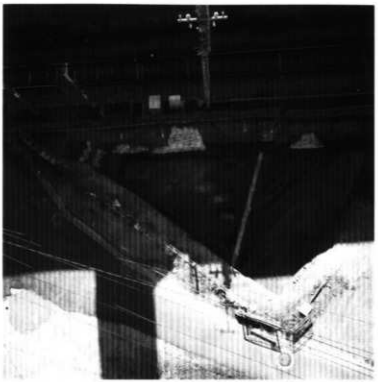
須恵器	甕、坏、坏c、蓋3
土師器	甕、甕a、片

写　真　図　版

・写真の中の番号は、図版番号を示す。

例 239-15-1

Fig.番号　挿図番号



1．大宰府条坊跡第239次調査　第１遺構面全景（上が南東）

2．大宰府条坊跡第239次調査
SD001完掘状況（南から）

3．大宰府条坊跡第239次調査
SD017完掘状況（南から）

1．大宰府条坊跡第239次調査
SD017土層観察（南から）

2．大宰府条坊跡第239次調査
SD016完掘状況（北から）

3．大宰府条坊跡第239次調査
SD019完掘状況（南から）

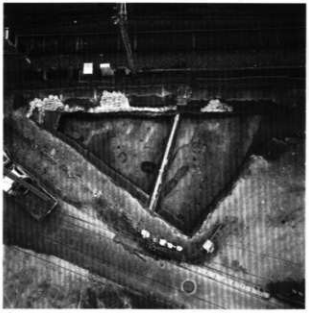
左上　1．大宰府条坊跡第239次調査
第２遺構面全景（南西から）

右上　2．大宰府条坊跡第239次調査
SD033完掘状況（南から）

右　3．大宰府条坊跡第239次調査
SD033土層観察（南から）

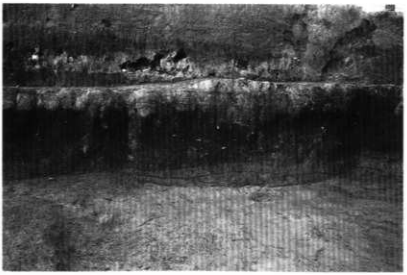
左下　4．大宰府条坊跡第239次調査
第3遺構面全景（上が南東）

右下　5．大宰府条坊跡第239次調査
SD049・SD051完掘状況（北から）

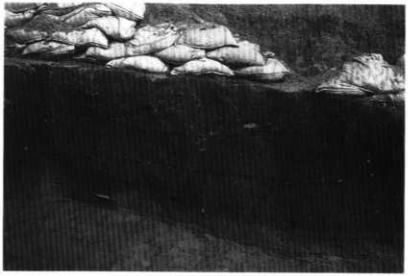


1．大宰府条坊跡第239次調査
調査区北壁土層観察①　西側
（南から）

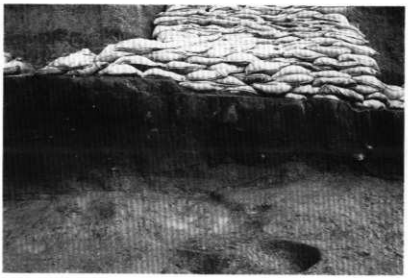
2．大宰府条坊跡第239次調査
調査区北壁土層観察②　中央
（南から）



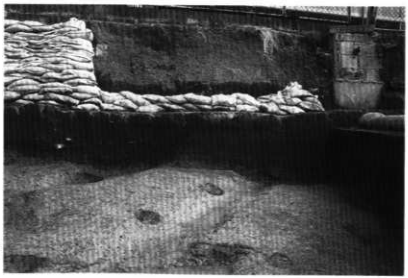
3．大宰府条坊跡第239次調査
調査区北壁土層観察③　東側
（南から）



1．大宰府条坊跡第239次調査
調査区南東壁土層観察①　東端
（北西から）



2．大宰府条坊跡第239次調査
調査区南東壁土層観察②　東側
（北西から）



3．大宰府条坊跡第239次調査
調査区南東壁土層観察③　中央
（北西から）

1．大宰府条坊跡第239次調査
調査区南東壁土層観察④　西側
（北西から）

2．大宰府条坊跡第239次調査
調査区Cライン土層観察
（北から）

3．大宰府条坊跡第239次調査
調査区全景および同第242次調査区の一部
東側（上が南東）

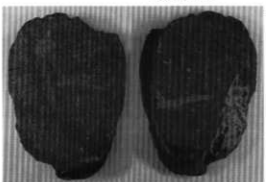
Fig.239-8-4

Fig.239-8-6

Fig.239-8-8

Fig.239-8-12

Fig.239-8-17



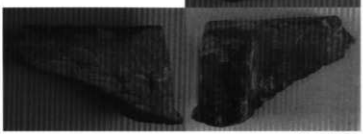


Fig.239-8-22

Fig.239-9-1

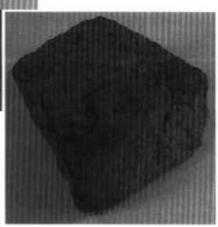


Fig.239-9-5

Fig.239-9-7

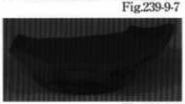


Fig.239-9-8

Fig.239-9-9

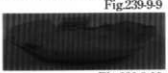


Fig.239-9-10

Fig.239-9-11

Fig.239-9-15

Fig.239-10-3

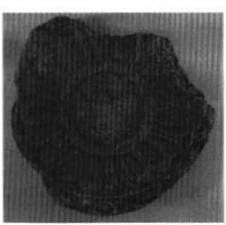
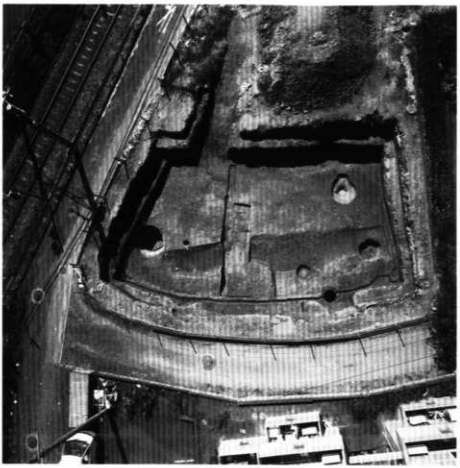
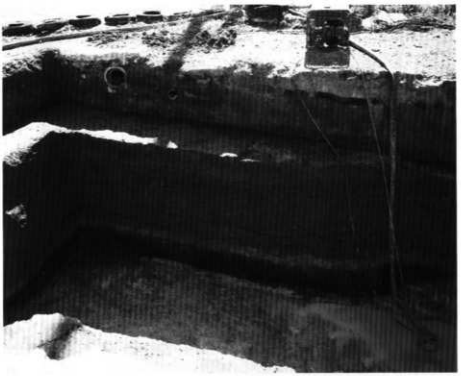


Fig.239-10-11

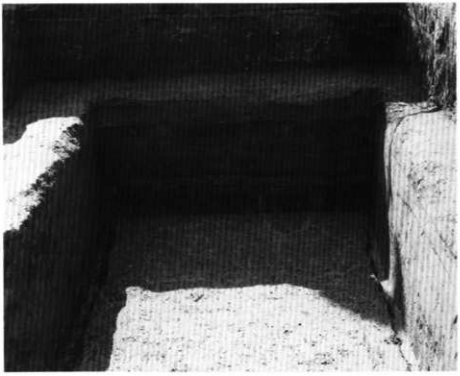


大宰府条坊跡第240次調査
第１遺構面全景（上が南）

調査区東壁土層観察
（北寄り・西から撮影）



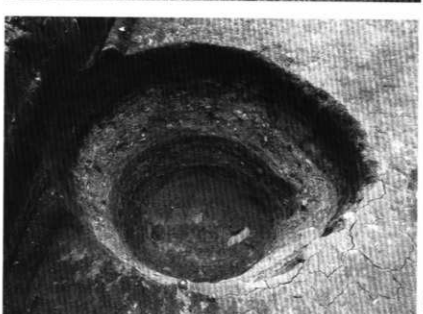
調査区南壁土層観察
（北東から撮影）



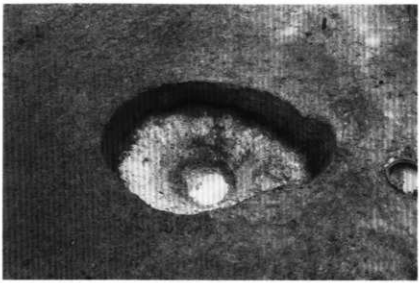
調査区南西端壁土層観察
（北から撮影）

SK-001遺物出土状況
（北から撮影）

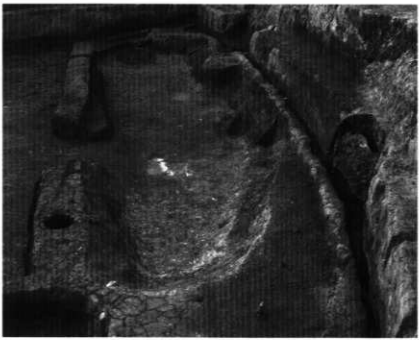
SK-001完掘写真
（北から撮影）



SK-004完掘写真
（北から撮影）



SK-005完掘写真
（西から撮影）



SK-012完掘写真
（東から撮影）

SK-013土層観察
（南から撮影）

Fig.240-8-5

Fig.240-8-19

Fig.240-8-6

Fig.240-8-8

SK-004灰色粘土
坩堝

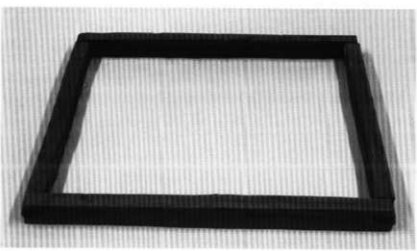


Fig.240-9-1

Fig.240-10-1

Fig.240-8-24

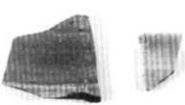
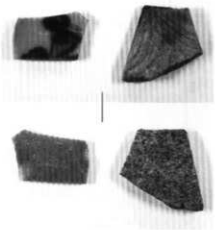


Fig.240-8-25・26



SK-010明茶褐色土
近世陶磁器

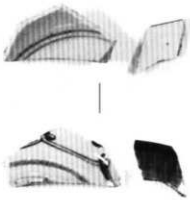


Fig.240-10-4及び
SK-010灰色土近世陶磁器

Fig.240-10-3

Fig.240-14-6

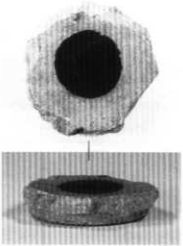


Fig.240-14-7

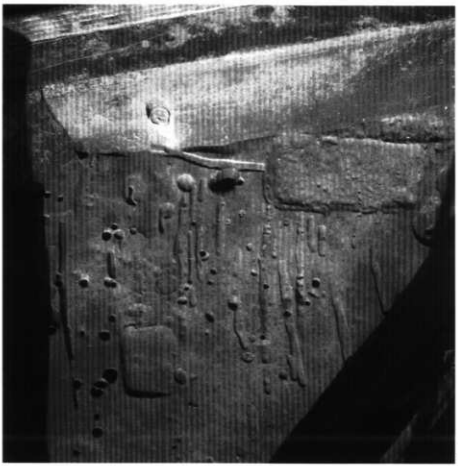
SK-012暗青灰色粘土
生産工具

Fig.240-14-9

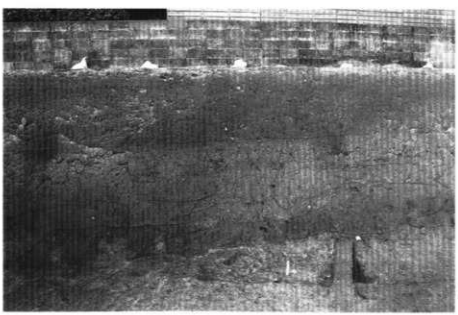
Fig.240-15-2

Fig.240-15-4

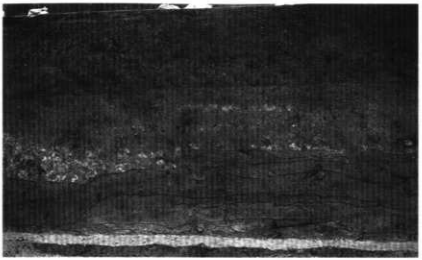
Fig.240-15-7



大宰府条坊跡第241次調査
北半部全景（上が北）

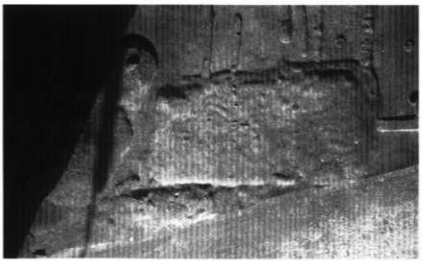


調査区北壁土層観察
（南から撮影）

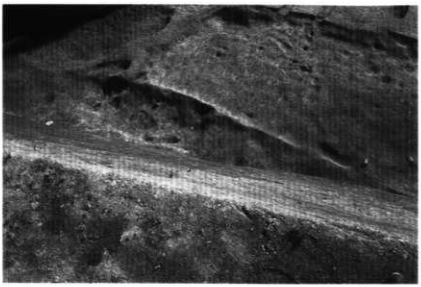


調査区東壁土層観察
（西から撮影）

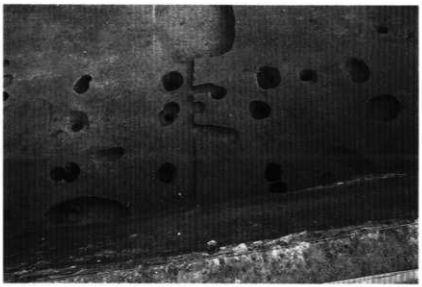
調査区中央部深掘
トレンチ土層観察
（西から撮影）



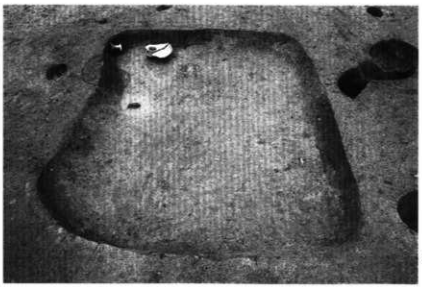
SK-025完掘写真
（北から撮影）



SD-035完掘写真
（北西から撮影）



SB-046完掘写真
（西から撮影）



SK-050完掘写真
（北から撮影）

畑の畝溝全景
（北から撮影）

第１遺構面
整地層中から出土遺物
（北東から撮影）

Fig.241-8-2 Fig.241-8-7

Fig.241-8-8

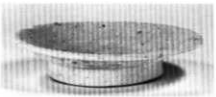


Fig.241-8-10

Fig.241-8-11

Fig.241-9-5

Fig.241-9-1

Fig.241-9-3

Fig.241-9-2

Fig.241-9-7

Fig.241-9-9

Fig.241-8-13

Fig.241-8-21

Fig.241-8-22

Fig.241-8-19

Fig.241-8-24

Fig.241-10-1

Fig.241-10-2

Fig.241-10-3

Fig.241-10-4

Fig.241-19-2

Fig.241-19-4

Fig.241-19-5

Fig.241-19-6

Fig.241-19-8

Fig.241-19-9

Fig.241-19-12

Fig.241-19-14

Fig.241-19-15

Fig.241-10-5

Fig.241-11-1

Fig.241-10-10

Fig.241-11-4

Fig.241-11-3

Fig.241-12-4

Fig.241-11-8

Fig.241-11-9

Fig.241-11-12

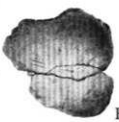


Fig.241-12-7

Fig.241-12-8

Fig.241-12-11

Fig.241-12-12

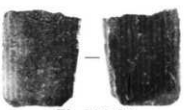


Fig.241-13-1

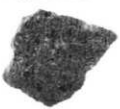


Fig.241-13-10

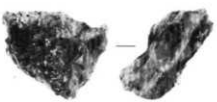


Fig.241-13-12

Fig.241-14-3

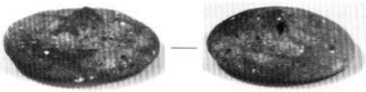


Fig.241-14-1

Fig.241-19-21

茶褐色土層一括出土

報告書抄録

ふりがな	だざいふじょうほうあと 28
書名	大宰府条坊跡 28
副書名	第239次・第240次・第241次調査
シリーズ名	太宰府市の文化財
シリーズ番号	第82集
編著者	井上信正　　作田一隆　横澤道博
編集機関	太宰府市教育委員会　　大成エンジニアリング株式会社
所在地	福岡県太宰府市関屋谷3丁目1番1号　　東京都新宿区馬場下町1番1
発行年月日	2005（平成17）年3月25日

ふりがな	条坊	所在地	コード		座標（国土座標第Ⅱ系）		調査期間		調査面積	調査原因
所収遺跡名	【篇山遺定案】		市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了	㎡	
だざいふじょうほうあと 大宰府条坊跡　第239次	左郭9・10条 5坊	太宰府市 朱雀4丁目	402214	210044－239	56099.00	-44382.00	20040720	20041221	75.08	地区道路整備事業
だざいふじょうほうあと 大宰府条坊跡　第240次	左郭11条4坊	太宰府市 朱雀4丁目		210044－240	55990.00	-44486.00	20040720	20041221	399.95	
だざいふじょうほうあと 大宰府条坊跡　第241次	左郭10条4坊	太宰府市 朱雀4丁目		210044－241	56056.00	-44429.00	20041103	20041221	310.00	

所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構	主要遺物	特記事項
だざいふじょうほうあと 大宰府条坊跡　第239次	大宰府条坊	平安	溝9	須恵器　土師器　瓦　礎石製石臼および補修品　瓦塔	3面ある遺構面のそれぞれに条坊の南北区画溝を検出した
だざいふじょうほうあと 大宰府条坊跡　第240次		平安・近世	土坑9・溝1	須恵器　土師器　瓦　石器　土製品　本銘滑器碗・瓶	調査区南半部で平安以前の地形を確認した
だざいふじょうほうあと 大宰府条坊跡　第241次		奈良・平安	掘立柱建物跡1・溝6	須恵器　土師器　瓦　石器　土製品　金属器　新羅土器・都城系土師器	第2遺構面で東西区画溝・南溝を検出した

太宰府市の文化財　第82集

大宰府条坊跡28
第239・240・241次調査

平成17年（2005）年3月

発行　太宰府市教育委員会
〒818-0198
福岡県太宰府市観世音寺1丁目1-1
編集　大成エンジニアリング株式会社
〒162-0045
東京都新宿区馬場下町1-1
印刷　明誠企画株式会社
〒208-0022
東京都武蔵村山市榎2-25-5